

第一章 末摘花の物語

[第一段 亡き夕顔追慕]

(ところで話は前後するも、昨秋八月に夕顔を亡くし、迎えた初春に、)思へども(いくら思っても)なほ飽かざりし(飽き足りぬ)夕顔の露に(はかなく散った夕顔に)後れし心地を(先立たれた日の悲しみは)、年経れど(としつきふれど、年が明けても)、思し忘れず(おぼしわすれず)、ここも(左大臣家の女君も)か시코も(六条の貴婦人も)、うちとけぬ限りの(体裁本位で)、気色ばみ(けしきばみ、気取っては)心深きかたの(こころふかきかたの、思慮深さといった方面の)御挑ましさ(おんいどましさ、御張り合いぶり)に(なのに対して)、け近く(実に親しく)うちとけたりしあはれに(睦み合った懐かしさに)、似るものなう(比べ様も無く)恋しく思ほえたまふ(其の面影を、追い求めたく御思いに成る)。

いかで(そこで何とか)、こととしきおぼえはなく(殊更取り立てた評判はなく)、いと*らうたげならむ人の(実に手を差し延べたくなる人で)、*つつましき(包ましき、人目に立たずに暮らして)*異なからむ(ことなからむ、逸材たらんものを)、*見つけてしがな(見つけてみたいものだ)、こりずまに思しわたれば(夕顔の不幸に懲りもせず思い続けていらしたので)、*「労た気ならん」は<劳しい感じで居るだろう>という言い方ならむと思うが、これをそのまま「ひと」に修辞させると、無理なく読み下せる言い換えが見つからない。「らむ」は<推量の語>と辞書にあり、<~だろう、~に違いない>という未定価値評価の推量と言い換えるべきで、<(劳し気に暮らして居る)ような>という「らし」のような既定価値基準との類比に言い換えるべきではないだろうし。と、ここで未定価値評価の推量なら、その推考者の意向が反映するであろうことに気付く。その意向が千差万別なので、「らむ」の言い換えが為難いのだろう。そこで、此処での推考者の意向を推考すれば、「いかで」「見つけてしがな」の文中対象への推量なので、「ならむ」が<そう在って欲しい>という期待の下に夢想されているものであると知れる。*此処の「つつまし」は「慎み(控え目にしている)」らしいという対象の態度ではなく、「包み(隠れている)」らしいという対象の状況である。何故なら、推考文に於ける対象の態度説明なら現在仮定の「つつまし<う>」で、状況説明に於ける過去仮定の<き>は取らない、と決め付ける。文法は良く知らないが、そう決め付けた方が意味が通る。*「ことなからむ」は「異なしく」「あらむ」である。「異なし」は「異なり(特に優れて、または劣って、いる)」の形容詞化とある。此処の「あらむ(~であろう)」は「労た気ならむ人」を修辞すべきと、「の」による文体語法で示されているので、「あらむ<を>」を含意する。この文の言い換えには苦勞するが、原文を声に出して読むと、何だか分かった気になる。それにしても、である。斯くも今風の言い換えが為難い「らむ」の語用について、何ら注釈や注記がないのは意外だ。実際、渋谷教授の訳文も意味不明だった。原文提供は勿論の事、教授の訳文と注釈はガイドではなく、私にとっては原書である。そして、宮脇文経氏によって再編集された Web サイトにおけるローマ字文と与謝野晶子訳文の並列表記も非常に使いやすく、かつ頼りがいのある参照である。また、他に頼りにする文献や WEB サイトも多数あるが、やはり筆頭は小学館古語辞典である。辞典は多くの古文を分析して語彙の意味や用法を整理してある、後人の読者の理解を助ける先人の知恵である。それらを使って、自分なりに読み進んでいる。が、時に壁に当たる。今回のように訳文と大きく異なる解釈に至る場合である。そんな時に救われるのが、野村竜夫氏の Web サイトにある解説なのである。此処でも大意を得た。*「見つけてしがな」は、「見付けて」「しがな(みたいものだ)」とのこと。「しがな」の「しが」は「しか」と同語で、過去助動詞「き」の変形「し」の假定形、とあるが今ひとつ分かり難い。言い換えて考えてみれば、「見つけてし」は<見つけてみた>で、「見付けてしか」は<見付けてみたなら、どんな良いだろう>から<見つけてみたい>に転意した、とい

うところか。「な」は今でも使う強意語。 【2010. 3. 19. 記。上記4点のノートは、「蓬生」巻を読むために本巻の読み直しに迫られたが、早速に此処の文の言い換えが分かり難く、その訂正の為に再考して付記した。ところで、この文の記述は「箒木」巻での「雨夜の品定め」に於いて、頭中将が藤式部丞の家をからかうように言った「世にありと人に知られず、さびしく荒れたらむ(あばれたらん、荒れ果てた)葎の門に(むぐらのかどに、雑草茂る門の家に)、思ひの外に労甚気(らうたげ、庇いたくなる程の可憐な様子)ならむ人の閉ぢられたらむ(世間を避けてひっそり暮らす姿)こそ、限りなくめづらしくは思えめ(おぼえめ、思えるものです)。いかで(どうして)、はた(また)かかり(このような行き掛かりに)けむと(なったのかと)、思ふより違へることなむ(思ひの外のことなので)、あやし(妙に)心とまる(心に残る)わざなる(ものです)。」という語りを、そのままなぞるような文で、源氏と中将との確執の根の深さ、または夕顔も含めた確執の意味を作者は読者に問いかけている、のかも知れない。】

すこしゆゑづきて聞こゆるわたりは(幾らか風雅を心得たと噂されるあたりには)、御耳とどめたまはぬ隈なきに(お聞き逃しになる抜かりも無くて)、さてもやと(もしやこれがそうかと)、思し寄るばかりの(見当をお付けになるほどの)けはひあるあたりにこそ(気配がある相手であったならば)、一行(ひとくんだり、短い手紙)をも(でも送って)ほのめかしたまふめるに(気を引いて御覧に為るが)、なびききこえずもて離れたるは(引き受け申さず遠ざける事など)、をさをさあるまじきぞ(先ず無いだろうというのが)、いと目馴れたるや(もう見慣れた事で)。

つれなう心強きは(無反応一方で気張っている女は)、たとしえなう情けおくるる(呆れるほど風情の無い)まめやかさなど(生真面目さだったり)、あまりもののほど知らぬやうに(あまり人生の意味を知らないやうで)、さても(かといってそのまま)過ぐしはてず(意地を通し切る事も無く)、名残なくくづほれて(跡形なく挫かれて)、なほなほしき方に(有り触れた男と)定まりなどするもあれば(一緒に為ってしまう者も居たり)、のたまひさしつるも多かりける(声を御掛けに為った切りの女も多く在りました)。

かの空蟬を(その所為か頑なさを貫く彼の空蟬を)、ものの折々には(折に触れては)、ねたう思し出づ(憎らしく思い出し為さる、ので御手紙をお書きになる)。荻の葉も(軒端の荻と詠んだ伊予介の娘の所にも)、さりぬべき風のたよりある時は(夫の少将が仕事で留守になる事を聞き付けたりすれば)、おどろかしたまふ折もあるべし(不意に訪れ為さる時もあるでしょう)。火影の乱れたりしさまは(碁打ちを静かに照らした火影を闇で揺らした面影は)、またさやうにても(またそのやうにして)見まほしく思す(目交ってみたいと御思いに為るのです)。おほかた(大概は)、名残なき(跡形も無く)もの忘れをぞ(目交いの情を忘れてしまうことなど)、えしたまはざりける(まず為されなかつたので御座います)。

[第二段 故常陸宮の姫君の噂]

左衛門の乳母(さゑもんのめのと)とて(と言って)、大弐(だいに、尼になった大弐の乳母)のさしつぎに(の次に)思いたるが(源氏が大切にお思いだった者の)女(むすめが)、大輔の命婦(たいふのみやうぶ)とて(と言って)、内裏にさぶらふ(帝に女房仕えをしていたが)、わかむどほりの(王家血筋の)兵部大輔(ひやうぶのたいふ)なる(を父とする)女なりけり(娘であった)。いといたう(これがまた実に)*色好める(いろこのめる、床上手の)若人にてありけるを(若女房だったので)、君も召し(源氏も催しの始末に部屋に呼んで)使ひなどしたまふ(御用立てて御出ででした)。

*「色好めるを召し使ひ」は上品に言い換えても＜多情な女を用立てる＞で、下品に云えば＜ヤリマンで抜く＞だから、大輔の命婦を＜召し人＞だとして紹介している。「召人(めしうど)」は公式な職責ではないので、その呼称が文中で使われていないからといって、別に作者が伏せたワケでは有るまい。寧ろ此処の書き方からは、些かの勿体付けも無い明け透けな気分を感じる。まるで、「ここらで一つバレ話を伺いましょう」くらいの口上だ。「色好める」の＜好色＞が子孫繁栄や一族血統の権力構造を支える根幹として大事だと声高に謳う文化に於いて、上品も下品も些末な意識なれば、斯く在るも至極当然か。ただ、父帝の若女房を召し使うは少なからず大胆かと。

母は(源氏乳母にして命婦実母たる左衛門乳母は今は兵部大輔とは別れて)*筑前守(ちくぜんのかみ)の妻にて、下りにければ(西国へ行っていたので)、父君の*許(もと、生家)を里にて(里下がりの住まいとして)行き通ふ(大輔の命婦は御所に通勤していた)。 *注に＜大輔命婦の母親である左衛門乳母は筑前守と再婚しての意。兵部大輔の生活ぶりは、あまりおもわしくなかったようである。財力のある地方官と再婚した中流の女房の実生活面をうかがわせる。＞とある。 *「もと」は今日では場所を指すなら＜親元＝生家＞が一般的で、「父の生家」と言えば普通は＜祖父の家＞かと思う。特に「注」が無いのが不思議だが、後述で兵部大輔と故常陸宮の縁故については「親子らしいが不明」と注釈されている。

(その家には)故常陸親王(こひたちのみこ)の、末に(すゑに、晩年に)まうけて(儲けて)いみじう(非常に)かなしう(心を砕いて)かしづきたまひし(大切に御育てになった)御女(おんむすめ、姫君が)、心細くて(心細げに)残りゐたるを(一人遺されて居る事を)、ものついでに(この側寝語りのつなぎの話題に)語りきこえければ(命婦がお聞かせ申したところ)、あはれのことやとて(劳しい事だと)、御心とどめて(源氏は気にされて)問ひ聞きたまふ(少しお尋ねになった)。

「心ばへ容貌など(気立てや顔立ちなど)、深き方はえ知りはべらず(良くは存じません)。かいひそめ(ひっそりと)、人疎う(人付き合いもせず)もてなしたまへば(お暮らしなので)、さべき宵など(御会いすべき夕べも)、物越しにてぞ(几帳を隔てて)、語らひはべる(御話し致します)。*琴(きん、七弦)をぞ(だけを)なつかしき語らひ人と(親しいお話し相手と)思へる(御思いのようです)」と聞こゆれば(と命婦が申し上げると)、 *注に＜「琴」(きん)は七絃琴をさし、当時は弾く人がまれであった絃楽器。この物語では源氏や皇族の一部の人々が弾く楽器である。＞とある。特別な楽器だとしたら、この命婦の言葉が図らずも源氏の興味を誘うという仕掛け。

「*三つの友にて(みつのともにて、琴は白楽天が琴・酒・詩を人生の三つの友と言った揃い物なので)、*今一種や(いまひとくさや、もう一つ友にするのは)うたてあらむ(差し障りが有るだろうか)」とて(とした上で)、「我に聞かせよ(障りなくば今一種に我をして姫の琴を聞かせるように手配しなさい)。父親王の(ちちみこの)、さやうの方に(管絃に)いとよしづきて(良く長けて)ものしたまうければ(御出でだったので)、おしなべての手にはあらじ(その娘なら並みの腕前では無いだろう)、と*なむ思ふ(と思うからな)」とのたまへば(と源氏が話されたので)、 *注に＜「三の友」とは、琴・酒・詩をさす。『白氏文集』巻第六十二「北窓三友」にもとづく。＞とある。 *「今一種や転て有らむ」は＜もう一つ如何ですか＞くらいの語感か。是を宴席で采女が言えば酒を勧めていると思うが、聞で男が女に言えば＜この一物は嫌いかな＞と事に及ぼうとしている枕絵が浮かぶ。多分そんな雰囲気を持った言い回しで、召し人に話している設定からも其を読者が感じる事を狙って、「三つの友にて」を前置きすれば源氏の教養人振りを演出できそうなこの場面で、作者は此処ぞとばかりに是を使った、のでは有るまいか。しかし残念ながら私は一読では、その面白さを実感することはできなかった。それが分かる宮廷人の常識を私は持っていないのだから。

また言葉としても「うたてあらむ」は分かり難い。「うたて」は<思わぬ方に事が転じる>が原義らしく、「うたてあり」で<悪い方に進む=差し障りがある>となるらしい。「らむ」は推量で<～だろう>。で、「うたてあらむ」は<差し障りが有るだろう→嫌だろう>となり、「今一種<や>」の反語助詞を受けて<嫌だろうか>となるが、話し言葉での「や」「む」の定型句化を汲めば<失礼ですが厭でなければ如何ですか>というくらいの意味になると思う。ただ、「いまひとくさ」の方は感触が有る。今でも「今ひとつ」と言えば、<もう少し足りない>または<もう少し欲しい>という不足感から<もう少し加えたい>意識を感じる。「ひとくさ」は滅多に使わないし、「ひとくさり」や「ひとくせ」との混同かも知れないが、幾らかの質感はある。ともあれ、「いまひとくさ」の感触を頼りに少し夢想したが、余りにも当てずっぽうの解釈に我ながら不安を感じて、野村童夫氏の Web サイトに救いを求めた。すると、氏の解説は実に理詰めで大筋では私の解釈を許容していると思うので、むしろ言い換えは氏の説に沿って改めた。*「なむ」は<「ぞ」に似た強調>と辞書にあるが、内容自体の強調ではなく、そういう内容なのだから>と他者の理解や動作を強く促す言葉だろう。此処では「我に聞かせよ」を、ほぼ強要する。

「*さやうに(そのように)*聞こし召す(入れ込み為さる)ばかりにはあらずや(程の相手では無いのではないかと)はべらむ(存じますが)」と言へど(と命婦が言うのが)、御心とまるばかり聞こえなすを(源氏には殊更妙な言い回しと御気に為されて)、*「さやうに」は<そんな風に特に気にして何もわざわざ>という一般的な言い方ではある。しかし、源氏はわざわざ<演奏に長けていた父親王の娘ならきっと上手いだろうから>と既に言っている。ということは、姫の事を「深き方はえ知りはべら」ぬ筈の命婦が、姫の演奏を殿が「聞こし召すばかりにはあらず(御聞きになる程の事もない)」と言ったのでは、源氏にも故常陸宮にも姫にも失礼である。では、何を「さやうに」なのか。それは、「我に聞かせよ」の「我」が「今一種」になろうと乗り気であること、をである。それなら命婦は、姫自身を殿が「聞こし召すばかりにはあらず(御召になる程の事もない)」と言った意味になり、姫には全く失礼ながら召人たる命婦らしい厚かましきで殿の入れ込みを皮肉ったことになる。しかし、それなら姫を「深き方はえ知りはべらず」と言った命婦の言い做しに作意を感じる。それが源氏の「御心とまるばかり」である。事ほど然様に此処の文は、というか本巻は艶笑譚であり落語であるので全編を通じてだが特に此処は、話し言葉の言い回しが洒落言葉になっていて、其の場での其の遣り取りだからこそ意味が成立する可笑しきで語られているので、原文のままでは笑えないと作者の作文の甲斐が無い。つまり当時の読者だけが味わえた面白さであり、本来は言い換えは不可能である。しかし、意味が伝わらなければ味わいを仮想する事すら出来ないのも、此処は直の味わいを諦めて意味で言い換える。*「聞こし召す」は<「聞く」の尊敬語「きこす」に「見る」の尊敬語から転じた「めす」の複合したもの>と大辞林にあるが、「聞こす」と「召す」の複合意というより、「聞こす」と「召す」のどちらの意味に於いても更に丁寧にした言い方かと思う。だから意味としては、時に<御聞きに為る>であり<御召になる>であって、特別の意味になるとすれば、その場での言い方の妙だろう。

「いたう(ずいぶん)けしきばましや(思わせぶりだな)。このころの*おぼろ月夜に忍びてものせむ(近頃の春先に良くある朧月夜に夜這いを仕掛けてみよう)。*まかだよ(では然様心得て、下がりにさい)」とのたまへば(と源氏が仰せになったので)、*「おぼろづきよ」は春先の生温い南風で湿気の多い霞掛かった夜にぼんやり出る月。ところで、「忍びてものせむ」を<こっそりと琴を聞きに行こう>という表意だけで済ませてしまうのは、此処では避けたい。源氏が姫の<琴を聞く>ということは、源氏が「今一種やうたてあらむ」の「一種」に成る、即ち姫の男友達に成る事を意味する。「我に聞かせよ」が隠語として響くのは、当時の宮廷内だけであって、今風の言い換えは表意だけでは成立しない。それに、「忍びて(夜に女の家忍び込んで)ものせむ(情交する)」は、それ自体で歴然たる「夜這い」の意味であり、本巻の主題とも言うべき重要な語用である、と私は思う。*「退出よ」の逐語訳は<さ、下がりにさい>で、此の逐語にこそ召人の悲哀が凝縮されている、と私は味わう。召人の御用が済んだから御役御免であり、普段なら冷たい意味は無く、源氏からすれば<気持ちよく射精でき

た。有難う>くらいの挨拶で、命婦にしても自立した自由人を自負していたらろうから<一仕事終えた充実感>を覚える清々しい言葉の筈だ。しかし、この日の「まかでよ」は殿の忍びを取り次ぐ女房の役を仰せ付かって自由人の自負が砕かれ、王家血筋ながらも使用人に過ぎない立場を思い知らされたばかりか、つい今しがた自分の掌で猛り狂った殿の男臭さへの陶醉感を他の女に自ら譲る切なさまで噛み締めさせられる。ドラマだ。

わづらはしと思へど(命婦は面倒な役を仰せ付かったと思ったが)、内裏わたりものどやかなる(御用も暇な)春のつれづれに(春の麗らかなある日に)*まかでぬ(源氏の仰せを心得て宮邸に帰りました)。 *「まかでぬ」自体は帰宅する命婦の姿である。その行動描写だけで心理描写仕切った見事な筆致。なのだが、やはり直前の「まかでよ」と源氏に言わせた言葉が効いている。

父の大輔の君は(命婦の父君は)他にぞ(他の女の所で)住みける(暮らしていた)。ここには時々ぞ通ひける(此の宮邸には偶に様子を見に通うだけだった)。命婦は、継母のあたりは住みもつかず(父君が暮らす継母の家には住み付かず)、姫君の御あたりをむつびて(故常陸宮の姫君が住まう父君の生家を慣れ親しんで)、ここには(此方のほうに)来るなりけり(来て暮らしていた)。 * 此処の文節について、注は<命婦は父親に従って継母のもとには住まず、こちらに来るのであったの意。以上から、『集成』は「兵部の大輔は宮家とよほど縁の深い人(末摘花の兄か)と考えられる」と解す。『完訳』は「宮家の縁者らしい。一説には宮の子、末摘花の兄とするが、未詳」と注す。>とある。私は先に、<命婦の里住まい>が「父君の許」とあることから<祖父の家>と考えたが、実は本文は其の直後に「故常陸親王の末に儲けて齋みじう愛なしう傳き給ひし御女」と姫宮を紹介していて、「父の大輔の君」が<故常陸親王の長>らしき書き方になっている。訳注が「未詳」とあるものを、素人の私が「兄宮」だと断じる根拠など有る筈も無いが、「未詳」なら否を断じられてもいないのだから、私が「父宮」を姫の「兄宮」だと勝手に思い込む分には支障は無さそうだ。ならばこの際、「命婦」は姫の兄筋の従姉妹と思い切って読み進む。

[第三段 新春正月十六日の夜に姫君の琴を聴く]

のたまひしも(仰せ言の)しるく(通りに)、*十六夜の(いざよひの、新春正月十六日の夜の)月をかしきほどに(生暖かく心浮き立ち霞で謎めいた朧月の日に)おはしたり(源氏は故常陸宮邸に御出ましになった)。 *「十六夜の月」は日没後に後れがちに出る月齢十六夜の月で、「後れて出る」ことから「気後れ」「ためらい」を修辭する、らしい。そして当然に、此処では陰暦の日付を示す。そして「月をかしき」は、源氏が先に命婦に「のたまひし」「このころのおぼろ月夜に忍びてもものせむ」の「しるく(予定通りに)」である。

「いと(これはまた)、かたはらいたきわざかな(余り都合が良く有りません)。*ものの音澄むべき夜のさまにもはべらざめるに(曇りがちで湿気が多いので琴の音が冴える夜では御座いませんののに)」と聞こゆれど(と命婦は申し上げたが)、 *「もののね」の表意は「琴の音」である。源氏も表向きは<こっそりと姫の琴の腕前を聞きに来ている>し、命婦ともども事の運びは其の建前で進めると了解している。腹意は「忍びてもものせむ」だが、様々な状況に臨機応変で言い逃れや遣り直しが利くように「粗筋」を用意する、というのは有り触れた处世だろう。だから「ものの音澄むべき夜のさまにもはべらざめるに」は、腹芸では<すんなりと床入りできる首尾ではありません>と命婦は源氏に報告している、と言う事は読んで置かねばならない。後に続く此処の段の命婦と源氏の会話は全て、「姫の琴を聞く」を<姫の色事のあたりを探る>を腹言として読まない消化不良を起こす。というか、自然に其の意味を感じる。

「なほ(いいから)、あなたにわたりて(姫の所に行って)、ただ一声も(せめて一節だけでも)、もよほしきこえよ(弾かせてみてくれ)。むなしくて帰らむが(聞かずに帰ったのでは)、ねたかるべきを(つまらないから)」とのたまへば(と源氏が仰るので)、

うちとけたる住み処に(命婦は此処の散らかった自分の部屋に)据ゑたてまつりて(源氏の君を御残し申すのは)、うしろめたう(気が引けて)かたじけなしと思へど(相済まなく思いながらも)、寝殿に参りたれば(姫君が居る正殿に様子を見に上がると)、まだ格子もさながら(まだ格子の葺戸を日中さながらに上げ開いたまま)、梅の香をかしきを(姫君は梅の良い香りが漂う庭を)見出だして*ものしたまふ(一興と見て花見して居らした)。よき折かな、と思ひて(命婦は、今が丁度良い頃合かとみて姫君に)、 *「物す」は、此処ならく見物する。

「御琴の音(おんことのね、貴方の七弦琴が聴けたら)、いかにまさりはべらむと(どれほど更に良くなることだろうか)、思ひたまへらるる夜のけしきに(存じませらるる今宵の庭の風情に)、誘はれはべりてなむ(誘い出されて参りました)。心あわたたしき出で入りに(日頃忙しく宮仕えに出入りして)、えうけたまはらぬこそ口惜しけれ(ゆっくり貴方の演奏を御聞き出来ないというのが残念で為りません)」と言へば、

「*聞き知る人こそあなれ(そうですか、でも、)。百敷に行き交ふ人の(あなたのように宮廷に出入りするような洗練された人が)聞くばかりやは(聞くほどの腕前では、無いけれど)」とて(と言って姫君が)、召し寄するも(琴を用意させると)、*あいなう(命婦は源氏の期待外れを予感して)、いかが聞きたまはむと(如何お聞きに為るか)、*胸つぶる(気が気ではなかった)。 *原文注釈に依るとく『異本紫明抄』は「琴の音を聞き知る人のありければ今ぞ立ち出でて緒をもすぐべき」(古今六帖、琴)を指摘。>とある。味わい深い注釈で、姫は「音の分かる人が居るなら今こそ絃を張り替えて演奏の用意をしましょう」と言う歌を引いて、命婦の所望を『聞き知る人こそ(琴が分かる教養人だからこそ御聞きに為りたい、という)あなれ(ことですな)』、という気取った言い方で<引き受けた>、ことになる。この熟なれた応答は、自信家の言い回しに聞こえる。直後に少し謙遜するところが、ますます馴れた受け答えにも思える。ただ、恐らくはこの応答自体が常套句とまでは言えないにしても、成句のような定番の言い回しで、姫の思い上がりを示す文では無く、親しい人に強弁めいた冗談を言う可愛らしさを表現している、ように感じる。 *「あいなし」は<不本意=期待に沿わない>。 *「胸つぶる」は胸が潰れる様な自責の念、ヒヤヒヤの恐怖感である。琴の腕前自体は姫に対する評価だが、もし評価が低くて興醒めとなり源氏の機嫌を損ねたとすれば、段取りを含めて、結果として思わせ振りに姫を紹介してしまった事に成る命婦の責任になる、との思い。

ほのかに搔き鳴らしたまふ(姫が軽く爪弾き為さるのが)、をかしう聞こゆ(風情が漂った)。何ばかり深き手ならねど(特段の名手ではなかったが)、ものの音がらの筋ことなるものなれば(由ある七弦独特の唐風の音色だったので)、聞きにくくも思されず(興醒めはしなかった)。

「いといたう(とてもひどく)荒れわたりて(一面に荒れすすんだ)寂しき所に(静まった此処の場所では)、さばかりの人の(常陸宮ほどの人が)、古めかしう(昔風に)、ところせく(堅苦しく)、かしづき据ゑたりけむ(姫君を大切に育て上げ為された)名残なく(甲斐も無く)、いかに思ほし残すことなからむ(どんなに思い残しが御有りだった事だろう)。かやうの所にこそは(こうした寂れた場所柄には)、昔物語にも(昔話だと良く)あはれなることども(恋物語などが)ありけれ(あつ

たりするが)」など思ひ続けても(などと源氏は思い連ねては)、ものや言ひ寄らまし(話し掛けてみようか)、と思せど、うちつけにや思さむと(昔風に育った相手に軽々しく思われそうで)、心恥づかしくて(気後れして)、やすらひたまふ(ためらい為さる)。

命婦、才ある(かどある、勘の働く)者にて、いたう(源氏には余り)耳ならさせ(長くお聞かせ)たてまつらじ(致さずに置こう)、と思ひければ(と気を回して姫君に)、

「曇りがちにはべるめり(曇って来たようで御座います)。客人(まらうと)の来むとはべりつる(が来る事に為っております)、*いとひ顔にもこそ(部屋を外して居りますと態と避けたようにも思われて、不都合ですので失礼致します)。いま心のどこかにを(またゆっくりと、お聞かせ下さい)。御格子参りなむ(格子戸は下ろして置きましょう)」とて(と言って)、いたうも(琴をいくらも)そそのかさで(弾かせない様に)帰りたいれば(部屋に戻ったので、源氏は)、 *「いとひがほ」は「いとふ(厭ふ)」「顔」で<厭な顔=避けたい様子>。

「なかなかなるほどにても(これからと言う所で)止みぬるかな(終わってしまったものだな)。もの聞き分くほどにもあらで(まだ良く分からないままで)、ねたう(残念だ)」とのたまふ、けしきをかしと思したり(好印象をお持ちでした)。

「同じくは(どうせなら)、け近きほどの(ごく近くの襖越しにでも)立ち聞きせさせよ(盗み聞きさせてくれ)」とのたまへど(と源氏は仰るが)、*心にくくてと思へば(命婦はそれは少しと思つて)、 *「ころにくくてとおもへば」とは如何にも分かり難い。「ころにくくおもへば」なら<深く配慮して>でその中身が、源氏の仰せを<随分性急なと思つて>なのか、自分が<良く承知したことと思つて>なのか、意味はともかくも命婦の思いに違いない。しかし、「ころにくく(てと)おもへば」と「てと」があるので、「(と)おもへば」は命婦が主語で良いとして、誰が何を「ころにくく」し「て」いるのかが分かり難い。そこで、命婦が「～と思へば」の「～」を探るために、「と思へば～」の「～」を見つめる。すると次の文で、命婦は源氏に「うしろめたきさまにや」と「立ち聞き」を諫めている。そして源氏は、その命婦の諫めに「あはれに思さるる人の御ほどなれば」と納得して、この日は是で引き上げる事にした。この「あはれに思さるる人の御ほど」は<深く同情できる姫の御人柄>という言い方だが、<深い同情>は<憐れみ>ではなく<同じ宮家として軽々しく振舞えない立場への深い理解>であり、そう理解できる「御ほどなれば」高い身分同士として、礼儀をわきまえた歌の贈答で心を通わすと言う気品有る手順に則って恋を進めよう、と源氏は思い直した。だから「立ち聞き」などという下世話な所業は、「うしろめたきさま(端ない真似)」なので、慎むべきだと気付く。しかし、だ。私には、命婦が貴人の慎みを本気で源氏に訴えた、とは到底思えない。命婦自身は家柄としては宮家を背負ってはいないかもしれないが、血筋は王家で有り貴人たるに十分なのだが、その生き方に慎みは無い。命婦が貴人の慎みを持ち出したのは方便であり、源氏も本気で慎み深く振舞おうとしたのではなく、その趣向に乗った、のだろう。では、この時の命婦の心理や思惑は如何いうものだったのか。行き当たりばつたりの命婦の対応を見れば、姫や源氏への気遣いは二の次で、単に失敗を恐れていたに過ぎない、としか思えない。命婦にとっては、姫と源氏の恋の行方は、突き詰めて言えば、如何でも良い。だから、姫に源氏の意向を伝えてもいないし、当然に姫は準備不足というか準備など無い。その所為で、如何なっても良いものの、悪い事態は避けたいので、このまま二人を近付ける事に命婦は漠然たる不安を抑えがたい。と言って、この場を如何したいとか、事態を如何進めようとかいう方針は無い。ただ、自分の失点だけを避けたい一心で、無責任に狼狽しているばかりだ。つまり「ころにくくて」は源氏や姫の思いでは無く、命婦自身が不安の余り「立ち聞き」の御膳立てを<したくなくて>でも<断れなくて>とにかく何とか<この場を切り抜きたい>、という思いを示す。

しかし、<この場を切り抜きたい>「と思へば」だけでは、「うしろめたきさまにや」を言う合理性が説明できていない。何が足りないのか。もう一度、筋立てを見直してみよう。「とおもへば」に続いて、命婦が「立ち聞き」などく見つとも無い>と言ったら、源氏は命婦が姫に話を通してないなどとは思わないから、勿体を付ける趣向かと勘違いして、この日は遣り過ごした、という話の運びに為っている。この筋立てを成立させるには、「うしろめたきさまにや」と言う前に<苦し紛れに>という説明が欲しい。斯くして、「こころにくくて」の言い換えは、<この場を切り抜きたい(と思へば)苦し紛れに>とせざるを得ない。ということは、「とおもへば」の言い換えが<苦し紛れに>となるワケで、「こころにくくて」だけが分かり難かった、ワケではなかった。と、分かったつもりで「こころにくくてとおもへば」を<この場を切り抜きたい苦し紛れに>と言い換えてみると、如何にも印象が違う。下手な意識と言うより、是は後文を先読みして整合性に走った穿ち過ぎだ。<苦し紛れに>とまで言ってしまつては、読者が読み進む興味が半減する。作者は筋立てとしては当然この内容を意図するが、読み手にはあくまでも結果として、命婦が<苦し紛れに>言った台詞で斯様に話が転がった、と読んででもらいたい筈だ。となると、この時点では後の展開を予感させる言い方で<この場を切り抜きたい>命婦が<話を逸らした>という文意になれば良い。なるほど「こころにくくて」を、立ち聞きの御膳立てをするのは<どうも不安なので止めさせたい>と思ったが、そうは言えない>、という命婦の思いを丸々<この場を切り抜きたい>と言ってしまうと、<苦し紛れに>とまで説明せざるを得なくなる。だから、思いの一部の<どうも不安なので>だけと言って<止めさせたい>を含意させれば、その思いのまま命婦が咄嗟に後の台詞を吐いた事に成る脚色だ。ただ、今風の言い方として<どうも不安なので>「とおもへば」では<止めさせたい>を含意できない。そこで<マズい気がするから止めさせたい>を含意する<それは少し>を当てて、「こころにくくてとおもへば」を<それは少し>とて<と>と言い換えると、口を濁した分かり難さまで伝わる、とさえ思う。ところで、「こころにくくてとおもへば」とは如何にも分かり難い、と冒頭に掲げたが、当時の読者には「こころにくくてとおもへば」という言い方で、この長々とした事情が寸也と理解できた筈で、絶妙な表現だったに違いない。何故なら、命婦のこの無責任さが本巻の笑い話の縦軸だからである。

「いでや(いえ其れはとても)、いと(本当に)かすかなるありさまに(弱々しげに)思ひ消えて(気分も沈み)、心苦しげに(世間を憚るように)ものしたまふめるを(お暮らしなのに)、うしろめたきさまにや(立ち聞きは不謹慎かと)」と言へば、

「げに(確かに)、さもあること(そうかも知れない)。にはかに我も人もうちとけて語らふべき人の際は(簡単に打ち解け合つて語り合える身分なら)、際とこそあれ(其れは其れまでの分際なわけだ)」など、あはれに(疎かに出来ぬと)思さるる(思い遣られる)人の御ほどなれば(姫の御身分なれば)、「なほ(では)、*さやうのけしきを(我が趣向を承知している事を)ほのめかせ(それとなく御伝え申せよ)」と、語らひたまふ(と仰せになる)。 *「然様の景色」は何を指すのか。答えは文脈の中に有る。此処で源氏が口幅たく語る身分をわきまえるお付き合いなるものは、源氏が一人合点した趣向ないし茶番である。源氏は姫を掘り出し物だと思っている。いや少なくとも、そう思いたいと思っている。雛には稀な秘めであつて、安っぽくない教養のある良女であつてほしい。じらされるほど、勝手に値を吊り上げる上得意の金ヅルである。だから源氏は、その趣向は姫に仕向けられたものだと思っている。命婦の出任せに源氏がまんまと乗つかった誤解と錯覚の物語である。もう、こうなつたら、信ずる者は救われるのである。源氏の中では「然様の景色」は<姫の意向を承知している事>になっている。

また(他の)契りたまへる方やあらむ(近くの懇意の女の所へ行く気なのか)、いと忍びて(ごくひっそりと)帰りたまふ(源氏はお帰りになる。その姿に命婦が、)。

「主上の(うへの、帝が)、まめにおはしますと(君を真面目すぎると)、もてなやみ(お困りのように)きこえさせたまふこそ(仰せられるのが)、をかしう思うたまへらるる(おかしく思われまする時が)折々はべれ(間々御座います)。かやうの御やつれ姿を(こうした君の御忍び姿を)、いかでかは御覧じつけむ(帝はどのように御覧になられますやら)」と聞こゆれば(と申せば)、たち返り(源氏は命婦近くに立ち返って)、うち笑ひて(にっこりと)、

「異人(ことびと、其許以外の人)の言はむやうに(が言うかのような)、咎なあらはされそ(咎め立てを為さいまするな)。これを徒々しき(あだあだしき、色事遊びの)ふるまひと言はば(仕業だと言うのなら)、女のありさま(ある女の行状と来たら)苦しからむ(それはもうひどいことになりまするぞ)」とのたまへば(と言い為さるので)、あまり色めいたりと思して(命婦は自分の性反応が激しすぎると源氏が御思いになって)、折々かうのたまふを(度々このように御からかいになるのが)、恥づかしと思ひて(決まり悪くて)、ものも言はず(言葉が次げない)。

(すると源氏は)寝殿の方に、人のけはひ(姫君の様子を)聞くやうもやと(窺おうかと)思して(お思いになって)、やをら立ち退きたまふ(徐に向かわれた)。*透垣の(すいがい、隙間を多くした垣根の)ただすこし(ほんの少し)折れ残りたる(朽ち残った)隠れの方に(物陰に)、立ち寄りたまふに(身を寄せなさんと)、もとより立てる男ありけり(先に隠れ立っていた男が居た)。誰れならむ(誰だろう)。心かけたる(既に姫に気のある)好き者ありけりと思して(色好みか居たのかとお思いになって)、蔭につきて(源氏は更に奥まって)立ち隠れたまへば(身を潜めていたが、その男は)、頭中将なりけり(頭中将なのであった)。*「透垣」は敷地境界の外垣根ではなく、庭に配した間仕切りや一定の目隠しの飾り垣根。中将は無断で敷地内に立ち入っていた事になる。

この夕方(この夕方、中将は源氏と)、内裏よりもろともにまかでたまひける(御所から一緒に退出為されたが、源氏が)、やがて大殿にも寄らず、二条院にもあらで、引き別れたまひけるを(分かれて行きなさんのを)、いづちならむと(何処へ向かわれるのかと)、ただならで(気に為って)、我も行く方あれど(自分にも行く所があったが)、後につきてうかがひけり(後を追って様子を窺っていた)。あやしき馬に(中将はみすぼらしい馬に)、狩衣姿のないがしろにて来ければ(狩装束の無造作ななりで来ていたので)、え知りたまはぬに(源氏は気付かずにて)、さすがに(そのまま)、かう(この)異方に(ことかた、見知らぬ屋敷に)入りたまひぬれば(お入りに為ったので)、心も得ず思ひけるほどに(中将は事情が分からないまま)、ものの音に聞きついて立てるに(琴の音を耳にして此処に立っては)、帰りや出でたまふと(源氏が帰りに出てくるのを)、下待つなりけり(隠れて待っていたのだった)。

君は(源氏はまだ其の男を)、誰ともえ見分きたまはで(誰とは見分け為されないまま)、我と知られじと(自分の正体を知られまいと)、抜き足に歩みたまふに(抜き足で庭を離れようとしたが)、ふと寄りて(男が不意に近付いて来て)、

「ふり捨てさせたまへるつらさに(振り切り為さる連れなさに)、御送り仕うまつりつるは(御送り申す遣る瀬無さ)。

もろともに大内山は出でつれど、入る方見せぬいさよひの月」(和歌 6-1)

一緒に御所は出たけれど、姿くらますいさよひの月」(意訳 6-1)

*大内山(おほうちやま)は仁和寺(にんなじ)の山号、とある。仁和寺は「京都市右京区にある真言宗御室(おむろ)派の総本山。宇多天皇が光孝天皇の志を継いで仁和4年(888)完成。讓位後、東寺の益信(やくしん)を戒師として出家、一字を設け御座所として住んだので、御室御所と称した。(Yahoo辞書)」とある。更に「御所」の事、ともある。「いさよふ」は「くためらう」「ただよう」「さまよう」で、源氏ばかりか頭自身にも諸共に掛かる言葉。情景は「月と雲が大内山から出て来たが、雲に隠れてよく見えない朧月夜」という春の歌か。

と恨むるもねたけれど(と、そんな風に頭の君に情婦めかして恨まれる謂われは無いが)、この君と見たまふ(源氏は其の男を頭の君と知って)、すこしをかしようなりぬ(心外と安堵の絢交ぜに可笑しみも覚えられて、)。「人の思ひよらぬことよ(私が如何しようとする他人の知ったことか、と、誰も気付かないような頭君の尾行は油断ならない、との複意)」と憎む憎む(複意に対する重複)、

「里わかぬかげをば見れどゆく月の、いるさの山を誰れか尋ぬる」(和歌 6-2)

「照らして渡る月影の、隠れた山は其々の着き」(意訳 6-2)

*情景は「どの里も出れば明るい月の夜、入れば何処も闇の夜」という朧月夜の頼りない風情だろうか。注釈は、《源氏の返歌。贈歌の「入る」「月」の語句を用いて返す。「里」は頭中将の「大内山」(宮中)に対して用いた。「かげ」は月の光の意。自分を月に、山を女の家に喩える。「里分かぬ影」とはどの女性にも遍く情をかける自分だというユーモアをまじえたのろけを見せる。「いるさ」は「入るさ(時)」と「入佐」の掛詞。また「入佐の山」は但馬国の歌枕。女の家まで後を付ける者がいるかと難じた歌。》、とある。

「かう慕ひありかば(こう後を付け歩いたのは)、いかにせさせたまはむ(如何なされる御心算かと御身を案じ申したからです)」と聞こえたまふ(と頭は源氏に御答え申し、)。

「まことは(本来なら)、かやうの御歩きには(こうした御忍び歩きには)、隨身からこそ(随員の働き次第で)はかばかしきこともあるべけれ(事が上手く運ぶというものです)。後らさせたまはでこそあらめ(供は置き去りにせず御連れ頂くことが肝心です)。やつれたる御歩きは(身分を伏せてのお忍びは)、軽々しき事も出で来なむ(不測の事態も在り得ますので)」と(と頭は更に)、お返し(尾行した自分の後ろめたさは棚に上げて、却って尾行された源氏の手抜かりの方を)いさめたてまつる(御注意申し上げる)。

かうのみ(こう簡単に)見つけらるるを(後を付けられてしまったのを)、ねたしと思せど(小癩な事とお思いだったが、自分の些細な不用意を暴かれた源氏は、暴いた頭の君が)、かの撫子はえ尋ね知らぬを(真実に探し出すべきであろう実の子の撫子の居場所は未だ突き止めていない事を)、重き功に(然も自分の大手柄のように)、御心のうちに思し出づ(内心には思い出し為されて溜飲をお下げに為った)。

[第四段 頭中将とともに左大臣邸へ行く]

おのおの(それぞれに)契れる方にも(忍び通う宛てはあったが)、*あまえて(この妙な成り行き
の興に乗じて)、え行き別れたまはず(今更別々に向かう事もせず)、一つ車に乗りにて、月のをか
しきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿(おほいどの、岳父邸=左大臣家)におはしぬ。
*「甘ゆ」は含みの多い言葉のようだが、責務の怠りを許してもらい、または免除してもらおうという期待や態度だろ
うか。此処は<図に乗る>の意を、更に広げて<興に乗じる>と抉じ付けた。

前駆(さき)なども追はせたまはず(先払いに御帰りを申し上げさせも為さらず)、忍び入りて
(静かに入って)、*人見ぬ(人目の無い)廊に(らう、渡殿に)御直衣ども召して(家着を持ってこさ
せて)、着替へたまふ(着替えなさる)。つれなう(そして何の事も無く)、今来るやうにて(今来た
かのように)、御笛ども(お二人で横笛を)吹きすさびておはすれば(吹き興じて御出でになると)、
大臣(おとど、岳父の左大臣が)、例の聞き過ぐしたまはで(例によって聞き過ぎて御出でにな
れず)、高麗笛(こまぶえ、短筒横笛を)取り出でたまへり(源氏の所に持って出て来なさる)。い
と上手におはすれば(源氏は笛の名手だったので)、いとおもしろう吹きたまふ(其れは見事に吹
きなさる)。御琴召して(おんことめして、源氏は弦楽をお招き為されて)、*内にも(夫人の居間
の御簾の内からも)、この方に心得たる人びとに弾かせたまふ(演奏に長けた女房たちに御弾かせ
に為る)。 *「人見ぬ廊」が何処なのかサッパリ分からない。中門廊は玄関先のことらしいが、「人見ぬ」が偶々そ
の時に人目が無かったということなら其処でも良いのかも知れない。其処で着替えを済ませて、正殿近くの庭先の
渡り廊下へ移って笛を吹いたのだろうか。そんな風に勝手に考えてみるが、絵が見えないと情緒が仮想出来ないの
でこういう書き方は現代人には、というか少なくとも私には分かりにくい、というかつまらない。 *「内」とは、御
簾の内、女君の居室、とある(小学館古語辞典)。

中務の君(なかつかさのきみ、という)、わざと琵琶は弾けど(正式に琵琶を弾く女房が居たが)、
頭の君心かけたるをもて離れて(頭の君が思いを寄せていたのを遠退けて)、ただこのたまさかな
る(源氏との希な)御気色の(おんけしき、情交の)懐かしきをば(温もりだけは)、え背ききこえぬ
に(とても御断り申し上げられないのを)、おのづから隠れなくて(次第に周囲に知られて)、*大
宮なども(おほみや、大奥様までも)よろしからず思しなりたれば(気を悪くされるに至って)、も
の思はしく(気が塞がり)、はしたなき心地して(居た堪れない気分で)、すさまじげに(折角の宴
にも気乗りせず)寄り臥したり(力なく横になっていた)。絶えて(いっそ)見たてまつらぬ所にお
目に掛かる事も無い所へ)、かけ離れなむも(暇乞いをしようかとも思うが)、さすがに心細く思
ひ乱れたり(其れでは寂しい人生と思ひ悩んだ)。 *「大宮」は帝の妹宮にして左大臣の正妻なる、頭の君
ならびに源氏の女君の母上。で、正に「内」の人であり、心得た人びとに合奏を命じたにも関わらず、筆頭たるべき「中
務の君」は立場無く臥せっていた、という語り。是で何となく左大臣家の源氏を取り巻く雰囲気伝わる。

君たちは(源氏の君と頭の君は)、ありつる(先程の故常陸宮邸での)琴(きん、七絃琴)の音を思
し出でて、あはれげなりつる(物悲しげだった)住まひのさまなども(屋敷の暮らしぶりなども)、
やう変へて(風変わりで)をかしう(面白そうに)思ひつづけ(思っていて)、「あらしごと(一
つの筋立てとして、仮に自分が)、いとをかしうらうたき人の(とても美しい可憐な女が)、さて
年月を重ねみたらむ時(あの屋敷で長年暮らしていようという時に)、見そめて(見つけて好きに
なると)、いみじう(相当本気に)心苦しくは(思ひ悩んだら)、人にも(他人から)もて騒がるばか

りや(何かと混ぜ返されたりするのは)、わが心も(思えばどんなに)さま悪しからむ(体裁悪くなることだろう)」などさへ(などと立場を変えて)、中将は思ひけり(頭の君は思い巡らした)。この君の(そして源氏が)かう気色ばみ(如何にもそれらしい顔つきで)ありきたまふを(出向かれた事を考えると)、「まさに(本当の所は)、さては(あれだけの事に)、過ぐしたまひてむや(してなど置かないだろう)」と、なまねたう(妬み半分に)危ふがりけり(危ぶんでいた)。*此処の文は一見すると、何を分かり切った事を口説口説と言っているのかと思えて、反って意味が分かりにくかった。中将は君の後を付けた時点で、それくらい事は想像していただろうに、と思ったからだ。しかし、それは読み手の早合点だった。中将は女遊びだろうとは思っただろうが、それにしても随員なしとは怪しいし、嫌味ではなく半ば本気で無用心に見えたかもしれない。そして今に至るまで源氏は本心を語らず、ほんの気紛れ程度で言い逃れて、後は当たり障りの無い話でお茶を濁した次第。だから中将はつらつらと源氏の思惑を推し量って、透垣で見た源氏を「かう気色ばみ」と思い至った、と言う文なのだろう。だから、次の文へと続く。

その後、こなた(源氏の君からも)かなたより(頭の君からも)、文などやりたまふべし(故常陸宮の姫君に手紙など御遣りに為るようだ)。いづれも返り事見えず(どちらにも返事が無く)、おぼつかなく(訳が分からず)心やましきに(腹立ち気味に)、

「あまりうたてもあるかな(全く心外だな)。さやうなる住まひする人は(ああした侘び住まいをする女なら)、もの思ひ知りたるけしき(物思いに耽る心模様や)、はかなき(ほんの少し移ろう)木草(木や草の)、空のけしきに(空模様に)つけても(つけての)、とりなしなどして(連歌などを交して)、心ばせ推し測らるる(相手の気持ちが忸ばれる)折々あらむこそ(折々が在ってこそ)あはれなるべけれ(愛着も湧こうというものだ)、重しとても(重々しいにも程があつて)、いとかうあまり(ここまでひどく)埋もれたらむは(引込思案では)、心づきなく(気心が知れず)、悪びたり(嫌になる)」と、中将は(と頭の君は)、まいて(源氏の君より激しく)心焦られ(こころいられ、苛立って)しけり(いたのだった)。

例の(そして持ち前の)、隔てきこえたまはぬ心にて(明け透けな御気性で)、「しかしかの返り事は見たまふや(彼の姫君からなにがしかの返事は在りましたか)。試みにかすめたりしこそ(私も試しに手紙を送ってみましたが)、はしたなくて(返事が無いので)止みにしか(止めてしまいました)」と、憂ふれば(と愚痴り為さると)、

「さればよ(やはりそのように頭の君は彼の姫君に)、言ひ寄りにけるをや(言い寄っていたのか)」と(と源氏は内心で頭の君の手回しの良さに舌を巻きながら)、ほほ笑まれて(逆に表情を隠すような和やかさで)、「いさ(いやさて、どうでしたか)、見むとしも(特に返事を見たいとも)思はねばにや(思っていなかったの)、見るとしもなし(見てもいません)」と(と然も返書が在ったかのように空惚けて)、答へたまふを(答えなさるので)、「人わきしける(姫は人を分け隔てした=差を付けられた)」と思ふに(と思えば頭の君は)、いとねたし(実に妬ましい)。

君は(源氏の君の方は)、深うしも(然程深くも)思はぬことの(思い入れていなかった相手の)、かう情けなきを(こうした返事の無さを)、すさまじく(興醒めに)思ひなりたまひにしかど(思っで見限り掛けて御出での所に)、かうこの中将の言ひありきけるを(このように改めて頭の中將が言い出して来たので)、「言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし(言葉多く言い寄った方にこそ

女は靡くものだろう)。したり顔にて(頭の君に女をものにされて)、もとのことを(そもそもの経緯を)思ひ放ちたらむけしきこそ(蔑ろにされた様になっては)、憂はし(うれはし、惨めな)かるべけれ(気分させられる)」と思して(とお考えになって)、命婦をまめやかに語らひたまふ(大輔の命婦にじっくりと相談なさる)。

「おぼつかなく(訳も無く)、もて離れたる(無視なさる)御けしきなむ(御様子なのが)、いと心憂き(全く心外です)。好き好きしき方に(私をただの浮気者と)疑ひ寄せたまふにこそあらめ(疑い為されているに違いない)。さりとも(そんな風に)、短き心ばへ(移り気など)つかはぬものを(致さぬものを)。人の心の(相手の性格が)のどやかなることなくて(性急で)、思はずにのみあるになむ(思う様にならない事があると)、おのづから(どうしても)わがあやまちにもなりぬべき(私の所為ということに成ってしまうのです)。心のどかにて(もし姫が温厚で)、親はらからの(親兄弟の)もてあつかひ(世話に)恨むるもなう(煩わされる事も無い)、心やすからむ人は(親しみやすい人ならば)、なかなかなむ(存分に)らうたかるべきを(可愛がってやりたいものだが)」とのたまへば(と仰れば、命婦は答えて)、

「いでや(さあどうでしょうか)、さやうに(そのように)をかしき方の(風流めいた)*御笠宿り(おんかさやどり、雨宿り処)には、えしもやと(とてもとても)、つきなげにこそ(相応しくない)見えはべれ(存じます)。ひとへにもものづつみし(内気一辺倒で)、ひき入りたる(引籠もると言う)方はしも(点に於いては)、ありがたうものしたまふ(有り得ないほど頑なな)人になむ(方で御座います)」と、見るありさま語りきこゆ(見たままをお話し申し上げる)。 *「御笠宿り」については注に<源氏の立ち寄り所という意を優雅に言ったもの。催馬楽「妹が門」の「婦が門(いもがかど)夫が門(せながかど)行き過ぎかねてや(ゆきすぎかねてや)我が行かば(わがゆかば)肱笠の(ひちかさの)肱笠の(ひちかさの)雨も降らなむ(あめもふらなむ)郭公(しでたをさ)雨やどり(あまやどり)笠やどり(かさやどり)舎りてまからむ(やどりてまからん)郭公(しでたをさ)」の歌句。>とある。ざっとこの歌謡を見れば、<懐かしい情人の家は素通りしにくいもので、未練を振り切って行けば俄か雨に遭って肱で雨を避けるに違いない、そしてその肱で涙を拭う事になるのだから、やっぱり寄って行こう>とまあ、大らかで陽気で呑気な如何にも宴席に持って来いの文句だ。ここで郭公という漢字で表記される鳥はカッコウではなく、同系統ながら一回り小さいホトトギスをいう、とのこと。カッコウは閑古鳥らしい。では、なぜホトトギスが「しでたをさ」なのか、というより正しくは「しでたをさ」という歌の文句をなぜ「郭公」と表記するのか、と言う事だが、それはホトトギスの鳴き声を昔は「しでたをさ」と聞いたから、ということらしい。この歌謡では、その鳴き声を真似て囃し言葉にしているのだろう。「しでたをさ」の意味は諸説有るようだが、此处では鳴き真似と考えておけば良さそう。それで十分に馬鹿らしい。なにしろ、ホトトギスは五月雨の季節鳥だから、この歌の情緒を彩る。なおこの催馬楽は、「若紫」巻でこの同年十月下旬にまだ十歳ほどの若紫と初めて添い寝した朝の、さすがに子守りに終わった物足りなさに、帰りがけに馴染みの女の門前で立ち寄りを求めた歌を供人に歌わせた時の、その歌の下敷きにも使われていたが、どうやら今は北山へ赴く前の五月雨を先取りした二月下旬あたりらしく、時系としては此方が先で話が前後している。因みに早朝の不意な源氏の訪問に、かの女は冷かしお断りと追い返した。そして源氏は、十一月初旬に若紫を攫った。

「老老じう(らうらうじう、世間に通じた)、かどめきたる心は(如才無さでは)なきなめり(無い様だ)。いと*子めかしうおほどかならむこそ(とても子供っぽい大らかさが)、らうたくはあるべけれ(可愛いらしいところだ)」と思し忘れず(と源氏は夕顔を偲んで)、のたまふ(仰る)。 *今が今、命婦がきっぱりと姫の事を「ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ」と断っているのに、源氏は

その短所まで斯くも長所だと夢想する。実際には手応えが余りにも少なく、印象も薄いようなのに、夕顔を慕う余りに自己暗示から抜け出せないようだ。

(そして源氏の君はその後、既に見て来た様に)瘡病み(わらはやみ、発熱)にわづらひたまひ(を患われたり)、人知れぬ(秘めた)もの思ひの(藤壺への思いに)紛れも(囚われたりで)、御心のいとまなきやうにて(目まぐるしく日を重ねて)、春夏過ぎぬ(春夏が過ぎたので御座います)。

[第五段 秋八月二十日過ぎ常陸宮の姫君と逢う]

秋のころほひ、静かに思いつづけて、*かの砧の音も耳につきて聞きにくかりしきへ(昨秋の彼の五条の夕顔の家で聞いた砧の音が耳障りだったのが)、恋しう思し出でらるるままに、常陸宮にはしばしば聞こえたまへど(源氏は常陸宮の姫君に夕顔の面影を求めてだろうか幾度も手紙を送ったが)、なほおぼつかなくのみあれば(一向に意を汲んだ返事の無い儘だったので)、世づかず(只ならぬ頑なさが)、心やましう(忌々しく)、*負けては止まじの(根負けするまいとの)御心さへ添ひて(意地も出てきて)、命婦を責めたまふ(命婦に詰め寄られた)。*夕顔との最後の逢瀬は昨秋八月十五日から十六日だった。*「負けては止まじ」の底意には、命婦の言い逃れを源氏が誤解したく姫との貴人ごっこがあるのだろう。それ故に、此処に命婦を問い詰め、命婦は言い訳する。

「いかなるやうぞ(如何いう事だ)。いとかかる事こそ、まだ知らね(全く此処まで無視されたのは初めてだ)」と(と源氏が)、いともものしと(実に不愉快に)思ひてのたまへば(思って御述べに為ると)、いとほしと思ひて(命婦はとても気まずく)、

「もて離れて(姫には殿との御縁を掛け離れた)、似げなき御事とも(不釣合いな事などとは)、おもむけはべらず(御話し致しておりません)。ただ、おほかたの(何事にも)御ものづつみのわりなきに(内気一辺倒で)、手をえ(お返事を全く)さし出でたまはぬとなむ見たまふる(差し上げ為さらないのだと推察いたします)」と聞こゆれば(と申し上げれば)、

「それこそは世づかぬ事なれ(だから、そういう所こそがどうかしているんだ)。物思ひ知るまじきほど(恋路を知らぬ子供やら)、独り身をえ心にまかせぬほどこそ(親掛かりで自分独りの思い通りに出来ない内なら)、ことわりなれ(其れも分かるが、しかし私は姫が)、*何事も思ひしづまりたまへらむ(何事も慎重に御考えなのだろう)、と思ふこそ。(と思えばこそ、)そこはかたなく(何時とも目途の立たないまま)、つれづれに心細うのみおぼゆるを(日頃に頼りないばかりに思いながらも)、同じ心に答へたまはむは(いつか気持ちが通じて御返事がいただけたら)、願ひかなふ心地なむすべき(思いが適うものと思って、待ち続けてきた)。*私は此処で、自分のノートのオカゲで、笑えた。そして次の文からは、もっと笑える。

何やかやと(如何こうと事細かな)、世づける筋ならで(床入れの準備という事では無しに)、その荒れたる簀子に(せめて縁側からでも姫と御話しできるように)たたずまほしきなり(邸内に案内して貰いたいのだ)。いとうたて(このまま何の返事も無しでは、私は全く心外で)心得ぬ心地するを(とても納得できないので)、かの御許しなくとも(姫の御承知が無くて)、*たばかれかし(近くで話が出来るように取り計らって貰いたい)。心苛られし(思うように話が進まぬからとて、苛立ち紛れに)、うたてあるもてなしには(邸内で粗暴なふるまいには)、よもあらし(私は

決して及ばない)」など(などと源氏は)、語らひたまふ(御話しになる)。*「たばかれかし」は<命婦の一存で取り計らえ>である。何故源氏が此处まで言うのかは、<姫が望んだ貴人ごっこに今まで付き合ったのだから>と言う思いからであり、命婦にはそれが理解できたからである。そして是は推測に過ぎないが、このとき命婦は恐らく、源氏なら頑なな姫をも何とか手懐けてくれるだろうと思ったのかもしれない。もう、そう期待するしかなかったとも言える。姫も自分と同じ女なんだし、と言う所か。然し、姫と命婦とでは、深窓の令嬢と召人として、相当に違う性格に語られてはいるが。これも笑える。

なほ(なにしろ)世にある人のありさまを(世間に在る女の評判を)、おほかたなるやうにて聞き集め(万遍無く聞き集めて)、耳とどめたまふ(目星を御付けになる)癖のつきたまへるを(癖が源氏には御在りになるので)、*さうざうしき(発情を催した)宵居(よひみ、宿直日の淑景舎での召し使いの際)など、はかなきついでに(果敢ない寝物語の戯れ言に)、さる人こそとばかり(こういう姫も居るとだけ)聞こえ出でたりしに(御話し申した心算だったのに)、かくわざとがましうのたまひわたれば(其れを殊更に取り立てて、このように逢瀬の手引きを求め続け為されるのを)、なまわづらはしく(命婦は傍迷惑にも思い)、*「さうざうし」は<物足りなくて、そわそわして>いるのである。源氏がそういう状態になっている宿直日の様子を召人の命婦が語る、とは如何いう事なのか。添い寝をしているのは自明である。以って斯かる言い換えと成る。

*女君の御ありさまも(抱かれる姫の御様子も)、*世づかはしくよしめき(遊び上手の風流めかし)などもあらぬを(などではないので)、*なかなかなる導きに(自分の中途半端な手引きで)、*いとほしき事や見えむなむ(痛い目に遭いはしないか)と思ひけれど(と思ったが)、君のかうまめやかにのたまふに(源氏がこうも本気で御話し為さるので)、聞き入れざらむも(意向を聞き入れず面会の手引きをしないでは)、*ひがひがしかるべし(行き掛り上済まされなかった)。*「をんなぎみ」は情婦である。人身御供ではないが、命婦が何を心得ていたかが明示されている。*「よづかはし」は「世付き(世慣れた、男女の情に通じた)」「がまし(ますます程度の進む)」の発音変化、だろう。「よしめく」は<風流を気取る>と古語辞典にある。「よづかはし」<「よしめく」で<世慣れては風流めく>で、まるで命婦自身の様。*「なかなかなるみちびき」は<不十分な性教育>だが、逐語の味わいを取る。*「いとほしきこと」は<気の毒な事>や<可哀相な目>だが、それが床の不始末から味わった<痛い思い>なのか、不首尾による<御見限り>なのか、もっと漠然と<失恋>なのか、その他かは不明。無難に<痛い目>。*「ひがひがし」は<ひねくれている>ともあるが、<正常な状態でない>ともあり、源氏と命婦の主従関係を思えば、この場合は夕顔の幻影に<ひねくられた>源氏の曲解が社会的には<正常な状態>と見做され、それに背く事は最早「かるべし(許されない)」という、非常に<ひねくられた>言い方になっている。つまり、「ひがひがしかるべし」は<正常でないことは許されない→正しくなくても源氏には逆らえない→行き掛り上済まされない>と解す。

父親王(ちちみこ、父宮の)おはしける折にだに(御存命中でも)、旧りにたる(ふりにたる、時代遅れの実勢が衰えたのに格式ばかり高い)あたりとて(所だからと)、おとなひきこゆる人もなかりけるを(訪問客も敬遠がちだったが)、まして、今は浅茅(あさぢ、草生す里を)分くる人も(分け入って訪ねて来る人など)跡絶えたるに。(あとたえたる、絶えて無いというのに、)

かく(斯くも)世に(この世の中に)めづらしき(在り難い)御けはひの(光源氏の御気配が)、漏りにほひくるをば(時々届くお手紙に染みた香から微かに偲ばれる事から)、生女ばら(なまをんなばら、駆け出しの生半可な女房たち)なども*笑み曲げて(手放しで喜んで)、「なほ聞こえたまへ

(ぜひ御返事為されませ)」と(と姫君に)、そそのかしたてまつれど(お勧め申したが)、*あさま
しう(姫君は極端に)ものづつみしたまふ心にて(引籠もり為される御性格で)、*ひたぶるに(一向
に御手紙を)見も入れたまはぬなりけり(御覧に為る事すら無かった)。*「ゑみまげて」は<笑い顔で
眉が曲がって>と古語辞典にある。ということは、<表情が崩れるのも厭わないで=我を忘れて=手放しで>とい
う表現。*「あさまし」は今なら、あきれほどさもない、というところだろうか。「さもない」は<卑しい>感じが
して、姫にはそぐわない。しかし<卑しさ>は狭量の表れ、と解せる。狭量ゆえに<極端な態度を取る>とは、言
えそうだ。*「ひたぶる」は<一向に、ひたすら>と古語辞典にあり、これも狭量を思わせる。

命婦は、「さらば(それでは)、さりぬべからむ折に(不適當では無かろうという頃合を見計ら
って姫に源氏からのお申し込みをお伝えして)、物越しに聞こえたまはむほど(几帳越しの御面会
まで手立てすれば)、御心につかずは(後は殿御本人の御気持ちで、気に入らなければ)、さても
止みかねし。(それまでで終わるだろうし、)また、さるべきにて(そのまま事が運んで)、仮にも
(一時的だとしても)おはし通はむを(御通いに為るのを)、とがめたまふべき人なし(お咎め出来
為さる人は居ない)」など(などと)、あだめきたる(色事慣れした)はやり心は(早合点で)うち思
ひて(独断して)、*父君にも(姫の兄宮たる命婦の父君にも)、かかる事なども言はざりけり(こう
した事情などは話さなかった)。*「父君」を文面どおりに命婦の父としてだけの縁故と考えると、随分唐突
な引き合いに感じる。「父君」は恐らく「とがめたまふべき人」なのであり、であれば、やはり姫の後見筋たる兄宮な
のだろう。ただし「父君」には、後見できる財力が無く、実質では後見者ではない。だからといって「あだめきたる」
一存で、妹宮の一身上の大事を兄宮に知らせないとは、命婦は相当な「はやりごころ(軽率)」である。大体が、命婦
は無責任なだけでなく、その認識がそもそもお粗末過ぎる。いくら自分と血縁が近いからといって、召人の立場と
姫宮との立場の違い、言い換えれば、其の立場が違う女を相手にする源氏の意識の違いに、余りにも鈍感である。
尤も、その鈍感さが源氏をして、大きな誤解へと導くのが本巻の筋ではあるが。戯れて云えば、命婦はまるで現代
人である。身分意識が希薄なのだ。当時の貴族の生活感からすれば、「とがめたまふべき」は「通ふ」ことには無く、
「止む」ことの方にある、はずだ。でなければ、階級秩序が保てない。そんな認識だから命婦は「とがめたまふべきひ
となし」などと、簡単に過つ。「父君」は後見財力が無くても、朝廷に源氏の社会規範違反を訴える事は出来るのであ
る。逆に言えば、あえて当時に是を語った作者は、やはり只者では無いのかもしれない。尤も私は本帖を落語と思
っており、建前(世間が納得する形)に則って事を進めないと言まじき悪いが、本音を建前とすり合わせる人間模様
は建前通りには収まらない、という実相は滑稽譚の主材料だ。元々、「召人」という立場自体がウラの実相ではある。
「王家の高貴な種付け」という言い方があるが、王家という民を率いる立場での正しい在り方として、何処にどのよ
うなく施し>をすれば<富を実現できるか>を考える事こそが主要命題であり、「種付け」はその中でも最上の<施
し>である。しかし王家の当事者、例えば帝本人、が冷静な判断を下す為には、日常に於いて個人生理としての性
欲を整理しておく必要があり、召人はその重要な職務を担っている。しかし個人の事情で政務が左右されてはなら
ない建前から表向きの地位は無いが、オモテあつてのウラとはいえ、実相ではウラあつてのオモテであり、表裏一
体の世の中なれば、語るに憚りは無用なり。なお、注にも<『集成』は「命婦の父、兵部の大輔。この書き方から、
兵部の大輔は末摘花の兄かとも考えられる」と注す。>とある。

八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の(夜更けまで月の出を待つ)心もとなきに(弱気にさせ
る暗い空に)、星の光ばかりさやけく(星だけが冴え光って)、松の梢吹く風の音心細くて(松の
小枝を揺らす風が寂しげで)、いにしへの事語り出でて(姫は昔の華やかな暮らしぶりを話し出
して)、うち泣きなどしたまふ(おもわず涙ぐまれる)。いとよき折かなと思ひて(命婦はこんな人恋

しげな夜が男が女に取り入るには、とても良い頃合と見て)、御消息や聞こえつらむ(源氏に御案内を差し上げてあったのだろう)、*例の(慣れた物腰で殿は)いと忍びておはしたり(ごく内密に御出でになっていました)。 *「例の」は逐語ならく例によっていつものように>だろうが、この言い換えでは、源氏が頻繁に常陸宮邸に通っているかのような表現になりかねない。 <いつものよう>なのは、源氏が家人の手引きで女たちの家々に忍び歩くこと、がである。其の意味合いで、「例の」を言い換えたのが<慣れた物腰>。

(夜も更けて)月やうやう出でて、荒れたる*籬(まがき、垣根)の*ほど(に寄って)*疎ましく(姫との距離を遠く感じて、焦れたく)うち眺めたまふに(源氏が屋敷内を眺めていると)、琴そそのかされて(姫が命婦の勸める儘に七弦琴を)、ほのかにかき鳴らしたまふ*ほど(控えめに爪弾き為さる音が庭に響くのは)、*けしうはあらず(良い風情だった)。 *「籬」は敷地境界の外垣根。 *「ほど」は前後への掛け言葉で、「籬のほど」は<柴垣のほとり>であり、「ほど疎ましく」は<隔たりを感じて>である。 *源氏が「うとましく」感じる「ほど(隔たり)」は<垣根から寝殿までの距離>であり、その「うとまし」さは<姫との距離を遠くに感じる>ような「焦れたい恋心」である。此処は源氏が、厭な気持ちを募らせたり、気味悪さを感じる、べき場面ではないだろう。 *此方の「ほど」は<状態>。 *「けしうはあらず」は「けし(異し、変な)」「う(状態)」「は(では)」「非ず(ない)」で、<違和感は無い=悪くは無い=まずまずだ>と、いうことらしい。

「すこし(もっと)、け近う(親しみやすい)今めきたる(今風の)*気をつけばや(感じにならないものなのかな)」とぞ(というように)、*乱れたる心には(気を揉んでいる命婦には)、心もとなく思ひみたる(そんな姫の琴の音も、頼り無く聞こえて居た)。 *「気をつけばや」は分かり難い言い方だ。口語文でもあるので、此処は先ず場面を押さえよう。姫は母屋で琴を弾いている。それを源氏は垣根越しに聞いている。そして命婦は姫の側で「思ひみたる」、とは即ち<考えて控えている>ワケだ。そして源氏が「けしうはあらず」と聞いている姫の演奏に対しての、命婦の感想がこの文である。したがって、「気」は演奏の<雰囲気>である。「付け」は命婦の目線で<無いものを有るようになる>のだから、姫自身は<成る>のである。「ばや」は<～だとしたならば、如何なる哉>が原義だろうが、口語文ゆえに定型の言い換えは無い。此処では、命婦を姫の姉貴分の立場と考えて、少し非難がましく<～にならないかな>くらいだろう。 *この「乱れたる」は<胸騒ぎする状態>で、「心には」は<～という心の持ち主の命婦には>である。そして命婦の<胸騒ぎする状態>は、「思い乱る」自念からではなく、諸事情に追い込まれた結果として引き起こされている。では何故、命婦は追い込まれたのか。それは、源氏の「勘違い」を正し切れない負い目が有るからである。そして諸事情は、命婦を取り巻く身分階級社会の在り様である。今なら、芸能界のスキャンダルに近いだろう。平民同士・平民相手の遊びには規律もないし醜聞は起きないが、貴族同士はスターだから規律違反の醜聞で地位を失いかねない。騒ぎ立てるのは例えば「父君」だが、一旦火が付けば敵はどこにでも居る。何より基本的に厄介なのは、王家の種付けを尊ぶ文化なのだろう。というわけで、姫の琴が源氏の気に入るかどうかに、一步間違えば生活基盤を失いかねない重圧を感じて、命婦は気を揉むのである。そして、どうにも頼り無く感じるのである。事此処に至って、やっとな命婦も「御心につかずは、さても止みかねし」では済まない事に気付いたか。いかにも「はやりごころ」である。

*人目しなき所なれば(宮邸の前は人通りが無くて人目なども気にしなくて良い場所柄なので、琴の音を合図に)、心やすく入りたまふ(源氏は気楽に邸内にお入りに為る)。*命婦を呼ばせたまふ(そして中門の玄関で、供人に大輔の命婦を呼び付けさせなさる)。今しもおどろき顔に(すると命婦は玄関で源氏に應對してから母屋に戻って、さも今しがた初めて知った意外な事に驚いたような顔をして姫に)、 *「ひとめしなきところ」は<人目なども無い場所>で、そのままの言い換えでも成立する。でも、絵を描こうとすると、もう少し分かりやすく、というか親切に、となると少なからず我流の言葉を付

け足して、ということは誤訳の恐れも省みず、言い換えざるを得ない。お粗末でも、何も描けないよりはマシだ。
*前項と同様の理由で、＜中門の玄関＞を勝手に場面に加えた。イメージが掴み難いので、寝殿造りの配置では東西の対屋から南庭の先へ屋根付きの渡り廊下が延びていて、その渡廊に玄関(中門、ちゅうもん)が設けられている、という説明図を参考した。それにしても、此処の文節は無駄を削ぎ落とした優れて簡潔な圧縮文なのだろうか。上流読者の常識を前提にすれば、そういう事に成るのかもしれないが、私は幼児の舌足らずな言葉を付度しているような気分さえ覚える。幼児が斯かる複雑精緻な語りをするものか、という非難は自問するが、幼児でも自分の主張は言い切るかもしれない。むしろ、幼児こそ我が儘な云い立てをしそうだ。つまり、相手の事情を考えない、実に光る可愛い源氏の物語らしい語り口だ。

「*いとかたはらいたきわざかな(何とも傍迷惑な難儀で御座います)。*しかしかこそ(幾度もの御手紙に御返事が無い訳を、今こそはっきりさせようと)、おはしましたなれ(源氏の君がいらして御出です)。常に(ずっと)、かう(こうして進展が無く御会いできない)恨み(不満を)きこえたまふを(御訴えでしたが)、*心になはぬ由をのみ(私の一存ではの一点張りで)、辞び聞こへ侍れば(いなびきこえはべれば、御面会を御断り申して参りますと)、『みづから(直接)ことわりも(説得)聞こえ知らせむ(申し上げたい)』と、のたまひ*わたるなり(仰って御渡り為されたので御座います)。いかが聞こえ返さむ(如何お返事致しましょう)。*「傍痛し(かたはらいたし)」は＜傍目に悪い＞が原義と古語辞典に説明されているが、此処では＜傍迷惑=外部が困る＞の意味としか解せない。というのも、此処での「わざ」が＜技能や事柄＞ではなく、＜災い=難儀＞としか取れないからである。懸想される事を傍迷惑と他人事のように言うのは、更にその外部から見れば不当という理屈も立ち、まして光源氏から思われるのなら迷惑どころか名誉ではないのかとさえ見えるが、一方的な思いに対して迷惑に感じるのも、実際に迷惑に成ることもあるのが、この世の因果である。*「しかしか」については注に＜命婦が姫君に説明した内容、実際には詳しく説明したのだが、語り手が省略して「しかじか」と言ったもの。＞とあり、一応は尤もらしい。しかし、「しかしか(確確、はっきりと)」という副詞が古語辞典にあるので、「しかしかこそ」を＜どうしてもはっきりさせようと＞と文法的に読めるなら、手紙の有った事と返事を出していない経緯は姫も承知しているのだから、言葉の意味は通る。それに来訪の意向の詳しい説明は、これに続いて述べられているのだし。*「こころになはぬよしをのみ」については注に＜命婦の一存ではいかないの意。＞とある。此処の「こころ」は「御こころ(姫の気持ち)」では無いから、命婦の＜意志=一存＞に違いない。「こころに」の「に」は＜に於いては＞で、「一存」を受ければ＜だけでは＞となるだろう。「かなはぬよし」は逐語で＜致し兼ねるとの口実＞だが、省かれた修辭が＜姫の御同意なくしては＞で、省かれた述語は＜逢瀬の段取り＞だろう。「をのみ」は＜だけを、申し立てて＞だから＜一点張りで＞。斯くして注釈に従った言い換えと為したが、それなら何故に斯くもくどくどしいノートをしたかと言えば、「こころになはぬ」が一見＜意に沿わぬ＞という言い方に見えてしまって、元々＜命婦の意に沿う沿わぬの問題では無いものを、なんと云う言い草か＞と、私が勝手に誤解してしまった反省文なのである。ただ、誤解するには理由も在って、命婦は源氏と肌を重ねた召し人として、源氏と姫との睦言に反感した、ように符と私には思えた、という雑感ノート。*この「渡るなり」の臨場感は＜周知の事と成っている＞である筈は無く、＜渡り来しつ給へる也＞に違いない。分不相応な馴れ馴れしい言い方こそ、分際の裏で生きる召し人の真骨頂だと、決め付ける。

なみなみの(並大抵の身分の方の)たはやすき(軽々しい)御ふるまひならねば(御出ましでは在りませんので)、心苦しきを(。申し上げにくいところですが、)物越しにて(几帳越しに)、聞こえたまはむこと(殿の御話しを)、聞こしめせ(お聞きに為って下さりませ)」と言へば、いと恥づかしと思ひて(姫は大層恥じ入って)、「なみ」は＜並み、普通の＞という意味だが、それは浜に打ち寄せる波を一線と視認してなのだろうか、＜同列の横並びのなかでは＞という語源らしい。しかし一方、幾つもの波

の有様を見れば分際があり、分際は身分違いを示す。古語ではその意味合いが強いようで、「なみなみの」は<一通りの身分>のことらしい。

「人にももの聞こえむやうも知らぬを(私はお返事の仕方も知らないのに)」とて(と言って)、奥さまへ(部屋の奥に)ぬざり入りたまふさま(膝で後ずさりなさる様子は)、いとうひうひしげなり(とても初々しい様子だった)。うち笑ひて(命婦は笑いながら)、

「いと*若々しうおはしますこそ(今だにそんなに子供じみていらしては)、心苦しけれ(見苦しいですよ)。限りなき人も(宮家という最上位の御身分といえども)、親などおはして(親などがいらして)あつかひ(世話を焼き)後見きこえたまふほどこそ(御育てに為っている内なら)、*若びたまふもことわりなれ(おぼこぶるのも分かりますが)、かばかり心細き御ありさまに(さしたる後見も無く、こんな細々とした暮らしぶりでは早々に自立なさるべきなのに)、なほ*世を尽きせず(いつまでも世の男女付き合いを全く知らず)思し憚るは(引込み思案に為さっては)、*つきなうこそ(さっぱり道理に合いません)」と教へきこゆ(と諭し申し上げる)。 *「若わか」には「やはらか」に通じる語感がありそうだが、より「やはらか」そうな年少の「わらは童」が<幼児>で、年長の<子供>が「わか」という語義らしい。何れ口語文なれば、幾らかの意識こそが正攻法である。 *「若ぶ」は<若ぶる、幼く見える>。 *「世」は<世間>および<男女付き合い>。「尽くす」は<極める>。「世を尽くす」で<世情を熟知する>だが、「世を尽くさず」は<世情を熟知しない>のでは無く、「世を尽くす」の真逆ということで<世間を全く知らない>という意味だろう。 *「付き無し」は<不都合、不相応>とあるが、「付く」は<一致する>を意味するから、「つきなう」を「こそ」を伴う強い説得と考えて<道理に合わない>とする。

さすがに(すると姫は)、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて(人の言う事に強くは逆らえない御性格なので)、「答へきこえて、ただ聞け、とあらば(御答え申さず、ただ御話しを聞け、というのであれば)。*格子など鎖してはありなむ(格子戸を下げて錠を鎖してから承ります)」とのたまふ。 *「格子(かうし)」は濡れ縁の簀子(すのこ)と屋内の廂(ひさし)の間とを隔てる仕切り壁なので、その格子戸を下ろすのでは、源氏を簀子に座らせる事になる。たとえ、簀子が通常は初見の客に対する当然の処遇だったとしても、貴人たる源氏に対しては、特別な事情があるか、源氏が自分で言い出さない限りは、許されない。それも、母屋まで通された客人に対してなら、あくまで戸は開けて在っての事であり、御所筋の客ということなら廂に迎えいれなければ失礼だった、と風俗博物館の web サイトに説明されている。と、チラチラ同サイトの「源氏物語の住まい」のページにある二条院の想定平面図を見ながら、読み進む。

「簀子などは*便なうはべりなむ(縁側などでは失礼で御座います)。*おしたちて(廂にご案内申し上げても、いきなり襖を開けて部屋に立ち入り)、*あはあはしき(遊び半分が無体に及ぶ不届きな)*御心などは(御振舞いなどは)、*よも(決して、為さいません)」など(などと命婦は)、いとよく*言ひなして(とても上手く説得して)、二間(ふたま、姫の居る母屋と源氏を招く南廂)の際なる(を仕切る)障子(しょうじ、襖を)、*手づからいと強く鎖して(自分でしっかりと錠を下ろして)、御茵(おんしとね、御座布団を)*うち置き(手早く敷いて)*ひきつくろふ(慌しく御膳立てを整える)。 *「びんう」は「便宜(宜しい行き届き)」が「無い」ので<失礼>。 *「押し立つ」は<どっしりと立つ>または<我を張る>と大辞泉にある。ところで、此処も口語文である。実際の会話当事者および恐らく当時の読者には、言葉の具体的な対象物や事柄が分かって居るので、簡素な言い方で意味が通じたのだろうが、私は其の舞台場面を想定しながら、言葉を補って言い換えないと意味がつかめない。舞台は女所帯の母屋である。貴公

子とはいえ、男を家の最奥近くに招くのである。奥手であれば恐怖が先に立つだろう。襲われるかもしれない。だから命婦は宥めた。分かりやすく、はっきりと、具体的に言葉にしなければ、姫はとても安心できない。縁側では無く隣室に招いても大丈夫だと、説得するのである。だから「押し立ちて」は、〈我が儘のままに〉よりは〈いきなり襖を開けて、御前に立ちはだかつて〉。 *「あはあはし」は古語辞典に拠れば、「淡し(色や味が薄い)」の展開で〈情が薄い〉〈いい加減な気持ち〉ということらしい。それが「き(それで済ます)」だから、〈遊び半分で抱く〉。 *「みこころ」は〈御気持ち、御考え〉だが、〈心算が無い〉くらいの言い方では姫を安心させられないだろうから、〈振舞いはしない〉と言い換えた。 *「よも」は、今でも「よもや(まさか～しない)」として使う。が、少しこだわる。「よ」は〈基準の状態〉と古語辞典にあるので、あえて其の〈基準〉を指し示すということは〈この状態を踏まえ〉〈ここまでの努力を評価して〉という制御の意向表明だろう。「も」は〈～なのに〉で逆接するから、下に〈～しない〉の意味を持つ。序でに「や」は逆接の強調である。したがって、此処の「よも」は〈廂にまで御案内したのだから、この上は決して無茶は為さるまい〉となるのだろう。 *「いひなす」は「言ひ做す」で「見做す(～として考える)」に類推すれば、〈～として言う〉のだから〈何とか説得する〉。 *命婦がわざわざ〈自ら殊更に強く錠鎖しする〉という書き方は、実に命婦の心の機微を上手く表現している。鍵掛けのフリだから、他人には任せられないワケだ。しかし、この恐らくは思わず出た命婦の召人たる心得が、源氏をして取り返しの付かない大失態を演じさせた事を、感慨深く読み返した。こうした先取りノートは、先入観を排したい私の基本的な読み方に反するので極力避けたいところだが、どうやら本帖に於ける大筋での私の解釈が、参照というか頼みとする訳注と大きく異なり、この文節がその解釈に深く関わるので、この際に整理して置いた方が却って姿勢を保ちやすそうだ。つまりはこういう事だ、ろうと私は思う。命婦は当初、源氏が宮家に通うことを然して大事とは認識していなかった。それは自分が王家筋でもあり、姫の話題も閨での世間話だった筈であり、自らは召人(めしうど、御所の性処理係として帝に個人的に重宝される女房だが表向きの地位は妻では無く侍女)としての生き方を納得していた、という事情による所が大きかった、からなのではあろう。それに、契る前の応答自体には宮家にも公家にも更に下位の家にも何ら権利義務関係が生じないのは自明である。しかし契約、男女間のそれは情交であり且つ社会規範である以上は内実よりも蓋然形態で認定され以って子の有無よりは身分家柄が実効性を持つ、の締結後は互いの階級関係に基いて厳然たる規律が生じ、下位に対する不実は許されても、同等以上に対する不実は許されない。そうすることで身分秩序が保たれ、社会制度が機能するからである。富や財が有限で在る限り、この原則は古今東西に於いて、決して当時の都だけのものでは無く、程度の差異こそ有れ、今でも変わらない。ということは、源氏が姫に言い寄っても、情交に至らなければ、ただの青春譚に過ぎないが、一度情交に及べば、どちらかが死ぬまで権利義務関係が終わらないことを意味している。逆に、それが「死」の社会的意味だ。そして、何かの弾みで間違いが起きないように設けた安全弁たる、寢室と控えの間との〈襖の鍵〉が、故意か未必か半ば事故かはともかくも、外れていた、という危うさは、如何にも読者の興味をそそる。そして源氏が其の危うさをすり抜ける事無く、深みにはまって行く展開は、実際に当時のしがらみの中に生きていた読者を、さぞや熱中させたことだろう。もうとっくにネタバレなので、アッサリ云えば源氏は姫を強姦してしまったのである。源氏ほどのスターが、相手の歡心も買えぬまま、また相手に魅了されたからでもなく、未熟にも勘違いから激昂し、其の勢いのまま腕づくに及ぶという体たらくである。この中身の無い契約も、相手が下級の家柄なら解約というより無視できるし、相手の女が磨けば光るのなら源氏にとって一風変わった趣向の艶話にも成り得る。しかし、相手は宮家であった。そして古めかしい権威趣味の風雅の嗜みの無い人であり、落語のオチのように稀に見る不細工だった。この帖の劇構成は滑稽話だが、横たわっているのは階級社会の指摘と源氏の身分意識である。そして今、其の現実に気付いた命婦は事の重大さに気が動転していた。という場面である。 *「打ち」は〈突き出す〉語感なので、〈さっさと手早く〉。 *「引き繕ふ」の「引き」は強調で「繕ふ」は〈体裁を整える=御膳立てする〉。また、「引き」と強調する心理は、責務を負った〈切迫感、強迫観念〉だろう。

いと*つつましげに思したれど(姫はまるで気乗りがしない一方に御思いだったが)、かやうの(このように命婦の)*人にももの言ふらむ(人にもものを言い含めているであろう)*心ばへなども(計算高さなどには)、夢に知りたまはざりければ(思いも寄らない所だったので)、命婦のかう言ふを(命婦があれこれ言うのを)、*あるやうこそはと思ひて*ものしたまふ(そういうものかと思つて源氏と襖越しに面会なさいます)。 *「つつまし」は<控えめな>ではなく<気後れする=気乗りがしない>の意、らしい。「げに(気に)」は<様子に>というより「気味に(傾向に)」ということで<そういう方向にばかり考えて>。 *「人にももの言ふ(人に意見する)」は直前の文の「いとよく言ひなし」の意味合ひであり、「らむ」は古語辞典に<現在事態の理由(意味)を推量する助動詞>とあつて、「いとよく言ひなし(て)人にももの言ふらむ」で<何の彼のと云ひ換えて人を言い包めようとしているのであろう>という文意かと思う。なお、此処の文の解釈については「らむ」が分からなくて困っていたところ、野村竜夫氏の Web サイトにある解説で理解できた。 *「こころばへ」は古語辞典に<意向>とあり、文脈からすれば<企み>くらいの語感だが、悪意を持ってはいないだろうから召し人としての配慮か知恵なのだろう。 *「あるやうこそ」は「言ひ做す」そのもの。 *「物す」は「ある(かの)やう」という想定を真にを受けて<実地に進む>事の運び。

乳母だつ古い人などは(めのとだつおいびとなどは、乳母くらいの歳の古女房は)、曹司に入り臥して(ごうしにいりふして、部屋に下がり横になって)、*夕まどひしたるほどなり(夕方からの眠気でうとうとして誰も立ち居していない邸内の様子です)。若き人、二、三人*あるは(若い女房の三人ほど姫の側仕えに控えて居た者は)、世にめでられたまふ*御ありさまを(世に愛でられ為さる源氏のお姿に)、*ゆかしきものに思ひきこえて(近付けるものと慕い申して)、*心化粧(余所行き気分で緊張)*しあへり(為切っていた)*よろしき御衣たてまつり変へ(そして今の場に相応しかろうと選んだ衣裳を姫君に着替えさせてさし上げて)、*つくろひきこゆれば(化粧の手入れを施してさし上げたが)、正身(さうじみ、御本人)は、何の心化粧も(特に緊張も)なくておはず(無いままでいらっしゃる)。 *「ゆふまどひ」は名詞で<夕方から眠くなる事>と古語辞典にある。「し」は動詞「す(為)」の変形とあり、「為」は<する>ない<なる>なので、「したる」は「夕惑ひ(早々に眠たく)」<なっていた>と云ひ換える。「ほど」は状態の程度を示し、時刻を言う時もあるようだが、この日は八月二十余日であり旧暦の日付は月齢なので十五夜の後は月の出が次第に遅れて二十余日ではとつと寝待月であり、源氏は「月やうやう出でて」邸内に「入りたまふ」たのだから、今の時分は相当な夜更けということになり、夕方で無い事は確かだ。では、「ほど」が示している状態とは何なのか。それは、今の邸内の様子である。文の構成が、先ず「古い人」の様子を語り、次いで「若き人」の様子を語る、という形に成っている。したがって、「夕まどひしたる」で<夕方からの眠気でうとうとして>と説明され、「ほど」で<誰も出て来ない様子>と描かれ、「なり」で<です>と結ばれる。皆が寝静まった真夜中の冷たさではなく、気怠いが静まり切っていない熱気を漂わす、書き方か。 *「ある」は動詞「有り」の変形とあり、人なら<居る>である。そして、此処の文体として「古い人などは曹司に入り」に対する「若き人」の様子を表す<居る>なので、「若き人」は曹司に入らず母屋で姫の側に<居る>のである。 *「おんありさまを」について、「御有様」は源氏の<御姿>だろうが、問題は「を」である。古語辞典に<普通、格助詞「に」をとる動詞が「を」をとることがある。>とあるので、理由は次項に綴るとして、此処では<に>と云ひ換える。 *「行かし」は<動詞「行く」の形容詞化。心がひかれ、そこに行つてみたい、が原義。>と大辞林にある。が、少し冒険する。「行かし」の「し」を「す」の連用形と解して、「行かし」を<近付きたい>という形容詞ではなく、<近づく>という自動詞と見做す。そして、この動詞が前項の「を」を「に」と云ひ換えさせる、と考える。さらに、「行かしきものに」の「き」を未来完了と取り、「に」を理由を表す格助詞として、<近付けるものと>と云ひ換える。 *「こころげさう」は<相手に良く思われようと気構えて、緊張すること>らしい。 *「しあふ」は「仕合ふ」ではなく「為敢ふ」のようで、「敢ふ」

はく余裕無しに耐える>のだから「為敢ふ」はくしまくる>。 *「よろしき」については古語辞典に、<平安時代、物事の評価は「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順であった。>とあり、それに倣えばくまづまづの>という感じになるかと思う。しかし、此处は若女房たちの動作を説明していて、衣裳への評価や説明には全く描写になっていないので、女房たちが<適当だと考える>という意味に思う。 *「繕ふ」はく直す、修理する>とあるが、女が直すといえはく化粧>である。が、それなのに本人は「心化粧もなくて」と、下の文で洒落言葉にしている。若女房たちは興奮して「心化粧しあへり(緊張しまくっていた)」、という前フリ付きのオチである。

*男は(言い寄る男たる源氏は)、いと*尽きせぬ御さまを(相当入れ込んだ御気持ち)、うち忍び(胸に秘めて)用意したまへる御けはひ(潮時を待つ御様子が)、*いみじうなまめきて(反って生々しくて)、「見知らむ人にこそ見せめ(其の雅に感じ入る人にこそ見せしめればいいのに)、栄えあるまじきわたりを(華やぎのあるまじき姫宮相手では見せ甲斐も無いものを)、あな、いとほし(まあ素敵、でも、ああ勿体無い)」と、命婦は思へど、 *此处の「男」について注釈は、<源氏をさす。恋の場面になって、「男」と呼称される。『集成』は「男女対座の場面ではしばしばこう呼ぶ」と注す。>、とある。ただ此处では、其の源氏の「男っぷり」が大輔の命婦の視線で生々しく語られている事に、妙な違和感がある。と言うより此处はまるで、源氏の雅な姿に御所での戯れを思い出してか、つい濡らし気味の命婦の方こそを描写しているかのようだ。マ、其れはともかく、何れにせよ命婦だけは源氏の意図を十分心得ていた、という語り口なワケだ。 *此处での、「尽くす」はく終わる、無く成る>で、「おんさま」はく御姿>ではなく<御気持ち>。「尽きせぬ御さま」はく燃え立つ一方の恋心>。 *「いみじう」の言い換えは、その都度その内容に応じて変えざるを得ない。「いみじう」の逐語はくすぐく>だが、「いと(非常に、大変に)」のような程度を示す副詞ではなく、それ自体で<凄い状態>を示す形容詞なのだが、その<凄い状態>が凄く幅広い。およそ、明るい印象は無いが、暗いというよりは静かな緊張感を漂わせる言葉で、具体的な中身は一定しない。厳かな様も、思い詰めた気持ちも、貧相な様も、嬉しくても、同じ「いみじう」であり、言い換えには更に場面に合う工夫が要る。此处ならく凄く生々しく>「艶めきて(優美で)」だろうが、「なまめきて」の語感を今風にあえて作為して、「いみじうなまめきて」をまとめて<反って生々しくて>とした。

ただ*おほどかにもものしたまふをぞ(逆に姫の晩熟ぶりが)、*うしろやすう(ひと安心できて)、さし過ぎたることは見えたてまつりたまはじ(この相手なら殿も性急に一事に及ぶ事は為さらないだろう)と思ひける(と想っていた)。 *「おほどか」はくおっとりした様>で「栄えあるまじきわたりを」「ただ(単に)」と逆に形容する、のだろう。だから<おっとり>を否定的に言い換えて<奥手>、としてみた。また、此处は「あないとほしと命婦は思へど」が挿入句になっていて、私には判り難い語法だったが、特に注釈も無いことが更に意外。 *命婦が何を「うしろやすう」だったのかと言えば、直接的には「二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御茵うち置きひきつくる」って「たばかり」し自らの仕業に対して、なのだろう。しかし、本義ではく姫が貴人ごっこを望んでいるという源氏の勘違いを放置せざるを得なかった事>が後ろめたかったのである。いや、勘違いをした責任は、夕顔の影を追い求めた源氏に有る。しかし、その誤解が姫を苦しめると察すれば、早めに誤解を解く必要があった。ただ、源氏の誤解は姫を苦しめるだけのものとも、命婦には自分の感性上は思えなかったかも知れない。それでも、やはり危惧は有った。このことは次の文で「罪去り事」と明示されているが、それだけに此处の「うしろやすう」を漠然と考えていると、以降の文が不明。

わが常に(なぜなら命婦は、自分がずっと)責められたてまつる(手引きを強要されて来た)*罪さりごとに(苦し紛れにこの対面を整えた事で)、心苦しき(申し訳なさに気が引ける)人の(姫君に)御もの思ひや出でこむなど(源氏との情交で恋の物思いが起こりはしまいかなど)、やすか

らず思ひみたり(心穏やか為らず思っていた、からです)。 *此処に至るきっかけとなった、正月十六日の「心にくくてと思へば」誤魔化したのが、源氏に<貴人ごっこ>と勘違いさせて、命婦が「責められ奉る」羽目になったという、自分が一枚噛んでいるという経緯がなければ、手紙の返事を出さない姫が悪いのであり、命婦が姫に「心苦し」く「罪さりごと(罪を逃れる事)」に思う必要は無い。

君は(源氏は)、人の御ほどを思せば(姫の身分を思うと)、「されくつがへる(戯け返った=遊び慣れた)今様のよしばみよりは(当世風の気取り屋よりは)、こよなう奥ゆかしう(よほど好ましい)」と思さるるに(と御思いだったところに)、いたうそそのかされて(姫が女房たちに随分勧められたのか)、みざり寄りたまへるけはひ(少し前に膝を進められた気配がして)、忍びやかに(微かに)、衣被の香(えひのか、防虫芳香剤が)いとなつかしう薫り出でて(王族名家らしいとても懐かしい香りを漂わせて)、おほどかなるを(おっとりした感じが偲ばれて)、「さればよ(やはり思った通りの貴人ぶりだな)」と思す。

年ごろ思ひわたるさまなど(そこで年初から思い続けて来た事などを)、いとよく(たいへん上手に)のたまひつづくれど(お話し続け為さったが)、まして近き御答へは絶えてなし(一向に直答は一言も得られ無かった)。「わりなのわざや(わりなしのわざなりや=打つ手無しで困ったものだな)」と、うち嘆きたまふ(源氏は溜息を吐き為さる)。

「いくそたび君がしじまにまけぬらむ、ものな言ひそと言はぬ頼みに (和歌 6-3)

「頼り(便り)無ければ甲斐が無い、会が無ければ席(関)も無い (意識 6-3)

*注釈に<源氏の姫君への贈歌。「しじま」は法華八講の論議の折、鐘を合図に沈黙することを「しじま」と言ったことにもとづく語。>とある。歌の筋は「一体何度君の沈黙に負けて来た事でしょう、でも御蔭で私に黙れとも言わなかったので私は何度でも言いますけど」と理屈っぽい。そして、この屁理屈以外に面白味も見当たらない。

のたまひも捨ててよかし(嫌なら嫌と言い切ってください)。*『玉だすき』苦し(行き違いのままでは辛いから)」とのたまふ。 *「玉だすき苦し」については、≪『源氏積』は「ことならば 思はずとやはいひ果てむ なぞ世の中の 玉だすきなる」(古今集、俳諧、一〇三七、読人しらず)を指摘。はっきりおっしゃってくださいなくてはつらいの意。≫、と注釈にある。「玉禪(たまだすき)」はくたすきの美称>、との事。引歌は「どうせなら何とも思っていないと言い切れないものか、なぜ男女の仲はたすき掛けの様に交差して行き違うのだろうか」という所だろうか。

女君の御乳母子(おんめのご)、侍従とて(じじゅうという者で)、はやりかなる(お調子者の)若人(若女房が姫の態度に)、「いと心もとなう(とても焦れつつくて)、かたはらいたし(苦々しい)」と思ひて、さし寄りて(女君の側に寄り出て)、聞こゆ(代返申し上げる)。

「鐘つきとちぢめむことはさすがにて、答へまうきぞかつはあやなき」(和歌 6-4)

「鐘を搗くのはどっちの木、喋る気、黙る気、突っ付く気」(意識 6-4)

*注釈に、《侍従の代作した返歌。「鐘つきて」とは、源氏が「しじま」と詠み贈ったことに対する連想から。》、とある。この「注」が無いと「鐘突きて」何をく閉じめむのか意味が分からなかったが、「しじま」になる合図という事のようなので、(和歌6-3)に付いての「注」のお陰で「鐘突きて」みるとく法華八講の論議がく沈黙する事が分かった。論議の中身は知らないが、それはマ、いいだろう。で、歌の筋だが「しじまと言っても法華八講の論議で鐘を突くように貴方に口を閉じろとはさすがに言えないが、私がお答え申さず沈黙するには撞木で鐘を搗つ(かつ、突く)合図は要らない」といった所で、此方も内容よりは其の凝った言い回しの面白さが本義だろう。しかも其の凝り方たるや、ほとんど謎解きのような。後節だが、「こたえまうきぞ(答えられないのには)」「且つは綾なき(其の事の方は明らか筋が無い)」と此の儘で繋いでも何となく雰囲気は分かるものの、実際には暗号のように意味不明で具体的な絵が掴みきれない。そこで、中の「きぞかつは」を其々く木をく搗つのは」という重層的な意味で見直してから、改めて「且つは綾なき」に掛けてみると鐘搗きの絵が浮かび上がる。即ち、「答え申きぞ(何も答えないが)」「木ぞ搗つは(鐘を搗く事が)」「且つは綾なき(特に合図だったのではない)」と重ね読みして、やっと「鐘」が鳴った。

いと若びたる声の(とても若々しい声で)、ことに重りか(おもりか、重々しく)ならぬを、人伝てにはあらぬやうに(姫の代弁では無いように=直答のように)聞こえなせば(女房が申し上げたので)、「*ほどよりはあまえて(思いの他に馴れ馴れしい)」と聞きたまへど(と源氏は思われたが)、*注釈では、「姫君のご身分の割には馴れ馴れしいの意。」、とある。確かに其の含みはあると思うが、正月から今の八月まで手紙を送り続けて、これが初めての返答である。それも源氏は女君の直答だと思っているらしい。身分の高い古風な女だと思って、其れなりの人物像を期待して、それは源氏が姫に夕顔の面影を求めた勝手な期待に過ぎないのだとしても、ともかくは返事の無い姫君の無礼な態度も許して来た、心算だった。此処の「ほど」は、単に女君の一要素を指すのではなく、其のく人物像全体に掛かるのだと思う。これは、折角の曖昧表現なのだから身分と限定的に捉えなくても良さそうだ、という事ではある。しかし改めて読み返してみると、この代返は後述される展開の大きな要因となっていて、むしろ全体像としての「ほど」違いを源氏が覚えた、と書いてあるに違いない。

「めづらしきが(御返事が珍しいので)、なかなか(反って此方が)口ふたがるわざかな(二の句が次げません、と言いつつ返歌なされた)

言はぬをも言ふにまさると知りながら、おしこめたるは苦しかりけり」(和歌6-5)

言はぬが花とは知りながら、言わずもがなとはあさましく」(意訳6-5)

何やかやと(更に源氏はあれこれと)、はかなき(思い付きの)ことなれど、をかしきさまにも(おかしそうにも)、まめやかにもものたまへど(真面目そうにも御話し為されたが)、何のかひなし(其の後一切応答は無かった。既に一度は、思いの他に軽々しい返歌を返した上での沈黙には源氏も痺れを切らしたか、)。

「いとかかるも(これほどまで勿体ぶっていたのも)、さまかはり(裏返せば、貴人の節操などでは無く)、思ふ方*ことにものしたまふ人にや(恋人を別に持つ人だったからなのか)」と、ねたくて(癩に障って)、やをら(不意に)*押し開けて(襖を押し開いて)入りたまひにけり(女君の居る母屋に入ってしまった)。*「異に物し給ふ」「思ふ方」は例えば、頭中将とされる。*「押し開けて」については注釈にも、《前に「二間の際なる障子手づからいと強く鎖して」とあったのと矛盾するようであるが、必ずしも施錠したわけではなかったと考えられる。》、とあるが、敢て惚けて云えば如何にも奇怪しい。しかし、どんな

に惚けて読んでも、この直後に姿を暗ます命婦の描写で全て察しは付く。大輔の命婦は色好める若人である。この面会を整える事の意味を十分理解していた。だから命婦は面会前の心得として女君に、「なほ世を尽きせず(今更おぼこぶって)思し憚るは(嫌々しては)、つきなうこそ(始まりません)」、と釘を刺していた。更に他人任せにして本当に施錠してしまっただけは源氏の顔を潰す(という召人の心得が働いた)ので、しっかり自分で襖を閉めて、しっかり施錠したフリをした。とまあ、全く女郎屋の遣り手のような語り口に見える。しかし私は、命婦の立場もそうだが気持ちの上でも、彼女は女君の幸せを望んだのだろう、と同情したい。鍵の仕掛けは施したが、同時に命婦は源氏が姫の「おほどか」さに無体に及ばなそうだと「うしろやすう」思ったという記事も有った。尤も、命婦は源氏のお手付きなので、姫君に源氏への色好みを競い合う嫉妬も皆無ではないのだろうが、色好める帝の女房にとって源氏との濡れ事は基本的に仕事のはずだ。気兼ね無い真似事なら中出しはしないで、素股や膝頭や弄り合いを其れこそ上手にし合いたい。尤も、身分関係上で遊びでは済まない相手との情交であっても、必ずしも膣挿入および膣内射精をしたわけでもないだろうが、床上手な女房なら必ずや遊び遊ばせ上手だったはずで、其の身嗜みには後腐れの無さも含まれよう。切実な嫉妬は、自分の身分や生活基盤や信条を犯すような相手に向けられる。姫と命婦とでは、仮に血縁が近くても、公の身分が違いすぎて、其等を張り合う相手ではない。まして天下の色男たる源氏に対して命婦如きが独占欲を駆り立てても、自分が惨めに成るだけだという事は十分承知していたであろう。そういう生き方まで含んだ、命婦の〈立場〉なのだと思う。

命婦、「あな(まあ)、うたて(ひどい)。*弛め給へる(たゆめたまへる、油断させて置いて)」と、いとほしければ(さすがに気まずく)、知らず顔にて、わが方へ(自分の部屋に)往にけり(いにけり、下がってしまった)。*「弛め給へ」た源氏の所作とは、<男は、いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひ>だったのだろうが、同時に命婦は其の御姿をくしみじうなまめきて>見ていた、とも語られていた。むしろ危険な面持ちだ。やはり勘違いながらも、源氏がく貴人ごっこを望む姫の意向を承知していた>事を言っていると考えるべきだろう。しかし、それは命婦が説得して納得させた結果、源氏がく貴人たる慎みを心得た>ものではなく、源氏が姫の晩生振りを知れば、少なくともこの場では無体に及ばないだろうと読んでいた命婦ではあっても、基本的には源氏の「忍びてものせむ」腹蔵を承知していたので、所詮言い訳である。されば、「いとほしければ知らず顔にて我が方に去に経」む命婦の「いとほし」さ、とは何か。「いとほし」はくとても切ない思い>で、なぜく切ないのか>といえ、<自分の手には負えない>事態だったり推移だったりするからだろう。命婦は自分の立場上の任用において「たばかり」致し、その責も負ってはいしたが、源氏が姫の閨に押し入った時点で事此処に至っては、命婦の手の届かない当事者間だけの問題になった、のである。後は源氏自身が事を運ぶ以外に無いのだから、肩の荷が下りたとも言えそうだが、御膳立てをした自分の思惑とは違った展開となってしまった。それで命婦には、姫には幾分か「いとほし(申し訳無い)」い思いが在ったとしても、其の視線は却って姫に失礼と、事の推移が「気不味」かった事にする。

この若人ども(この母屋に残った若女房たちも)、はた(また)、世にたぐひなき御ありさまの音聞きに(世に抜き出た典雅さと言う源氏の評判に)、罪ゆるしきこえて(其の恐れ多い御出座しを咎め立て敵わずと座を憚って)、おどろおどろしうも嘆かれず(大袈裟に騒ぎ立てる事も無く母屋を下がったが)、ただ、思ひもよらずにはかにて(予想外の急展開に)、*さる御心もなきをぞ(女君に床入りの心構えが無い事ばかりを)、思ひける(心配していた)。*「さるみころ」は逐語で<その様な御心構え>だろうが、「さる」は源氏が姫の帳台にく押し開けて入りたまひにけり>し後の事柄なので<床入り>そのものである。それも事も有ろうに、姫に其の床捌きを仕込むべき若人どもが「さる御心もなきをぞ思いける」という深刻さだ。ある意味で、本人の談より姫の処女を明示した記事である。

正身(さうじみ、女君御本人)は、ただ我にもあらず(源氏の無体に我も忘れて只只)、恥づかし(恥じ入って)つつましきよりほかのことまたなければ(身を閉ざしているだけで床入りの所作を知らなかった)、源氏は拍子抜けして)、*遂にハイライトの濡れ場、この帖の見せ場である。ところが此の場面が思うように絵にならない。いきなり春画の大写しを見る前に、源氏が閨に押し入った時に、母屋に居た命婦と若人どもが「わがかたにいにけり」と散り去った所から、巻き戻そう。その次に、姫は頑なに身を固くして動かず、もしかすると震えていた場面。前節で姫の処女は明示されている。色好みの源氏が其れを察するのに時間は掛かるまい。貴人ゆえに節度有る姫宮だと思って返事が無いのを堪えていたところ、侍従なる若女房の軽はずみな代弁を本人の直答と勘違いした源氏が、再び無言に沈んだ姫に然ては他に男が居て無視するのかと逆上して、閨に押し入ったのだから、姫が処女と知って、また散り去った側仕え女房たちの様子を思い出せば、拍子抜けもしたろうし、大失態を演じてしまった自覚も覚えただろう。性戯としてならともかく、内実をして強姦に及んでは、王家の誇りの有る筈も無い。仮に想念に於いて未成立の情交でも、肌が合えば情が通じ誇りは保てる。が、それも無い。以って如何な源氏といえど、夜這いの初日に手解きや仕込から始めるのでは、とても王家らしい誇り高い種付けは出来ない。ただ、もしかすると「ねたくて」の勢いそのままに、無理やり射精まで果たしたのかもしれないが、この物語に男根・女陰や腎水・経水などの具体的な描写は無く仔細不明で確認できない。

「今はかかるぞ(初夜はこうして頑ななものこそ)あはれなるかし(良い風情だとして置くか)、まだ世馴れぬ人(まだ男を知らない人で)、うちかしづかれたる(女房たちに囲み傳かれていたとは)」と(と源氏は姫を処女と知って)、*見ゆるしたまふ(状況を見て、通う男が居ない事と返歌の侍従代返に気付かれ、激情を鎮め為されて)ものから(気を取り直せば)、「*心得ず(思い違いをした)、*なまいとほしとおぼゆ(未熟さが情け無いと思ひ知る)」る*御さまなり(と言った御次第でした)。*「みゆるし」は「見緩し」の<見て気分が緩くなる=気が鎮まる=落ち着く>と解し、訳文にある「見許し」とは取らない。*「心得ず」は<心得違いをして>と解し、訳文の<腑に落ちない>とは取らない。*「なまいとほし」は<何とも切ない>という切迫感を帯びた表現だろうが、この語を訳文にある他者視想体とは取らず、「なまいとほしとおぼゆ」での自己想句体と解して、「おぼゆ=思ひ知る」までの通文の分かりやすさの為に敢えて<なま=未熟な>と<いとほし=後悔>とに分けて言い換えた。*「おんさまなり」は「る=といた」で地文に変わった語法と解して、「おんさま」を訳文にある<姫の御様子>ではなく<殿の御状態>と取る。この解釈は素人の強引な文法誤用かもしれないが、文全体の意味としては、素直に読んだ結果の言い換えである。私としては訳注の難解な解釈の方が気に入らないので、むしろ専門家に此の筋で文法を整理して欲しい、などと夢想する。しかし夢想ではあっても、これを私の読み方として、この先を読み進んでしまおうと言う冒険ノートである。

何ごとにつけてかは御心のとまらむ(これでは一体何に御心が安らぐでしょうか)、うちうめかれて(源氏は大失態の自責に呻き声を洩らされて)、夜深う出でたまひぬ(朝まで待てずに真夜中に母屋を御出に為った)。

命婦は、「いかならむ(どうなることだろう)」と、目覚めて(一睡もせず)、聞き臥せりけれど(様子を窺って横になっていたが)、*知り顔ならじとて(源氏の早めの御帰りの物音に不首尾を察して、知らん顔をしておこうと)、「*御送りに(御見送りを)」とも、声づくらず(との指図もしない)。君も(源氏も)、やをら忍びて(そっと目立たぬように)出でたまひにけり(お帰りに成ったので御座います)。*「知り顔ならじ」は「知り顔なる(分かっているような顔をする)」を「じ(未来形で打ち消す意思語)」なので、言い換えは<知ったかぶりをしない>であり、その心は<余計な事に首を突っ込まない>である。*「御送りに」は注に<姫君の側近の女房は男君の帰りの際には他の女房たちに声をかけるもの。しかし、命婦は実際

にはそれを口に出して言わない。>とある。不首尾の事柄を荒立てないようにするのは、一般的な接客の心構えである。ただ、無視しようと言うのは<面倒を避けたい>と言う実利も感じる。

[第六段 その後、訪問なく秋が過ぎる]

二条院におはして(御在して、戻られて)、うち臥したまひても(横になられても)、「なほ(会ってみても)思ふにかなひがたき(理想に適わぬ)世にこそ(廻り合わせだった)」と、思いつづけて(お考え続け為されて)、軽らかならぬ人の御ほどを(女君の宮筋の御身分を)、心苦しとぞ思しける(重荷に感じておられた)。思ひ乱れておはするに(そして先々を思い悩んでいらしたときに)、頭中将おはして(御在して、お見えに成って)、

「*こよなき(ずいぶん過ぎた)御朝寝(おんあさい)かな(ですね)。ゆゑあらむかしとこそ(何か理由が在るのだらうと)、思ひたまへらるれ(思われて為りませんが)」と言へば、起き上がりたまひて(源氏はお起きに成って)、 *「こよなき」は<(程度を)越えている>が原義らしい(古語辞典)。

「心やすき独り寝の床にて(気楽な独り寝なので)、ゆるびにけりや(寝過ぎしたのです)。内裏よりか(御所からですか)」とのたまへば、

「しか(そうです)。まかではべるままなり(帰り掛けです)。*朱雀院の行幸(朱雀院での園遊会について)、今日なむ(今日が)、楽人(がくにん、管絃奏者)、舞人(まひひと)定めらるべきよし(定められる日だという事を)、昨夜うけたまはりしを(昨夜承ったので)、大臣にも伝へ申さむとてなむ(父上にお伝えしようかと)、まかではべる(出て来ました)。やがて(またすぐに)帰り参りぬべうはべり(御所へ戻らなければ為りません)」と、いそがしげなれば(頭の君は忙しそうなので)、*注に<桐壺帝の朱雀院への行幸。「若紫」巻に「神無月に朱雀院の行幸あるべし」とあったのと同じ行幸をさす。行幸は「ぎやうがう」と濁音で読む。>とある。その大行事での演者決定という重要な日に、源氏が朝寝で出仕して来ないから、中将は心配したのか、その朝寝に思い当たる節が在ったのか、催事の主要人物たる源氏に公務として日程を知らせに来たのか、そして実際に左大臣家で打ち合わせをする必要があったのか、その辺りの記述は無いが、当時の読者の常識では、それらの全ての要素が想起させられる書き方、なのだろう。

「さらば(では)、もろともに(一緒に行きましょう)」とて(と言って源氏は)、*御粥(おんかゆ)、強飯(こはいひ)召して(召し上がって)、客人(まらうと、頭の君)にも参りたまひて(にも差し上げると)、引き続けたれど(車を連ねて用意させ為されたが)、一つにたてまつりて(御二人は相乗りで一台にお乗りになって出立された。車中で頭君は源氏に)、 *「粥」には<堅粥(かたかゆ)と汁粥(しるかゆ)の二種類があり、堅粥は現在の炊飯であり、汁粥は現在の粥に当たる。>と古語辞典にある。また「強飯」は<蒸し米で、現在のもち米を蒸した「おこわ」「赤飯」>と大辞泉にある。

「なほ(まだ)、いとねぶたげなり(ずいぶん眠たそうだ)」と、とがめ出でつつ(咎めては)、「隠いたまふこと多かり(隠しておられる事が多そうですね)」とぞ、恨みきこえたまふ(不満げに申し上げた)。

事ども(この日は色々な事が)多く定めらるる日にて(多く決定されたので)、内裏にさぶらひ暮らしたまひつ(源氏はずっと御所に御出でになった)。

かしこには(そうこうしつつも、彼の常陸宮の姫には)、文をだにと(形ばかりでも後朝の手紙だけは送らないと)、いとほしく思し出でて(申し訳ない思いがして)、*夕方方ぞありける(夕方になって差し上げた)。雨降り出でて(雨が降り出して)、ところせくもあるに(逃げ場も無いのに)、笠宿りせむと(女の家にも雨宿りしようとは)、はた(とんと)、思されずやありけむ(御思いでは無いような)。*注釈に、「後朝の文としては遅過ぎる時刻。夕方に手紙があるということは、その夜は行けないので、手紙で済ますというわけである。新婚三日間は毎夜通い続けるのが当時の習俗、源氏はそれを第一夜限りでやめた。」、とある。常陸宮家の姫君に対する今の非礼が社会通念上で許されるのは、同じ王家筋の朱雀院の園遊会という催事の準備に追われたという言い訳が出来たからなのだろう。良く出来た構成で、それが、「ところせくもあるに(責任が有るのに)雨宿りも為さらない(果たそうともしない)、と言う言い方に繋がる。なお「笠宿り」については、手紙の返事を遣さない姫宮への取次ぎを、以前まだ春先に源氏が命婦に頼んだ時の、<私を浮気者と警戒して返事を呉れないようだが、姫が立場を弁えた物腰で居て呉れたら、私はいつまでも面倒見るから>という相談に、<いえ、姫にはとてもそんな気の利いた雨宿り場所は務まりません>と命婦が答えた場面があって、それを下敷きにして注釈にも記されているので、「笠宿りせむと、はた思されずやありけむ」で<ところが今や源氏の方が気変わりを見せている>、という意味に成る書き方になっているようだ。それも、語り手は源氏が昨夜は「心得ずなまいとほしとおぼゆ」ことを承知の上での悪乗りなので、斯くも皮肉っぽい言い方をする。

かしこには(彼処では)、待つほど過ぎて(後朝の文の来る時刻も過ぎて)、命婦も、「いといとほしき御さまかな(とてもお気の毒な姫のご様子なこと)」と、心憂く思ひけり(嘆かわしく思っていた)。*正身(生娘の御本人)は、御心のうちに(内心で昨夜は満足に抱かれていないことを)恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど(朝のお文が夕暮れてから来たのも)、なかなか(自分だけは納得できたので、決して)、咎とも(無作法などと)思ひわきたまはざりけり(判じ付け為さる事は無かった)。*「正身」は<さうじみ>とも読むが<しゃうじん>とも読む。<しゃうじん>は「生身」とも書き、<なまみ>という語感から「生娘」を想起させる。何故この姫君だけに「正身」という言い方をするのかが疑問だったが、此処の文に於いては「生娘」の意味で読み下せるように思う。ただし、此処の文は「姫ご自身は恥づかしさが先立って源氏の手紙の後れを非難する処まで気が廻らなかつた」とも読めるし、「御心の内に恥づかしう思ひ給いて」を<処女喪失に深く動揺して>とも取れるので、この文節は冒険ノートに沿った言い換えではある。

「夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬに、いぶせさ添ふる宵の雨かな (和歌 6-6)

「やっと会えると思っていたら、逢瀬流した秋(厭き)の雨 (意識 6-6)

*さて、御文の贈歌である。面付きは、「夕霧が晴れないものかと思っていたら、いっそう滅入る昨夜の雨でしたね」という、初秋の風情ではある。しかし女君にとっては次のように、具体的な意味がはっきりと読めただろう。即ち、「夕霧の(夕霧に隠れたように臆ろげだった貴女に)晴るるけしきもまだ見ぬに(やっと会えると思っていたら)、いぶせさ添ふる(訝しいほどの世慣れぬ御様子に)宵の雨かな(お流れとなった夜でした)」、という次第。念の為に穏当な複意を踏まえると、「いぶせさ添ふる(懸念が増した)宵の雨かな(昨夜の不始末でした)」である。

*雲間待ち出でむほど(雲の晴れ間が出るのを待つ間が)、いかに心もとなう(どんなに長く思えることか)」とあり(と源氏の手紙には書かれていた)。おはしますまじき御けしきを(此れではどうも今夜は殿がお見えにならないようだ)、人びと胸つぶれて思へど(常陸宮家の女房たちは悲嘆したが)、*此処の表意は<晴れて会える日が待ち遠しい>だが、「雲間」を<合い間>と見て<忙しいので当分

伺えません」という挨拶として受けても、単に形ばかりではなく実際に源氏は〈朱雀院の行幸〉に備えて奏楽の練習に忙しかった。それでも連夜の御通いが無いのは、宮家に対して非礼に過ぎる。だから「人びと」が源氏の「おはしますまじきおんけしき」をくいとほしく思うのは、当然かもしれない。しかし「人びと」は「胸つぶれて」思った、という。「胸つぶれ」る時は、自分に〈負い目〉があつて責を感じて居る。女房たちに如何いう〈負い目〉が在るのか。「大輔の命婦」は源氏の忍びを手引きしたし、「侍従」は返歌を代弁した。それが源氏の〈押し入り〉を実現させたと言う意味では、〈出過ぎた事〉と言えは其の通りだろうが、姫を思えばこそその仕業であり、其れらが源氏の〈心〉に常陸宮邸への訪れを無くさせている訳ではない。確かに源氏に対する道義的な役回りとしてはこの二人は〈女房めいて〉はいるが、大輔の命婦は帝の女房で姫の女房ではなく姫とは従姉妹で〈身内〉と言う立場だし、侍従は姫の乳母子に当たる幼馴染で乳母の役目には無い〈友人〉であり、両者とも元々が世話係りではない。また実際、源氏が訪れないのは姫が「まだ世慣れぬ人」だったので「心得ず」「なまいとほしく」思っているからだ。だから、此処の「雲間」は〈世慣れる〉〈手解き〉を姫が心得るまでの期間を指す、とも言える。女房たちが〈負い目〉を覚えたのは、その〈手解き〉が至らない事を源氏に咎められた、と感じたからだ。ということは当時の貴家の習わしとして、其の〈手解き〉が女房たち、特に乳母役、の務めであった事が、此処から窺える。そうした皇家の性教育に枕絵が重宝されたという事情は福田和彦氏の「江戸の性愛学(河出文庫 1988年)」にも詳しい。其れは兎も角としても、生理が在り、子を孕む、という女の生態は本質的に地に足の付いた生き方を志向する、ように私には思えるので、少しコツを教えられただけでも、女は床さばきの手際が男より余程実利的に処理出来そうな気がするし、そうであれば女の恥じらいは社会規範や文化価値を、本来其等から開放されるべき密儀に持ち込む器量で、情緒を深く広く楽しむ演出の筈なのだが。

「なほ(是非とも)、聞こえさせたまへ(お返事はなされませ)」と、そそのかしあへれど(強くお勧めしたが)、いとど思ひ乱れたまへるほどにて(ひどく困惑なされていて)、え型のやうにも(型どおりのお返事すらも)続けたまはねば(覚束なく為されていたので)、夜更けぬとて(この儘では夜が更けてしまうという事で)、侍従ぞ、例の教へきこゆる(再び歌をお作り申し上げる)。

「晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ、同じ心に眺めせずとも」(和歌 6-7)

「月のきれいな秋なのに、長雨眺めが嘆かしい」(意識 6-7)

*注に〈末摘花の返歌。源氏の「晴るる」を踏まえて「晴れぬ夜の」と詠み返す。「月」は源氏を譬え、「里」は自分を喩える。「ながめ」は「眺め」と「長雨」の掛詞。贈答歌の作法にかなった技巧的な和歌である。〉とある。この歌の面付きは、いかにも源氏への返歌として〈月夜を見たいと思っている里の家に同情して、一緒に長雨が止むように祈ってください〉と貴方に語り掛ける、ということだろう。しかし贈歌の複意に答えるなら、自らの決意表明として「晴れぬ夜の(流れた夜が残念で)月待つ里を思ひやれ(心得たいと思うので)、同じ心に(世慣れぬままで)眺めせずとも(長雨のように何時までも物思いに耽る心算は有りません)」、となるのだろう。女君の返歌としての侍従の代弁と見れば精々こんな所だが、侍従が乳母の気持ちまで込めたとすれば、「同じ心に眺めせずとも」が〈殿の男をしっかり勃たせて姫に情けを受けさせたい〉くらいに響く。そして今となつては、源氏も侍従の代返が予期できたので、この返歌から乳母の反省を感じ取れば、意外に心強く思った可能性も有り得る。相聞の遣り取りで、業務報告まがいの事が有るのも、一興かも知れない。

口々に*責められて(姫は女房たちに強く促されて)、紫の紙の、年経にければ(としへにければ、何年も前からあった)*灰おくれ古めいたるに(色褪せて古めかしいものに)、*手はさすがに文字強う(文字はいかにも強くしっかりと)、中さだの(時代遅れの)筋にて(書き方で)、上下等しく(か

みしもひとしく、整然と改行して)書いたまへり(お書きに為った)。見るかひなううち置きたまふ(その手紙の外観に源氏は又も世慣れずと失望して、中身を見るまでも無いと置き放された)。いかに思ふらむと思ひやるも(源氏は姫が如何に思っているかと思ひ遣ることすら)、*安からず(心が乱れた=嫌だった)。*此处での「責め」は<強要>なのだろうが、「責め」の本義は<責任追及>だと思う。此处で「責められて」という言い方をしたのは、女房たちが源氏に「責め」られたから、女房たちは姫を「責め」た、という事だ。*「灰おくれ」とは、紫色を染めるために加えたツバキの灰(灰汁アク、アルカリ定着剤)の気が抜けて、色が褪める事(小学館古語辞典)、とある。原文注釈には<紫の紙は灰を交ぜて作るので、古くなった紙面に灰が残っている状態をいう。>とある。*「文字強う中さだの筋にて上下等しく」については、注に<一時代前の書法で、文字は強くしっかりと、紙の天地を等しく揃えて改行して書いた書法。>とある。*「安からず」は<心穏やかならず>と古語辞典にあるが、恋人の返事なら飛びつくのが普通で、その気持ちを思い遣るのは楽しいはずだが、源氏にとっては相手の気持ち以前に自分の大失態を消し去りたい気持ちが先走って、考えなくなかったのだろう。

「かかることを(こういう事を)、悔し(くやし、後悔)などは言ふにやあらむ(などと世に言うのだろう)。さりとしていかがはせむ(そうは言っても如何したものか)。我は、*さりとも(未遂ながら契った以上は)、心長く見果ててむ(最後まで姫の面倒を見て行こう)」と、思しなす御心を知らねば(決心された源氏の気持ちを知る筈も無く)、かしこには(姫君方では)いみじうぞ嘆いたまひける(源氏の無沙汰を御見限りと見て悲しみの極みと嘆かれたので御座います)。*此处の記述はこの帖全体に掛かる留意点に思える。「さりとも(そうであっても)」「さり(そうであった)」「<中身>は如何いう事だったのか。重要なので当該箇所(床入り描写)全文を引くと「正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ」とあり、その前段の文に<さる御心もなき(床入り所作の心得も無い)>という若女房たちの証言まで述べられている。したがって源氏としては、<姫が余りにも晩生の生娘で床さばきが出来ず、王家の誇り高い種付けに至る情交を果たし得ず終いなるも、形の上では閨に押し入って通い相手の女にしまった>ことが「さり」である。そして「とも」という行き掛り上の因果を重く受け止めて>「心長く見果ててむ」と、源氏は思ったという事になる。では、<未遂の契り>にもかかわらず源氏が<重く受け止めた因果>は如何いう事なのか。恐らくだが、源氏自身の、そしてこよなく恋慕する藤壺宮の、其の存在自体の拠り所たる<王家の血筋>を常陸宮の姫も引いていたから、なのだろう。実際問題として、宮家を蔑ろにする事は社会的制裁を受けかねないし、其を背景にしているとしても、源氏自身の身分意識として、どんなに意に沿わない事があっても、同族なれば自分自身の現実として認めないわけには行かない、という幾分仏教めく<因果>の覚え、なのだろう。この際に本巻の概要を序でにノートすれば、<夕顔の影を慕った源氏が、故日立宮の姫に其の幻影を求め、中将との因縁話を青春像に描いて、若気の至りで閨へ押し入るも姫は晩熟で、源氏は王家の誇りある種付けに失敗したが、作者は失敗談を以って源氏の王族意識を説明した>、というところだろうか。

大臣、夜に入りてまかでたまふに、引かれたてまつりて、大殿におはしましぬ(養父の左大臣が夜になって帰宅するのに伴われて、源氏も左大臣家に出向かれました)。行幸のことを興ありと思ほして(邸内では園遊会での活躍を楽しみに)、君たち集りて、のたまひ、おのおの舞ども習ひたまふを(左大臣家の子息が集まっていて、打ち合わせやら、各々舞などを練習したりして)、そのころのことにて過ぎゆく(其れがその頃の暮らしぶりで御座いました)。

ものの音ども(楽器の色々な音を)、常よりも耳かしかましくて(普段より大きく鳴らして)、かたがたいどみつつ(其々競い合うように)、例の御遊びならず(いつもの管絃の合奏遊びとは違って)、大箏(おほひちりき、大縦笛)、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ、太鼓をさへ高欄の

もとに*まろばし寄せて(伴奏用の太鼓まで高覧の付け根に遣り付け寄り掛けて)、手づからうち鳴らし(君たち自ら伴奏し合って)、遊び*おはさうず(合奏なさって居らした)。*「まろばし」はく転ばす=ころがす>の連用形(古語辞典)で、「ころがす」はく回転させる>の他に<下に置く>の意味。*「おはさうず」はく御座し合ひす(居合わせていらした)>の発音変化(古語辞典)。

御いとまなきやうにて(園遊会の準備で暇が無い中でも)、せちに思す所ばかりにこそ(気乗りする女の所には)、盗まはれたまへれ(隙を見てお出かけになったが)、かのわたりには(彼の常陸宮の姫君の所には)、いとおぼつかなくて(さっぱりのまま)、秋暮れ果てぬ(秋は過ぎて)。なほ(やはり)頼み来し(源氏来訪を待ち望んでいた)かひなくて過ぎゆく(甲斐も無く暮れて行った)。

[第七段 冬の雪の激しく降る日に訪問]

行幸近くなりて、試楽(しがく、総稽古、予儀総覧)などのしるころぞ(などが慌しく行われている最中に)、命婦は参れる(命婦が源氏の宿直所に遣って来た)。「いかにぞ(姫の様子はどうしていますか)」など(などと源氏は)、問ひたまひて(お尋ねになって)、*いとほしとは思したり(気懸かりには為さった)。*一説には、「いとほし」は「いとふ(厭ふ、嫌う)」「し(～のような)」、「いたはし」は「いたし(痛し、辛い)」「し(～のような)」を語源として、どちらも自己形容なら辛くて厭なので免責されたい気持ちから<切なく>、他者形容なら辛そうで可哀相なので庇いたい気持ちから<労しく愛しい>、とあるらしいが、割りと分かりやすい。しかし、割りとである。「いとほし」「いたはし」は其の違いを含めて大約の感じは掴めても、時々刻々変化する印象の表現であり、場面毎の人間関係によって今日では多様な形容を用いるので、簡潔な言い換えが仕難く、冗長に成っては臨場感を損なう。まして此处では「とは」という多視的な言い換え注文も付いているので、なお面倒だ。で、此处の「いとほし」だが、源氏は今までは自己嫌悪一辺倒で相手の気持ちを慮ることが無かったのだが、此处に来て相手の気持ちに少し目が向いた。しかし、だからといって、確かに自分の粗悪さで母屋に押し入りはしたが、それまでの手順は踏んでいるので、源氏は自分が一方的に悪いなどと思っている筈は無い。いや、むしろ非は宮姫とその乳母にある、とさえ思っているだろう。姫の非については、読者は命婦の無責任も気に為るが、それも元々は源氏の夕顔への追憶が命婦に過剰な責任を負わせたとも言えるかもしれない。が、源氏は基本的に自分の懸想は、もしくは王家の情欲は、正当だと信じきっている。したがって、<相済まぬ>とか<気の毒な>とかは言えない。ただ、不首尾ではあったが、宮家である以上は今後も付き合っていかなざるを得ないし、一度は恋に恋した相手の女である。もう一度、女の事を考え直してみようと思ったのだろうし、又そうせざるを得ないとも思っただろう。だから、改めて<気に掛けた>のである。それでも不首尾に成った事も忘れられないので、やはり「とは(一応は)」と引けた気分も拭えない。で結局、「いとほしとは思し」を<気には掛ける>と言い換えた。

ありさま聞こえて(命婦は姫の様子を答え申し上げて)、「いとかう(これほどに)、もて離れたる御心ばへは(お訪ね頂けない姫のお気持ちは)、見たまふる人さへ(傍目にも)、心苦しく(忍びなく)」など、*泣きぬばかり思へり(などと泣き出すほどの同情ぶり)。*この講談調の語り口は印象的だ。「泣きぬばかり思へり」だけなら<泣き出しそうに思った>だが、「ありさま聞こえて」を受けての文体なので<泣きぬばかり(に)思へり(たり)>と余韻を残す。そして実に今の句を以って、源氏に常陸宮家の人びとの気持ちに目を開かせ、以って続く文で源氏の心境に大きな変化が起こった事が表示される。また、この段全体がこの帖に於ける大展開の場面、かと思う。

(その命婦の様子に源氏は初めて宮家の人々の思いに気付き、自分の失態を後悔する気持ちを離れて、)「*心にくくもてなして(思わせ振りで盛り上げて)止みなむ(其の場限りの話題で済まそう)」と思へりしことを(と御所の宿直所に召し使った命婦が、宮姫の件を寝物語の足しくらいに思っていたことを)、くたいてける(夕顔の影を慕うあまりに真に受けて、台無しにしてしまった無粋な男だと)、心もなく(私を残念に)この人の思ふらむ(この命婦は思っているのだろうか)をさへ思す(とさえ考え為さる)。 *注にはく以下「思ふらむ」まで、源氏が命婦の考えを忖度した文。しかしそれを受ける引用句はなく地の文に続く。「止みなむと」の主語は命婦。>とある。ということは、「心にくくもてなして」が何を示しているのか不明、と言っているようだ。しかし、鍵は「止みなむ」である。源氏から「おぼろ月夜に忍びてものせむ、まかでよ」と仰せ付かった後では、命婦が「止みなむ(終えよう)」という自己判断を下せるはずは無い。まして、手引きをしてからの「もてなし」で有る筈も無い。となれば「心にくくもてなし」たのは、源氏が「まかでよ」を命じる前の寝物語での事に成らざるを得ない。命婦が召人だという事と寝物語の経緯は本巻第一章第二段に明示されている。が、実は、斯様に口説く述べるまでもなく、この命婦の思いは「さうざうしき(発情を催した)宵居(よひみ、宿直日の淑景舎での召し使いの際)など、はかなきついでに(果敢ない寝物語の戯れ言に)、さる人こそとばかり(こういう姫も居るとだけ)聞こえ出でたりしに(御話し申した心算だったのに)」というように、本巻第一章第五段の、晩秋に姫の返事が無い事に痺れを切らした源氏が命婦に手引きを迫る場面で、丸々語られていた。斯くして上記のような少々冗長気味の言い換えとなった次第である。なお、この解釈には野村竜夫氏の Web サイトの解説が大いに参考になった。ただし本巻の筋立てに於いては、氏の解説と私の解釈とは相違点も多い。氏は此処の「心にくくもてなして」を、正月十六日の源氏初訪問の際に「立ち聞き」の手配を命婦に頼んだ時の命婦の「心にくくてと思へば」の「心にくくて」に引き当てるような節があるが、「心にくくもてなして止みなむ」が「おぼろ月夜に忍びてものせむ、まかでよ」の後では成立しないので、同意しかねる。という訳で、安易な同意表明は氏には迷惑となるのかもしれないが、本件に関しては大意に於いて同感する。

*正身の(姫御本人が)、ものは言はで(あのような事が在ったにも関わらず、何も言い立てずに)、思し埋もれ(おぼしうづもれ、沈む気分で引きこもり)たまふらむさま(為さっているかの様子を)、思ひやりたまふも(思い遣りなさるのにも)、いとほしければ(愛しみがあつたので)、 *この文も、宮家の人々の気持ちに目を向け始めた源氏の心境変化の語りである。ところで此処では、「正身(しゃうじみ)」という表記にく生娘の語意が感じられない。命婦も侍従も姫宮もみな宮家の人であり、その中で正にく生娘を示す言葉が「正身」である。宮家ではあっても、職分や公の地位が無いので他の呼称が無い、という事かも知れない。ただし、何れにしても私の感性上の違い、ではある。

「*いとまなきほどぞや(今は行幸の準備で、忙しい時期なんだからさ)。*わりなし(常陸宮邸に通えないのも、仕方がないんだよ)」と(と源氏は)、*うち(殊更残念そうに)嘆いたまひて(嘆き為さって)、 *「いとまなきほどぞや」の「ほどぞ」は状況程度の強調で<~なんだから>、「や」は同意を促す説明補助句で<さ>、と言い換えた。 *「わりなし」は「理(ことわり)無し」と同義で、<理屈で片付かない=対策が立たない=仕方が無い>となる(古語辞典)、らしい。 *「打ち」は<動詞につけて、その意味を強調する接頭語>と古語辞典にある。「打ち」は<無理に押し出す>という語感、だろうか。「打ち消し」などは良く使う日常語だが、わざとらしい素振りとも言えそうだ。

「*もの思ひ知らぬやうなる心ざまを(ものの道理をわきまえない様な心構えを)、*懲らさむと思ふぞかし(懲らしめようと思うところでもあるしな)」と、*ほほ笑みたまへる、 *「もの思ひ知らぬやうなる心ざま」が何を指すかといえ、先ずは手紙の返事を遣さない事、だろうか。次いで、侍従に代弁させ

るほど歌の嗜みに欠けている所、だろうか。そして何と言っても、床さばきの心得が仕込まれていない晩熟ぶり、ではあろう。*「懲らさむと思ふぞかし」の「ぞ」は意思の強調で<～するところ>、「かし」は意向の念押しで<～ということだし>、と言い換えた。*「ほほゑみ」は本来は柔かい同意の表情なのだろうが、その柔かさが実に多くのものを含み得るので、時と場合によって其の意味する所は千差万別である。此処では、姫宮自身のみならず命婦や侍従や他の常陸宮家の人々の「心ざま」に対する非難を、戯け素振りで柔かく包んで、「懲らさむ」という意味は分かるよね、と命婦に理解を求める、または因果を含める含み笑い、といった所か。しかし、どうやら命婦は源氏が思う程には悪びれていないようだ。この辺の行き違い、思惑違いが、当時の読者には面白かったんじゃないだろうか。源氏は自己嫌悪はあっても他者に悪意は無いし、悪い事をしたとも思っていない自分本位。命婦は事態が上手く行っていない事を懸念はしているが、元々が源氏の一人相撲で、自分の手筈も十分ではなかったし、姫の仕込にも熱心ではなかったと言う反省は有るものの、それらは全て本来の自分の任務ではない、と言う自由人振りである。そして、没落貴族の哀切は身に染みながら、自分で道を切り開こうとはしない宮姫と宮家の人々。この設定は机上の理屈の面白さではなく、この場面に有るような実相ならでは面白さだろう。是は先ず実話で、その事情を知る人たちは身をよじって笑ったに違いない。

若う(その源氏の笑顔が若々しく輝いて)うつくしげなれば(魅力的だったので)、我も*うち笑まる心地して(非難がましさを感じながらも、命婦もつい微笑みを誘い出されて)、*「打ち」は、堪えようも無く<つい>である。では、命婦は何故に笑い返すのを堪えようとしたのか。それは、源氏の微笑みの中に自分も含めた宮家への非難が在り、男の独善性を感じたからである。

「*わりなの(どうやら)、人に恨みられたまふ(女の恨みを買いなさる)御齡や(おんよはひ、恋多きお年頃のようなですね)。思ひやり少なう(女への思い遣りに欠け)、御心のままならむも(わがまがちというのも)、*ことわり(摂理でしょうか)」と思ふ。*「わりなの」の文意は、「わりなしのおんよはひ」で<手の付けられない御年頃>、かと思う。しかし口語文の言い換えは、その場面に入り込んで、全体の意味を取ってからでないと、逐語では結果として意味が変わってしまいかねない。というのは日常会話での発言者は、その場の状況を前提にして、最大限に簡素な言葉で、文法によらず、発音の調子や声の大小によって、時には何も言わず身振りだけで、その場の相手に意思を伝える、という手法を取るからである。そして此方が言葉の原型だろうから、文字に置き換えた後は、むしろ<この意味>を<こういう言い方をする>のか、と理解しなければならない。したがって、「わりなの」と云った召人たる命婦の思いを文字に置き換えるなら、源氏に男の独善性を見ているのだから、<おやおや、しょうがないですねえ>だろうし、「人に恨みられたまふ」は<女たちから恨みを買うのも省みないほど見境なく>で、「御齡や」は<盛りが付いてるんですねえ>、となるのだろう。以下同様に此処の文では全体を、その発言者の意図を文字にした冗長さを、原文の<言い方>に擦り合せて言い換えた、つもりである。*此処で云う「理(ことわり)」は、男女の生理のみならず、そういう柵だらけの世の中、延いては其の全ての存在を受け入れる意識であり、其の認識は<理屈・道理>というより、人智を超えた、とても抗し切れない<大自然の法則(摂理)>を前にした命婦の諦観表明、なのだろう。

この*御いそぎのほど過ぐしてぞ(というわけで源氏はこの忙しい時期が過ぎてからは)、時々おはしける(何度か旧常陸宮邸に出向かれた)。*「いそぎ」は<したく、準備>と古語辞典にあり、「御いそぎのほど」は<行幸の準備期間>とされるようだが、<行幸が済むまでの忙しい時期>と解しても良さそうに思う。朱雀院の行幸は十月に執り行われた。前に「御いとまなきやうにて、せちに思す所ばかりにこそ、盗まはれたまへれ」という記述も在ったので、心境変化のあった源氏なら忙しくても暇を見て通えそうだが、命婦に「いとまなきほどぞ

や。わりなし」と言い訳した手前、そうも行かなかったか。いや、それもあるだろうが、前倒りに成るほどの気乗りでもなかったのだろう。ともかくも、十月以降に数回は彼の邸に通った、らしい。

かの*紫のゆかり(彼の藤壺の姪に当たる姫を)、尋ねとりたまひて(浚って済し崩しに二条院に住まわせてからは)、そのうつくしみに心入りたまひて(その手馴付けに掛かり切りで)、 *注に<「若紫」巻の紫の君をさす。「紫のゆかり」という呼称は藤壺の縁者という意である。>とある。「紫」は禁色であり、先帝の内親王たる後宮の藤壺女御を示す。其の藤壺の兄である兵部卿宮の妾腹姫君を、源氏が藤壺の血筋縁者として「紫の所縁」と慈しんだ。姫を兵部卿宮に先回りして奪ったのは十一月中頃。

六条わたりに*だに(優れた風流人の六条の貴女の所にさえ)、離れまさりたまふめれば(途絶えがちに成り為さったほどだったので)、 *「だに」は<～でさえ>という副助詞で比較上位に対する否定文に使われ、多くは続いて比較下位に対する更なる否定文を伴う、と古語辞典にある。六条わたりの優れた風流人ぶりは、その庭の風情の豊かさが夕顔巻で語られていた。また同巻に、短い文ながら「翌朝(つとめて、情交に耽った翌朝は満ち足りた安堵からか)、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出で給ふ(いでたまふ、お帰りになる)」という印象的な語りがあって、女の優れた床あしらいをも感じさせる。

*まして荒れたる宿は(まして同じ貴女でも風雅のない故常陸宮邸には)、あはれに思しおこたらずながら(気掛かりにはし続けながらも)、もの憂きぞ(あのような頑なさでは)、わりなかりけると(如何しようも無いと)、ところせき御もの恥ぢを(稀に見る古風に恥じ入る顔を敢えて)見あらはさむの御心も(見てやろうとの気持ちも)、ことになうて過ぎゆくを(特に湧いてこないまま過ごしてきたが)、またうちかへし(また符と気を取り返しなされて)、 *この「まして」以下が「六条わたり」を比較上位にした否定文に対しての、比較下位を語る否定文である。ただし、故常陸宮邸の荒廃ぶりは、庭の垣根の手入れが行き届いていない事が語られてはいるが、それは寂れた風情として寧ろ好ましく描かれていた。それが仮に、姫に理想像を追い求めていた時の事だとしても、今に至るまで、それを「荒れたる宿」として殊更に非難する記述は無い。やはり、風雅の無い、特に床さばきの心得も無いような宮姫が住む、気が荒むような古色蒼然たる屋敷には、行く気がしない、と言う意味だろう。

「見まさり(会って見れば思ったよりも良い)するやうもありかし(という事も在るのかも知れない)。*手さぐりのたどたどしきに(手さぐりではつきりしないものの)、あやしう(どうも変な感じで)、心得ぬこともあるにや(納得できないこともあるしな)。見てしがな(見て確かめたいものだ)」と思ほせど、けざやかに(まざまざと)とりなさむも(対面するのも)まばゆし(照れくさい)。うちとけたる(邸内が内輪で寛いで)宵居(よひる、夜更け前でまだ起きている)のほど(時に)、やをら入りたまひて(源氏がそっと寝殿に近付き為されて)、格子のはさまより見たまひけり(格子戸の隙間から姫を覗き為された)。 *一寸した新展開である。思えば今まで難点だらけの宮姫だった。一月十六日に宮邸に姫の事を聞きに忍んで行って、その直後から手紙を送り続けたが返事は無く、大輔の命婦に強引に夜這いの手引きをさせて、遂に八月二十余日に面会したが、何と弾みで強姦してしまうというに大失態を演じるに至った。しばらく意気消沈して訪問は途絶えたが、秋も暮れた初冬十月頭の「試楽など罵る頃ぞ命婦は参れる」時に、乳母によって姫の床あしらいの猛特訓がなされた経過報告が知らされ、源氏は気を取り直して、行幸が終わった十月中か十一月初めには旧宮邸を再訪していた、という手の掛かりようだ。こうしてやっと再訪に至ったと言うのに、また何か腑に落ちない懸念材料が出てきた、というのか。ともあれこの場面は、再び通いだしたものの、今尚まだ

明るい所で顔を見合ってもいない、というもどかしさの、十一月の末か十二月の初め頃の話となっている。あと、仕込みの済んだ姫を、今後「正身」と呼ぶかどうかにも気に為る。

されど(しかし)、*みづからは(姫本人は)見えたまふべくもあらず(姿を御見せになりそうに無い)。几帳など、いたく損なはれたるものから(ひどく傷んではいるが)、年経にける(何年も)立ちど変はらず(置き場所を変えていないので)、おしやりなど乱れねば(源氏が押してずらしたりもできないので)、心もとなくて(余計見難かったが)、御達四、五人みたり(女房の四、五人が廂に居るのが見えた)。御台(みだい、姫のお膳には)、秘色(ひそく、青磁食器)やうの(などの)唐土(もろこし、唐製)のものなれど、*人悪ろきに(ひとわるきに、古ぼけてみすぼらしく)、何のくさはひもなく(とりたてての御数も無く)あはれげなる(貧しそうで)、まかでて(そのお膳を姫が居る母屋から下げて)人びと食ふ(廂で女房たちがそのお下がり食べていた)。*此处では姫を「正身」と呼ばないが、既に命婦の手引きではない、と言う意味かも知れない。本帖に於ける命婦は、姫はおろか源氏すら差し置いての、主役である。*「人悪し」は<人から良く無いと見くびられる状態>と古語辞典に有る。

隅の間ばかりにぞ(廂の角間の方という)、いと寒げなる(とても寒そうにしている)女ばら(女房たちが)、白き衣の(しろききぬの、白い着物の)言い知らず煤けたるに(いひしらずすすけたる、言い様も無くすすけた物を着て)、きたなげなる(汚れた)褶(しびら、礼装前掛けを)引き結ひつけたる腰つき、頑し気なり(かたくなしげなり、習わしに拘る古めかしさだった)。さすがに(また如何にも其れらしく)櫛おし(髪を後へ捌いた櫛が)垂れて挿したる(垂れ下がり気味の顔つきで)、内教坊(ないけうぼう、宮中の芸妓歌舞練習所)、内侍所(ないしどころ、女官訓練所)のほどに(などには)、かかる者どもあるはやと(こうした古めかしい格好の者どもも居たりしたなど)と思い出して、をかし(面白かった)。かけても(しかし、まさか実生活でこのような格好で)、人のあたりに近うふるまふ者とも(主人に側仕えする女房が居るなどとは)知りたまはざりけり(源氏は思いも寄り為さらない事だった)。

「あはれ(いやですねえ)、さも寒き年かな(なんて寒い年なんでしょう)。命長ければ(長生きすると)、かかる世にもあふものなりけり(こんな目にも遭うものでしょうか)」とて、うち泣くもあり(と愚痴る者も居た)。

「故宮おはしまし世を(宮様が生きていらした時の暮らしを)、などてからしと思ひけむ(どうして辛いと思えましょう)。かく*頼みなくても(こうして給付の無いままで)過ぐるものなりけり(もう何年も暮らしてきましたからねえ)」とて(と言って)、飛び立ちぬべくふるふもあり(寒さで床を飛び上がりそうに震える者も居た)。*Web サイト「官制大観」の説明に拠ると、位階俸給は主に親王に与えられるとあり、そのまま帝位が他家勢力に移れば給付は無くなる。親王である内に実力で公職に就くとか人脈を広げるとかして措かないと、意外と没落は早いのかも知れない。常陸宮存命中でも人の出入りは少なかつたらしいので、今となっては故宮邸では蓄えを食い潰すしか無さそうだ。

さまざまに人悪ろきことどもを(色々と人聞き悪い台所事情を)、愁へあへるを(女房たちが嘆き合っているのを)聞きたまふも(お聞きになるのも)、かたはらいたければ(いたたまれないので)、たちのきて(源氏はいったん立ち退いて)、ただ今おはするやうにて(たった今来たような振りをして)、うちたたきたまふ(格子戸を叩いて来訪をお知らせになる)。(すると女房たちは)「そ

そや(それ、それ、殿のお越しですよ)」など言ひて、火とり直し(火を新しく明るくして)、格子放ちて入れたてまつる(格子戸を開けて源氏を中に御案内申し上げる)。

侍従は、齋院(さいみん、賀茂神社奉仕の内親王)に参り通ふ若人にて(に仕えて宮司に出勤する若女官になっていて)、この頃はなかりけり(この頃は邸に居なかった)。いよいよ(それですます)あやしう(偏屈で)ひなびたる限りにて(鄙びる一方の)、見ならはぬ心地ぞする(世離れた邸の印象だった)。

いとど(本当に寒くて)、愁ふなりつる雪(うれふなりつるゆき、鬱陶しい雪が)、かきたれ(幕を降ろすように視界を遮って)いみじう降りけり(大量に降った)。空の気色はげしう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人もなし。かの(丁度過日に夕顔を連れて行った彼の荒れ院での)、ものに襲はれし折思し出でられて(夕顔が物に取り憑かれて死んだ日の暗がり)が思い出されて、荒れたるさまは劣らざるを(この邸の荒廃ぶりは彼の荒れ院に劣らないが)、ほどの狭う(院よりは小じんまりとして)、人気のすこしあるなどに慰めたれど(女房が少しは居る事などが気休めになったとはいえ)、すごう(凄みがあって)、うたて(気味悪く)いざとき(寝付けない)心地する夜のさまなり。

をかしうも(面白さも)あはれにも(情緒も)、やうかへて(こうした普段とは違う天候の時は風変わりに思えて)、心とまりぬべきありさまを(印象深かったりするものだが)、いと埋れ(姫はひどく内気で)すくよかにて(堅苦しく)、何の栄えなきをぞ(何の情緒も示さないのが)、口惜しう思す(源氏は残念に御思いに為る)。

[第八段 翌朝、姫君の醜貌を見る]

からうして(どうやら降りも落ち着いて)明けぬるけしきなれば(夜が明けたようなので)、格子手づから上げたまひて(源氏は廂に出て格子を自分で開き上げ為されて)、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじう寂しげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて(このまま直ぐ帰ってしまうのも興醒めに思えて)、

「をかしきほどの空も見たまへ(雪景色を御覧なさいな)。尽きせぬ御心の隔てこそ(いつまでも意固地に他人行儀では)、わりなけれ(詰まらない)」と、恨みきこえたまふ(不満を口に為された)。まだほの暗けれど、雪の光にいとど清らに(きよらに、美しく)若う見えたまふを(若々しい源氏の姿を)、老い人ども(老女房たちは)笑みさかえて(喜色満面で)見たてまつる(拝見する)。

「はや出でさせたまへ(さあ早く出為さります)。あぢきなし(仰せに従わなくては失礼です)。心うつくしきこそ(素直に為されませんと)」など教へきこゆれば(などと姫に教えて差し上げれば)、さすがに(言われた通りに)、人の聞こゆることを(女房に言われたことに)えいなびたまはぬ御心にて(決して逆らい為さらぬ姫は)、とかう引きつくるひて(取り敢えずの見繕いで)、みざり出でたまへり(膝を進めて廂に出なされた)。

見ぬやうにて(源氏は姫を見ないようにして)、外の方を眺めたまへれど、後目(しりめ、横目)はただならず(は興味津々の面持ち)。「いかにぞ、うちとけまさりの(思った以上の美点が)、い

ささかもあらばうれしからむ(少しでも在れば嬉しいが)」と思すも(と御思いになるのも)、あながちなる御心なりや(身最眞のお気持ちというものでしょうか)。

まづ(それが先ず)、居丈(みだけ、座高)の高く、を背長(をせなが、胴長)に見えたまふに、「さればよ(こういうことか)」と、*胸つぶれぬ(落胆した)。*此処の「胸つぶれ」は<負い目>を感じている訳では無いので、悪い予感についての<予感>が当たったと言うべきだろう。注釈にも<「手さぐりのたどたどしきに怪しう心得ぬこともあるにや」とあった文と呼応する。暗闇なかで手で触れた時に異様に感じていた。>と指摘されている。「あやしう」思っていたから、そこを注意深く「まづ」見た訳だ。そして面白いのは、胴長に落胆する美意識である。大柄の女を揶揄する描写は他にもあったが、胴長は比率だろうし、それぞれにそれなりの味わいが有りそうに思うが、余程極端だったのだろう。蛇足だが、この帖には実勢の衰えた旧家が在りし日の栄光を追って、古い様式に拘る様子を物悲しく描写する箇所が多く、之は今日でも見られる人間模様として理解しやすいが、記述からは源氏その古めかしさに呆れながらも宮筋の家系ゆえに旧家を粗略に扱えないと思う価値観が印象的で、多分其れがこの帖の主眼だろうと再度ノートして置く。

うちつぎて(それに続いて)、あなかたはと(何と不器量など)見ゆるものは、鼻なりけり。ふと目ぞとまる。*普賢菩薩の乗物(ふげんぼさつのりもの、象の鼻)とおぼゆ(の様だ)。あさましう高うのびらかに(驚くほど高くて長くて)、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり(特に異様だった)。*「普賢菩薩」は白象に乗って右に、「文殊菩薩」は獅子に乗って左に、それぞれ「釈迦」に脇侍する、とある。「普賢」は功德、「文殊」は学問、そして「釈迦」は蓮の台座に乗って輝く。そういう釈迦三尊仏の四国八十八ヶ所霊場巡拝用の納経軸がネット販売されているショッピング・サイトを見たことがある。

色は雪恥づかしく(顔色が雪にも増して)白うて真青(さあを)に、額つきこよなうはれたるに(額が大そう広いのに)、なほ(それでも)下がちなる(しもがち、下ぶくれに見える)面やうは(おもやう、顔立ちは)、おほかたおどろおどろしう長きなるべし(全体が余程長いのだろう)。

瘦せたまへること、いとほしげにさらぼひて(気の毒なほど骨ばって)、*肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ(痛々しく着物の上から形が分かった)。「何に(なぜ)残りなう(すっかり見残し無く)見あらはしつらむ(見てしまったのだろう)」と思ふものから(と思いながら)、めづらしきさまのしたれば(余りにも変わった姿なので)、さすがに(どうしても)、うち見やられたまふ(つい目が行ってしまわれる)。*人は人生を肩に背負う、とは良くも言い表したものだが、瘦せた肩はみすぼらしい。其の見窄らしさを、突き放すのか、憐れむのか、無視するのか、自らの事として受け止めるのか、で源氏の性格付けが変わる。源氏は仏心めく気持ちで、姫の見窄らしさを身内の事として認識した、ようだが、源氏が実際に瘦せた肩を抱いて、其れを憐れみでは無く実感、即ち自らの鏡、として労しく慈しんだ、ように情景を思い描くと、源氏自身の論理は別にして、一読者の私としては清涼感を覚える。

頭つき(かしらつき、髪型や)、髪のかかりはしも(その垂れ具合は)、うつくしげに(美しく)めでたしと思ひきこゆる人びとにも(他の優れた女たちにも)、をさをさ(少しも)劣るまじう(劣ることなく)、桂(うちき、部屋着)の裾にたまりて引かれたるほど、一尺(約 30cm)ばかりあまりたらむと見ゆ(腰裾に流れていた)。

着たまへるものどもをさへ言ひたつるも(姫の着ている物まで言い立てるのは)、もの言ひさがないやうなれど(口が過ぎる様でもあるが)、昔物語にも、人の御装束をこそ(服装の事こそ)まづ言ひためれ(初めに言っているようです)。

*聴し色(ゆるしいろ、淡色)のわりなう(すっかり)上白みたる(うはじらみたる、色褪せた)一襲(ひとかさね、重ね下着に)、なごりなう(元の色が分からないほど)黒き(黒ずんだ)桂重ねて(内着を重ねて)、表着には(うはぎには)*黒貂(フルキ、クロテンの外来語)の皮衣(かはぎぬ、毛皮を)、いときよらに(とてもつやつやして)香ばしきを(香を焚き込めてある物を)着たまへり(着て居らっしゃる)。 *「聴し色、許し色」は「禁色」に対して誰でも着用できる衣服の色、とあって、紅や紫の「禁色」も淡い色なら「許し色」とされたという。 *「黒貂の皮衣」とは<ロシアンセーブルの毛皮>で、今日でも高級毛皮の代表だし、当時は宮家だからこそ手に入り、着用を許されたもの、だという。そして此処の描写でも其れ自体は美しい。ただ、語り手の意図は宮家の栄光を自負し其れに縋って生きている没落貴族の象徴として、この毛皮を姫に着せてはいるようだ。古い物を大事にするのは美德だろうが、今現在権勢を振るう者は今の栄光を飾るべく目新しさを追いつけるのである。

古代のゆゑづきたる御装束なれど(毛皮は古風な由緒ある高貴な衣裳だが)、なほ(やはり)若やかなる女の御よそひには(若い女の装いとしては)、*似げなうおどろおどろしきこと(似つかわしく無く仰々しくて)、いともてはやされたり(取って付けたようだった)。されど(とはいえ)、げに(確かに)、この皮なうて(この毛皮無しでは)、はた(さぞ)、寒からましと(寒いだろうと)見ゆる(思える)御顔ざまなるを(姫の顔色に)、心苦しと見たまふ(源氏は没落貴族の悲哀を身につまされて御覧になる)。 *この源氏の毛皮に対する印象は奇妙な今日性を持っている。とはいえ、この時の源氏は今を時めく立場から没落貴族を憐れんで見ているが、姫の貧しさは初めから分かっている事だった。むしろ源氏は其の荒屋の風情の中に、掘り出し物を見つけたかった。其の楽しみが姫の不器量で損なわれた気分で毛皮姿を難じているのだろう。姫が美人だったら、さすがに宮家の姫は別格だ、とか言いそうだ。では何が今日のかといえば、毛皮の廃れである。「動物愛護」の戯言には辟易するが、防寒の新しい素材が次々と開発される<今日性>によって、毛皮が<時代遅れ>のように見られつつあるという、奇妙な似通いが面白い。

何ごとも言はれたまはず(何とも言いようが無く)、我さへ口閉ぢたる心地したまへど(自分まで無口に為ってしまいそうなので)、*例のしじまも心みむと(黙っていなければ為らない訳でもないし)、とかう聞こえたまふに(源氏はあれこれと話し掛けて御覧になるが)、いたう恥ぢらひて(姫は恥らう一方で)、口おほひしたまへるさへ(口を袖で覆い隠すのが)、ひなび古めかしう(野暮で古臭く)、ことごとしく(大袈裟で)、儀式官の練り出でたる臂もち(ぎしきくわんのねりいでたるひちもち、まるで官職が祭礼で笏板を持って肘を張って傅き歩く姿に似たように)おぼえて(思えなさって)、さすがに(そんな風にして)うち笑みたまへるけしき(ふと笑みを綻ばせる姿も)、はしたなう(見た目も悪く)すずろびたり(居た堪れなかった)。いとほしくあはれにて(どうにも気まずく気乗りしないので)、いとど急ぎ出でたまふ(早々に切り上げてお帰りになる)。 *「例のしじま」とは初回到源氏が贈った、「いくそたび君がしじまに負けぬらむ物な言ひそと言はぬ頼みに(和歌6-3)」の事で、何も答えないが黙れとも言わないので何度も聞き返す、と言う意味なので、此処でもまた何かと問い掛けを試みる。

「頼もしき人なき御ありさまを(頼り無げな貴女を)、見そめたる人には(娶った私には)、疎からず思ひ(遠慮なく)むつびたまはむこそ(親しく為されてこそ)、本意ある心地すべけれ(私の望む所です)。ゆるしなき御けしきなれば(余所余所しい態度が)、つらう(辛くて)」など(などと源氏は)、ことつけて(早く帰る言い訳のように)、

「朝日さす軒の垂氷は解けながら、などかつららの結ぼほるらむ」(和歌 6-8)

「情けで氷柱は解けたのに、溶かした情けが凍りつく」(意識 6-8)

*「軒の垂氷(たるひ)」とは正に<つらら>の事だが、後節に「つらら」とあるのは同じ<つらら>の事でもあるが寧ろ第一義には池などの<張り詰めた氷>を言う、らしい。また「結ぼほる」は<固まる><解け難い><気が塞ぐ><縁を結ぶ>とあって、意味深だ。情景は、「朝日が差して軒の氷柱は解けたのに、池の氷は張り詰めたままだ」、と言う冬景色には違いない。そして姫に対しての意は「折角情を交わしたのに、何故か心は強張ったままですね」と嘆きを繰り返している。また内意は「朝日が差したツララのような赤い鼻をした女に男のハシラを挿して濡らしたら、何故か男のハシラの方が冷えて固まってしまった」という皮肉だが、景色のままの言葉遊びで軽く仕上げている。いやしかし、そこまで軽くしなければ遣る瀬無いほど、源氏の心は萎えている。姫は少し身軽になったが、源氏は一気に重たくなった。

とのたまへど(と仰ったが姫は)、ただ「むむ」とうち笑ひて(と含み笑いを為されたまま)、いと口重げなるも(とても返歌を遣しそうに無いので)いとほしければ(立ち止まるのも気まづくなって)、出でたまひぬ(源氏は邸を御出に為った)。

御車寄せたる*中門の(みくるまよせたるちゅうもの)、いといたう(とてもひどく)ゆがみよろぼひて(傾き崩れ掛けて)、夜目にこそ(よめにこそ、夜見る分には)、しるきながらも(分かっ
ていても)よろづ隠ろへたること多かりけれ(何かと難が隠れること多かったが、朝に改めて見れば)、いとあはれに(とても情けなく)さびしく荒れまどへるに(無残に荒れ放題ではあったが)、松の雪のみ(松の枝の雪だけが)暖かげに(綿みたいに暖かそうに)降り積める、山里の心地して、ものあはれなるを(それなりの風情があったので)、 *「中門」は対の屋から庭にせり出した廊下を、車を通す為に切り通した門(古語辞典)。

「かの人びとの言ひし*葎の門は、かうやうなる所なりけむかし。げに(かの人びとが話した女のような)、心苦しからうたげならむ人をここに*据ゑて(たまらなく可愛らしい女を此処に住まわせて)、うしろめたう(掛かり切りで)恋しと思はばや(求め合ってみたいものだ)。 *「葎の門(むぐらのかど、草生す貧家)」は、今年の「長雨晴れ間なきころ(夏の五月雨の季節)」に源氏の御宿直所なる淑景舎(桐壺)で行われた<雨夜の品定め>で中将が言った、「さびしくあばれたらむ 葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえぬ」、を受ける。話意は、意外な所で人知れず掘り出し物を手に入れたいという男心だろうが、「かの人びと」とあるから左馬頭や式部丞の語った女たちも含む「らうたげならむ人」が、源氏の理解では<品定め座の主題>だったらしい。我ながら口濃い気もするが、「らうたげならむ人」はどうも引掛かる。「労た気ならん人」は<弱々しく見える人>なので<庇ってやりたい人>なのだろう。この<上から目線>には、複雑な分業構造の制度組織に生きる現代人は、王家の威光が管理責任を果たせない実情を知っている
ので反感するが、王家の威光が社会的実効性を持っていた時には、実に尊く有り難かったに違いない。古文の「思ひ上がる」には<「つけあがる」「いい気になる」という意味合いはなく、誇り高い自負>と古語辞典にも有るが、貯え少

なく土木建築も進まない一次産業規模経済基盤社会にあって、少ない蓄えを王家に集中する以外には富を実現できない人びとの、厳しくも手応えの有る暮らしが其処に有る。その記憶は現代人にもあって、男性律がことごとく力を失う中にもあって、女性律に縋って<文化>を信じようとする。*「据ゑて」は姫とは別の人をく住まわせてと言っている事に為るが、寧ろ事此処に及んでも源氏は未だに夕顔の面影を求めている、という事を説明しているようだ。と同時に、作文技法として「うしろめたう」という言葉を此処に配する為の言い回しにもなっている。そして何と、夕顔の面影にこだわる源氏の事情が次に明かされる、という見過ごせない文でも有る。

あるまじきもの思ひは(藤壺との倫ならぬ恋は)、それに紛れなむかし(それで紛れるかもしれない)と思ふやうなる(と思えるような)住みかに合はぬ(風情あるこの家に似合わない)御ありさまは(姫の御器量は)、取るべきかたなし(見るべき所が一つもない)」と思ひながら、「あるまじきもの思ひ」の直訳は<有っては成らない世事の悩み事>だが、<世事の悩み事>は「あるまじき」故に憚って遠回しに言う<恋愛>であり、誇り高い種付けを旨とする王家の君をして「あるまじき」<恋愛>とは、<王族内での不倫>以外には有り得ない。となると、既に若紫巻で本年四月に義母宮の藤壺との密通が果たされたと語られているので、この「あるまじきものおもひ」は<藤壺との不倫>であり、今日では其処まで言い換えないと訳す意味がない、ように私は思う。更に、その密通の際に藤壺が「あさましかりしを(源氏のホコを受け入れた自分のホトの火照りの浅ましかったさまを)思し出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを(一生の過ちと御思いに成って)、さてだに(それ一度きりで)やみなむと(止めようと)深う思したる」にも関わらず、また今度も受け入れてしまった自責の念に苦しむという記述があった。そして、その「あさましかりし」見初めが昨年晩春か初夏であったらしい事が、簾木巻に於いて昨年入梅時の雨夜の品定めでの源氏の艶姿で仄めかされ、梅雨明けの方違えで紀伊守邸に押し掛けた際に立ち聞きした女房たちの噂話をに「胸つぶれる」思いをしていた事からも示唆されていた。その方違えの直後か同じ頃に源氏は夕顔を見つけている。見つけた時点では源氏は夕顔の素姓を知らなかったが、惟光が調査し続けて秋口には夕顔が頭中将が雨夜の品定めで打明けた常夏と知った。源氏は夕顔が中将から逃げた女と知った上で関係したが、私は其を源氏の意地汚い性格によるものとしてだけ考えていた。此処で語られている藤壺との不倫を紛らわそうとする悩み深さまでは思いつかなかった。源氏はやはり相当罪深さに恐れ慄いていた、ということか。だから気弱になって何かに縋りたかった。それも神仏ではなく、実際の手助けが欲しかった。そして、身近で最も頼りになりそうな中将の弱みらしき夕顔を、漠然とだろが仲間を得る保険として留保したかった、ということか。悪意の程はともかくも、それは源氏の弱さから出た深緑には違いない。最も信頼する中将にすら、深緑の染みを付けてしまう源氏の屈折は、既に確執を孕んでいる。

「我ならぬ人は(私でなければ、例えば頭の君には)、まして見忍びてむや(とても面倒を見ることに辛抱し切れないだろう)。わがかうて(私がこうして)見馴れけるは(通い馴染むことになったのは)、故親王の(こみこ、故常陸宮の)*うしろめたしと(後顧の憂いと)たぐへ置き(頼み置き)たまひけむ(為さった)魂のしるべなめり(靈魂のお導きなのだろう)」とぞ思さるる(とまで御考えになった)。*この故常陸宮が女君を「後見」たい心と、先の源氏がこの風情在る邸に気の利いた女を「後見」たい心との対比で、源氏の身勝手な思いより、一族の繁栄を末裔に託したい宮様の御遺志が勝ったという、些か仏法の説教めいた語り口となっている。

橘の木の埋もれたる(門の前の橘の木が雪に埋もれているのを)、御隨身召して払はせたまふ(源氏は隨身を呼んで枝を払わせ為された)。うらやみ顔に(すると橘への気遣いを羨む様に)、松の木のおのれ起きかへりて(松の枝がひとりでに雪を払い避けて起き返ると)、さとこぼるる雪も(さつとこぼれた雪が)、「*名に立つ末の(名高い末の松山の浪越え)」と見ゆるなどを(のように

思えたので、「*いと深からずとも(然程深い思いではなくても)、なだらかなるほどに(軽い情景詠みだけでも)あひしらはむ人もがな(こなす人が居て欲しい)」と見たまふ(と眺め為さる)。
*原文注釈に、《『源氏積』は「我が袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬ日はなし」(後撰集、恋二、六八四、土左)を指摘》、とある。「末の松山(すゑのまつやま)」については、宮城か岩手にあった名勝らしいが不詳との事で、歌枕としては別の愛人に心移すことの縁に用いる(古語辞典)、とある。是だけでは意味不明なので「末の松山」をWeb検索すると、「末の松山浪越え」が常套句になっていて、景色の良い松の大木が大津波の目印にでもなっていたのか、余程の津波でも其の松を越える事は無いという事から、「浪越え」は一大事を意味する言葉らしく、それが恋歌の中では心変わりを示す、という事らしい。それが引歌では、「空より波の越えぬ日はなしー津波が松を越えない日は無いー大泣きしない日は無い」という安売り状態で、大意は「在り得ないと信じていたのに貴方は心変わりして裏切ったので、私は涙で袖を濡らす毎日だ」、ということだろう。雪が松の枝からバサッと落ちたのを見て、源氏は松の大木に大波がザブッと押し寄せた絵を思い描いた、といった処か。ところで此処の文は「末のと見ゆるなどをいと深からず」とも読めて、姫の象の赤鼻を見てしまった源氏がこの時点で姫を「紅花=末摘花」と感じていたら、落ちた雪にく末摘花に見える姫は深く思える女ではなかった>という自らの落胆を重ねた、ようにも見える。それだけに「*いと深からずとも」という言い方は、それで何も<心変わり>とか<失恋>とかまで詠み込まないまでも、趣き深いこの風情に何か気の利いた文句の歌でも一つ誰か、例えば今は居ない侍従、が言わないものか、とつくづく思った、という所なのだろう。

御車出づべき門は(御車を出す門は)、まだ開けざりければ(まだ開けられていなかった)、鍵の預かり(鍵の番人を)尋ね出でたれば(呼び出した所)、翁の(年取った男で)いとみじきぞ(ひどく老け込んだ者が)出で来たる(遣って来た)。娘にや、孫にや、はしたなる(大人とも子供とも付かない)大ききの女の、衣は雪にあひて(着物は雪の白さに対して)煤けまどひ(すすけ汚れて)、寒しと思へるけしき(寒そうな様も)、深うて(深々と)、あやしきものに(在り合わせの何かの中に)火をただほのかに入れて(火を少し灯して)袖ぐくみに持たり(袖で覆って持って居る)。

翁、門をえ開けやらねば(老人が門を良く開けられないので)、寄りてひき助くる(その女が近寄って一緒に引いたが)、いとかたくななり(さっぱり開かない)。御供の人(源氏の供人が)、寄りてぞ開けつる(手を貸してやっと開いた)。

「降りにける頭の雪を見る人も、劣らず濡らす朝の袖かな (和歌 6-9)

「雪が重たい門だから、余計曲がって開けにくい (意識 6-9)

*歌の直前に俄かに登場する人物は、其の歌の為にわざわざ出て来る事がある。今回も其の手法に思えるが、其れにしては歌自体が然程巧妙に感じられない。わざわざ見窄らしい老人を登場させて、「古りにける頭の行き」による白髪に「降りにける頭の雪」を重ねて、その憐れさに「見る人も劣らず濡らす朝の袖(其を見た誰もが袖を濡らして泣いた朝の寒さだこと)」として読むと、あざと過ぎて面白味がない。妙味は「も」の同列強調くらいで、これはむしろ然様にも読める言葉遊びの笑える冗談なのだろう。他にも、「触りにける頭の行きを見る人も劣らず濡らす朝の袖かな」なら<撫でた頭の髪の長さを見れば人にも劣らぬ見事さで別れが辛くて泣ける朝だな>とか、「振りにける頭の行きを見る人も劣らず濡らす朝の袖かな」なら<イヤイヤと頭を振って取り纏る女を後にする別れの朝は如何したって泣けてくるさ>とか、有るのか無いのか。マ、無いのかとまで言ってしまう他にも色々言えそうだが、この場での源氏の歌としてはしっくりしない。もっと味わいの有る歌意を求めて「ふりにけるかしらのゆき」を見直してみる

と、情景の対象は「朝の袖かな」で「門の袖(左右の支柱)」と読めるので、「かしらのゆき」は門(の先または上)に積もった雪となり、まとめれば「降り積もった門の雪」となる。そうすると「をみるひと」はくを処理する人たち誰もが「な」なので、通せば「降り積もった門の雪かきをした皆が」だろう。そこで後節の「劣らず濡らす朝の袖かな」を見ると、「おたらずぬらす」のは「涙」では無く正しく「雪」なので、「雪まみれで辛そうな朝の寒さだな」となる。それに、夜のドカ雪は収まっても雪は今も降っているなら、「門の袖」の弁として「皆に開門の労をとらせちゃった「かな」と聞こえてさえる。従ってこの歌は単に、「雪で重く歪んだ門を開けた人たちが皆雪塗れになって寒そうだ」、という情景だけを思い描いた方が余程味わい深い。「濡らす袖」から「涙」を想起しがちだが、また確かに泣きたい位の寒さも詠み込んであるとは思いますが、其れは実際に雪の中で働かなければならない厳しさ故と見るべきだろうし、「涙」に引き摺られて全体の情緒を読む事は危うい。少し食い足りなさは残るが、この開門風景に邸全体の雰囲気が凝縮されているとすれば、やはり「雪」そのものこそがこの歌の情緒だ。広重の絵を見よ、と言った所か。尤も歌川広重は1830年代を駆けた、ずっと最近の人だが。

『*幼き者は形蔽れず(子供は正直だ)』とうち誦じたまひても(という漢詩が源氏の口を吐いたが)、鼻の色に出でて(子供のように見える手伝った女の鼻が寒さで赤くなっているのを見て)、いと寒しと(ひどく御寒い器量に)見えつる御面影(思えた姫の顔立ちが)、ふと思ひ出でられて(ふと思ひ出されて)、ほほ笑まれたまふ(可笑しく御思いに為る)。*「わかきものはかたちかくれず」について注釈は、《『白氏文集』「秦中吟 重賦」の「歳暮れて天地閉じ、陰風破村に生ず、夜けて煙火尽きぬ、霰雪白し紛々たり、幼き者は形蔽れず、老いたる者は躰に温なること無し、悲喘と寒氣と併ら入りて鼻の中にして辛し」とある詩句による。》、とある。意味不明なのでWeb検索で「秦中吟、重賦」を少し調べた。で、少し分かった。「秦中吟しんちゅうぎん」は社会風刺で、「重賦じゅうふ」は重税の嘆き節。詩の主旨は、「経国済民で財を以てて民を救済すべき税なのに、現実には役人が目先の利益で法の主旨を曲げて強権で民から財を奪う」、と嘆く。此処は其中で特に、「冬になって北風が吹き、雪やアラレが降っても、貧者は着る物も儘為らないで苦しんでいる」、という行である。つまり「幼者形不蔽」の原義は、貧しくて体を覆う服が無い、という事だ。詩の結びは、倉庫に眠った財は使わなければ塵になる、と切実に訴えるが、源氏は貧者が寒さで鼻水をたらす行に、開門を手伝った女の鼻水を嚙んで赤らんだ鼻から姫の赤鼻までを連想して面白がっている。源氏が単に寒い情景としてこの詩を取り上げたのか、年が経てば形が崩れる、というこの世のはかなさまで重ねて見たのかは不明だが、引歌自体はその情緒を漂わす。先の「名に立つ末の」でもそうだったが、古歌を引いた軽い記述一つでも、なかなか難解だ。私のような者が当時の宮廷人の常識を踏まえるのは、やっぱり大変で楽しみよりも負担感が多い。

「頭中将に、これを見せたらむ時(この顛末を知られた時は)、いかなることをよそへ言はむ(何と言ひ立てるものか分かったものではない)、常にうかがひ来れば(いつも様子を窺って来ているから)、今見つけられなむ(じきに知られてしまうだろう)」と、術なう思す(諦め為さる)。

世の常なるほどの(姫の器量がありきたりで)、異なることなさならば(これほど奇異で無かったならば)、思ひ捨てても止みぬべきを(気にしなくても済んだものを)、さだかに見たまひて後は(はっきり其の姿を見た後は)、なかなかあはれにいみじくて(かえって特別な縁なのかとひどく気掛かりになって)、まめやかなるさまに(実直なほど細やかに)、常に訪れたまふ(頻りに消息を御遣わしに為る)。

黒貂(フルキ)の皮ならぬ(の毛皮などでは無く)、絹(きぬ、薄織物)、綾(あや、厚織物)、綿(わた、布団)など、若い人ども(古女房たち)の着るべきもののたぐひ、かの翁のためまで、上下(か

みしも、主人から下男まで)思しやりて(思い遣りを心配り為されて)たてまつりたまふ(贈って差し上げ為された)。

かやうのまめやかごとも(此処まで立ち入った憐れみを掛けられても)恥づかしげならぬを(変に惨めに受け取る事も無い姫の様子に)、心やすく(源氏も気楽に構えて)、「さる方の(こうした形の)後見にて(援助で)育まむ(お世話しよう)」と思ほしとりて(と気持ちも定まって)、さまことに(他の女とは違って)、さならぬ(まるで実の)うちとけわざも(身内のように暮らしぶりまで)したまひけり(面倒を見ておやりになりました)。

「かの空蟬の(ところで不器量と言えば彼の空蟬が)、うちとけたりし(暮に興じていた)宵の側目には(夕方の横顔は)、いと悪ろかりし(随分器量の悪い)容貌ざまなれど(顔立ちだったが)、もてなしに隠されて(身嗜みのよさに)、口惜しうはあらざりきかし(がっかりはしなかった)。劣るべきほどの人なりやは(不器量同士ながら姫は空蟬の人となりには及ばない)。*げに『品にもよらぬ』わざなりけり(実に女の良し悪しは身分に依らないものと先に左馬頭が言ってある通りだ)。心ばせのなだらかに(空蟬は心配りに卒が無く)、ねたげなりしを(小憎らしかったが)、負けて(根負けして)止みにしかな(終わりにしたのだった)」と、ものの折ごとには思し出づ(と源氏は何かに付けて御思い出し為された)。*注釈に、《「帚木」巻の左馬頭の言葉「今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ」を受けて、なるほど、言う通りの意。》、とある。が、もう少し詳しく見ないと何が左馬頭の言う通りなのか分からない。左馬頭の言葉は、「今は、ただ、品にもよらじ(家柄では選ばない)。容貌をば(かたちをば、見た目など)さらにも言はじ(さらに問わない)。いと(ひどく)口惜しく(つまらない)拗けがましき(ねぢけがましき、ひねくれた)おぼえだに(印象でさえ)なくは(なければ)、ただ偏に(ひとへに、何よりも)ものまめやかに(実直で)、静かなる心の趣ならむ(おもむきならむ、風情漂う)よるべをぞ(抛り所をこそ)、つひの頼み所には(生涯の伴侶には)思ひおく(考えておく)べかりける(べきなのでしょう)。」とあって、更に続けて、優れているに越したことは無いが、何より温厚が一番、と結論している。なるほど、空蟬に対しては左馬頭の言葉は良く当てはまる。だから今でも心残りだと言うのも肯ける。それに引き換え常陸宮の姫は「容貌」こそ十分に悪いが、没落貴族とはいえ「品」は王家筋で、だからこそ源氏が姫を気掛かりに覚えてもいた。それに、姫には「拗けがましきおぼえ」さえ幾らかは感じられて、其の「拗けがまし」さを源氏が使命感を以って庇おうとする記述も前にあった。とまあ残酷なまでに欠点を競い合う凄まじい対比だが、之は逆に是等の描写の元に成る人が実在していて、其れを明るくとまでは行かなくても軽めに笑い飛ばして、客観的に世の中の有様を面白く、というか興味深く受け止めようとする常套手段とも言うべき語り口で、此処でこういう言い方をする物語構成上の作者の意図も分かるような気がする。というのは本段の書き出しで、夕顔への追慕から空蟬と軒端の萩への追想が語られていたので、此処の記述は其れを受けての纏めと言う位置づけで、この話も<雨夜の品定め>以降の一連の話としての流れの確認、という所なのだろう。

[第九段 歳末に姫君から和歌と衣箱が届けられる]

年も暮れぬ。内裏の宿直所におはしますに、大輔の命婦参れり。御梳櫛(みけづりぐし、髪を梳かす櫛入れ)などには、*懸想だつ筋なく(色事抜きなので)、心やすきものの(普段のお世話とは言うものの)、さすがに(さすがに召人なれば)のたまひ(軽口をたたき)たはぶれなどして(馴れ馴れしく触ったりして)、使ひならしたまへれば(御用立てて居らしたので)、召しなき時も(源氏の御呼び立てが無くても)、聞こゆべき事ある折は(自分から申し上げたい用事があれば)、参り上りけり(命婦は勝手に淑景舎に参上していた)。*召人の昼間の仕事振り作法の描写。

「あやしきことのはべるを(ちょっと変わった事が在るのですが)、聞こえさせざらむもひがひがしう(申し上げずに居るのもどうかと)、思ひたまへわづらひて(思えば困ってしまいました)」と、ほほ笑みて聞こえやらぬを(と笑みがちに命婦が言い掛けると)、

「何さまのことぞ(何の話かな)。我にはつつむことあらじと(私に隠す事など無いだろう)、なむ思ふ(と思うけど)」とのたまへば(と源氏は御話しなされたが、命婦は)、

「いかがは(どうでしょうか)。みづからの愁へは、かしこくとも、まづこそは(自分の悩みなら、畏れ多くも、直ぐ申し上げますが)。これは、いと聞こえさせにくくなむ(本当に申し上げ難い事で御座いますので)」と、いたう(と嫌に)言籠め(ことごめ、口ごもる)たれば(ので)、

「例の(また)、艶なる(おもわせぶりな)」と憎みたまふ(と源氏は面倒に思われる。すると命婦は)。「かの宮よりはべる御文(姫宮からの御手紙で御座います)」とて取り出でたり(とって御文を差し出した)。

「まして(だったらなおさら)、これは取り隠すべきことかは(隠す事も無いだろうに)」とて(と言って源氏は)、取りたまふも(手紙を手にとって御覧に為ったが)、胸つぶる(それが驚きだった)。
*陸奥紙(むつのくにがみ)の厚肥えたるに(あつごえたるに、湿気て黄ばんだ紙に)、匂ひばかりは深うしめたまへり(薫香だけは深く焚き染めてあった)。いとよう書きおほせたり(よくもまあこんな紙に書き切ったものだ)。歌も(その歌というのもの)、 *「陸奥紙」は檀紙の事で陸奥が主たる産地だった、との事。「檀紙(だんし)」は、「厚手で白く、表面に縮緬(ちりめん)のような細かいしわがある。最も上質の紙。昔は檀(まゆみ)の樹皮で作られ、包装・文書・表具等の用に供された(古語辞典)」とある。本来は真っ白の最上の恋文用紙であり、だからこそ女房たちも自信を持って、姫に其の使用をお勧めした、のだらう。拙いのは、丈夫な厚手の紙だったので、長い事使わないで保管している内に古くなって湿気て「厚肥え」てしまっていた事だった。

「唐衣君が心のつらければ、袂(たもと)はかくぞ濡ち(そぼち)つつのみ」(和歌 6-10)

「この服が似合う姿を待ち侘びて、袂かざして遙か眺める」(意識 6-10)

*記念すべき姫宮の処女作である。相聞なので、特別な思いや気の利いた言い回しあたりが期待されるのだろうが、歌の内容以前にブヨブヨの包装紙に書かれては引く、というか興醒めか。「唐衣」は<からぎぬ>と読めば女房装束の飾り上着の事らしいが、此处では<からころも>の当て字らしい。そこで「からころも」だが、元々は唐風の着物の事らしいが、枕詞としては単に着物の意味で用いられ、衣服の縁語として意味の如何に関らず<きる・たつ・かへす・ひも・そで>などの音に掛かる(古語辞典)、との事。此处では「着身(衣を着る体)」の意味で「君」に掛かる、ということか。続く「こころのつらければ」は、「君が心の辛ければ(貴方の気持ちが冷たいので)」我が「心の辛ければ(恋心が切なくて)」という、重複文。まとめれば、「この服を着る貴方の気持ちが冷淡で、私は辛くて袖をこんなに濡らして泣くばかりです」、という無沙汰を嘆く歌。無沙汰を嘆く相聞歌は、会いたい気持ちの表明として懸想文の常套句だろうから、在り来たりと言うか、余程の工夫が無いと形式的で面白味に欠ける、ということに成りかねないようだ。下手をすれば拙さや幼さを感じさせるもので、マ、源氏にしてみれば子供がたどたどしく喋っているように思えたのかも知れない。それが本当に子供なら可愛げも在りそうだが、この姫では、という所か。だから、凄くイイ女が詠んだ歌だとしたなら、評価は変わるんじゃないかな。例えば、なんて愛しいんだろうとかさ。それで

も、やっぱり厚紙はイタダケナイか。ただ私には、「歌も」とまで邪険にされるほどの駄作との実感は無い。尤も実感としては、他の歌についても直ちに良し悪しが分かることなど、私には殆んど無いが。

心得ず(源氏は「からころも」の意味が分からず)うちかたぶきたまへるに(首を傾げて居らしたが)、包みに(命婦が姫からの贈り物として)、衣管(ころもばこ、衣裳箱)の重りかに(の重そうで)古代なる(古風な物を)うち置きて(前に置いて)、おし出でたり(押し出してきた)。

「これを、いかでかは(どうしたら)、かたはらいたく(執り成し難い困り物と)思ひたまへざらむ(思い致さずに居れましようか)。されど、朔日(ついたち、元日)の御よそひとて、わざとはべるめるを(わざわざ姫が御用意された物を)、はしたなうは(変だからと言って)え返しはべらず(とても御返し出来るものでは御座いません)。ひとり引き籠めはべらむも(勝手にしまい込んで置きましても)、人の御心違ひはべるべければ(姫のお気持ちに背いてしまいますから)、御覽ぜさせてこそは(先ずは殿に御覧頂いてからと、存じまして)」と聞こゆれば(と命婦が申し上げると、源氏は)、*「朔日の御よそひ」について注釈は、「正月の衣装。姫宮はしきたりを守り夫の正月の衣装の世話をしようとした。」、とある。女版<寅さん>か。いろんな意味で、泣けてくる。

「引き籠められなむは(仕舞い込まれてしまっては)、からかりなまし(面白くなかっただろうに)。*袖まきほさむ人もなき身に(独り寝の寂しい身には)いとうれしき心ざしにこそは(本当に嬉しい心遣いだ)」とのたまひて(と駄洒落を言ったきり)、ことにも言はれたまはず(後は特に何も仰らない)。*「袖まきほさむ人もなき身」について注釈は、《『源氏積』は「あは雪は今朝はな降りそ白妙の袖枕き欲さむ(そでまきほさむ)人もあらなくに」(古今六帖)を指摘》、とある。引歌は、「淡雪は今朝は降ってくるな、同じ白でもこの袖枕で添い寝してくれる人も居ないのだから」、という一人寝の寂しさを嘆く歌だろうか。姫が贈り物に添えた歌の<袂>という言葉で<袖>という言葉で返して、一目で厄介そうに感じたその品を迷惑そうに泣けて来る思いで有難く頂戴せざるを得ない立場を自嘲して洒落た言い回しをした、ということらしい。

「さても(それにしても)、*あさましの口つきや(あきれた歌の詠み方だ)。これこそは手づからの御ことの限りなめれ(これがご自身の歌詠みの精一杯の所なのだろう)。侍従こそとり直すべかめれ(侍従がいれば手直ししただろうに)。また、筆のしりとる博士ぞなかべき(書き方を教える者も居なかったんだな)」と、言ふかひなく思す(言ってもしょうがないと諦め為さる)。心を尽くして(そんな姫が苦勞して)詠み出でたまひつらむほどを思すに(御詠みになったであろう様子を御想像なされて源氏が)、*「あさまし」は<あきれて興が醒める>と古語辞典にある。「口つき」は<口の形>または<ものの言い方>。そして、源氏は歌の内容と厚紙使用と字の書き方との全てを難じているようだ。歌の雑感でノートしたが、厚紙使用はダメだろうが、歌の内容や字の書き方などは「らうたげならむ人」なら修正のし甲斐もありそうだが、やはり姫は「らうたげならむ人」ではなかった、ということなんだろうな。

「いともかしこき方とは(まことに畏れ多い歌というのは)、これをも言ふべかりけり(こういうものの事を言うべきなんだろうなあ)」と、ほほ笑みて見たまふを(自嘲なさるのを)、命婦、面(おもて、顔を)赤みて(赤くして)見たてまつる(恐縮する)。

(その衣管の包みは)*今様色(いまやういろ、流行色)の、えゆるすまじく(許せないほど)艶なう(つやなう、光沢の無い)古めきたる(古めかしい織りの)直衣(なほし、平上着)の、裏表(うら

うへ)ひとしう(同様に)こまやかなる(濃色で)、いとなほなほしう(全く平凡なものだと)、つまづまぞ見えたる(ちょっと見ただけで分かる、ので手にとって御覧になることも為さらない)。

*「今様色」は、「染色の名。濃い紅梅色という」(古語辞典)、とある。注釈には、「一説に、〈禁色〉に近い色なのでくえ許すまじく」と洒落ている、とある、とある。ただ、話の上での整合性からすれば、この直衣が紅花染めで無いと源氏が次に詠む歌が生きてこない。

「あさまし(何だ此れは)」と思すに(と御思いに為った源氏が)、この文をひろげながら(手紙を広げながら)、端に手習ひすさびたまふを(其の端に走り書きなされるのを)、側目に見れば(命婦が横目で見ると)、

「なつかしき色ともなしに何にこの、すゑつむ花を袖に触れけむ (和歌 6-11)

「知らずに末摘む花びらが、こんなに真っ赤になるなんて (意訳 6-11)

色濃き花と見しかども(色の濃い花とは思ったんだが)」など、書きけがしたまふ(などと書き汚し為さる)。「色濃き花と見しかども」について注釈は、《『源氏積』は「くれなゐ(紅、紅花)を色濃き花と見しかども人をあく(飽く・灰汁)だにうつろひ(移ろひ)にけり」(出典未詳)を指摘。》、とある。引歌は、「紅花染めを着た女は情け深いと思っていたら、紅花染めが灰汁で色褪せるように私を見限って心変わりしてしまった」、と凝っている。しかし源氏はこの歌の音だけを準えて書きなぐった、ように思う。贈られた直衣に対して、この歌にある〈色褪せ〉や〈心変わり〉に関する記述は特に無かった。在ったのは「今様色の得許すまじく」という形容である。詰まり「色濃き花」は正に〈色〉が問題となる女としての姫を指している。其れも「得許すまじく」ということは〈禁色〉を意味する。確かに姫は〈禁色〉を許される王家筋の姫宮だった。其れが期待に反して、末詰む(末席を汚す)ような赤鼻の女だった。姫の容姿も異様だったが、没落貴族に有り勝ちな昔の栄光を追う古式にばかり拘る古女房たちに囲まれた、世離れた有様が丸々直衣に反映していたので源氏は〈胸つぶれ〉ていた、のだろう。

花のとがめを(命婦は源氏の走り書きを目にして、其の花の文字から姫への期待はずれのお気持ちは)、なほあるやうあらむと(やはり御在りの様だと)、思ひ合はする折々の(思い当たる節がある)、月影などを(朧月夜からの馴れ初めを)、いとほしきものから(しみじみ思い出すうちに、やがて)、をかしう思ひなりぬ(可笑しくなってきた)。

「紅のひと花衣うすくとも、ひたすら朽す名をし立てずは (和歌 6-12)

「勝手に末詰む花卉の、赤鼻ばかりを言い立てる (意訳 6-12)

*面付きは、「くれなゐの(紅花で)ひとはなころも(一花衣、染めた衣は)うすくとも(色が薄くても)ひたすらくたす(偏にけなす)なをしたてずは(評判を立てられなければ、其れなりの味わいは在ります)」、と最初から弁解がましい。これを、「くれなゐの(赤鼻の姫の)ひとはなころも(人肌心、抱き心地は)うすくとも(期待外れでも)ひたすらくたす(全く駄目と)なをしたてずは(極め付けなければ、其れなりの味わいは在ります)」、と読み替えても印象は同じ。

心苦しの世や(儘ならない世の中で)」と、いといたう馴れて(命婦がまた随分としたり顔で)ひとりごつを(独り言のように言ったので)、

「よきにはあらねど(感心するほどのものでもないが)、かうやうの(せめて是位の)搔い撫でに(かいなでに、上辺だけの即答)だに(だけでもする才が)あらましかば(姫に在ったなら、どんなに救われるか)」と、返す返す口惜し(つくづく惜しまれた)。人のほどの心苦しきに(それでも姫の身分が畏れ多いので)、名の朽ちなむはさすがなり(名が廢れるのはさすがに痛々しい)。

人びと参れば(すると、どうやら其処へ他の女房たちが遣って来たようなので、源氏は)、

「取り隠さむや(これは隠して置くとしよう)。かかるわざは人のするものにやあらむ(これは普通の人のする事では無いだろうしな)」と、うちうめきたまふ(嘆息なさる)。

「何に(どうして)御覧ぜさせつらむ(御覧に入れてしまったのでしょうか)。我さへ(これでは私まで)心なきやうに(常識が無いかのようで)」と(と命婦は)、いと恥づかしくて(ひどく恥じ入って)、やをら(早々に片付けて)下りぬ(自分の曹司に下がった)。

またの日(そして翌日)、上にさぶらへば(命婦が御所に出仕していると)、台盤所(だいばんどころ、清涼殿内女房控室)にさしのぞきたまひて(に源氏がひょっこり顔を出しなされて)、

「くはや(これなんだけど)。昨日の返り事(きのうの返事だよ)。あやしく心ばみ(妙に気になったから)過ぐさるる(書いてきた)」とて(と言って)、投げたまへり(手紙を投げ入れ為された)。女房たち、何ごとならむと、ゆかしがる(居合わせた女房たちは何事だろうと知りたがる)。

「ただ梅の花の色のごと、三笠の山の少女(をとめ)をば捨てて」 *この文句については注釈に依ると、≪『完訳』は「『花鳥余情』は「たたらめの花のごと搔練好むやげに紫の色好むや」(政事要略・衛門府風俗歌)を掲げる。「たたらめの鼻」(鍛冶の炉をつかさどる巫女の赤鼻)から「ただ梅の花」に転じたか。また「三笠の山」の春日神社が常陸の鹿島神社と同じ祭神ゆえ、常陸宮の姫君を連想」と注す。≫、とある。また「たたらめの花」については不明、ともある。ただ、「のごと(其の花の如き)」「搔い練り(かいねり、紅色の重ね着を)」「好むや(選ぶのか)」「げに(それとも)」「紫の色(紫色の重ね着を)」「好むや(選ぶのか)」とあることから、「たたらめの花」が<紅色>だと知れる。従って源氏はこの歌の文句で、「ちょうど梅の花のような赤い鼻の常陸宮の姫の所に是を届けてくれ」と命婦に符丁した、のだろう。

と(などという歌を源氏が)、歌ひすさびて出でたまひぬるを(口ずさみながら出て行ってしまい為されたのを)、命婦はいとをかしと思ふ(命婦はとても可笑しがった)。心知らぬ人びとは(分けが解らない他の女房たちは)、「なぞ、御ひとりゑみは(何が可笑しくて笑っているの)」と、とがめあへり(口々に命婦に訊ね立てた。すると命婦は答えて、)。

「あらず(いえ別に)。寒き霜朝に(しもあさに、霜が降りる朝に)、搔練好める(歌の文句の搔い練りの方を選んだように)花の色あひや(*鼻を赤くした人でも)見えつらむ(御覧になったのでしょうか)。御つづしり歌の(君が鼻歌で)いとほしき(戯けていらしたので、笑っていただけです)」と言へば、 *此処の口濁しで命婦が思い描いたのは、雪の宮邸中門先を開いた翁の娘だったかもしれないが、いずれにしても他の女房たちにわかる話ではない。

「あながちなる御ことかな(思い過ごして御出でなのでは)。このなかには、丹穂へる(にほへる、赤く萌える)鼻もなかめり(鼻の者は居ませんし)」

「*左近の命婦(さこんのみやうぶ)、肥後の采女(ひごのうねめ)や混じらひつらむ(でも混じっていたのでしょうか)」など、心も得ず言ひしろふ(不審気に言い合う)。*この二人は赤鼻らしい。

御返りたてまつりたれば(そういうわけで源氏の御返事の手紙が届けられたので)、宮には(宮邸では)、女房つどひて(女房たちが集まって)、見めでけり(中を見て感心していた)。

「逢はぬ夜をへだつるなかの衣手に、重ねていとど見もし見よとや」(和歌 6-13)

「ただでさえ逢えない夜は遠いのに、更に隔てる厚手の衣」(意識 6-13)

白き紙に(ただの白い紙に)、捨て書いたまへるしもぞ(ただ書き捨てたようなのが)、なかなかをかしげなる(かえって風情があった)。

晦日の日(*つごもりのひ、大晦日の)、夕つ方、かの御衣管(おんころもばこ)に、「御料(ごれう、御品)」とて(と書いて)、人のたてまつれる(誰かが源氏に贈り申した御流れの)御衣一領(おんぞひとくだり、衣裳一式)、葡萄染(えびぞめ、薄紫)の織物の御衣、また山吹(やまぶき、黄色)か何ぞ、いろいろ見えて(数々取り揃えて)、命婦ぞたてまつりたる(大輔の命婦が源氏からのお返し物として宮邸に持参いたした)。*「つごもり」の語源は「月籠り」。月陰暦で月が隠れる月末を言う。

「ありし(先にお送り申した)色あひを(直衣の色合いが)悪ろしとや(良くなかったとの)見たまひけむ(お見立てか)」と思ひ知らるれど(と気付いた者も居たが)、「かれはた(あれはあれで)、紅の(くれなゐの、赤い色が)重々しかりしをや(重々しいものでした)。さりとも消えじ(まさか無駄にはなりません)」と、ねび人どもは定むる(老女房たちは決め付けた)。

「御歌も、これよりの(此方から姫がお贈りしたものは)、道理聞こえて(理屈が通って)、したたかにこそあれ(しっかりお書き遊ばしてありましたが)、御返りは(御返歌は)、ただをかしき方にこそ(ただ奇をてらってばかりで)」など、口々に言ふ。姫君も、おぼろけならで(大苦心の末に)し出でたまひつる(やと歌い上げた)わぎなれば(作品だったので)、ものにかきつけて(控えを取って)置きたまへりけり(大事にしまって御出でで御座いました)。

[第十段 正月七日夜常陸宮邸に泊まる]

朔日のほど(ついたちのほど、元旦から数日が)過ぎて、今年、*男踏歌(をとこだふか)あるべければ(が催されるので)、例の(また)、所々(其処彼処で君たちが)遊びののしりたまふに(管絃舞踏の練習に物音を立てて)、もの騒がしけれど(騒々しく過ごしていたが)、寂しき所のあはれに思しやらるれば(源氏は古風で廃れた旧常陸宮邸が古式行事に偲ばれて思い遣られたので)、*七日の日の節会(なぬかのひのせちゑ)果てて(が終わって)、夜に入りて、御前(ごぜん、御所表)よりまかでたまひけるを(から退席なされて)、御宿直所に(後宮桐壺の間に)やがてとまりたまひぬるやうにて(その日は泊まるかのように左大臣家筋に思わせて)、夜更かしておはしたり(夜更けてから宮邸に出向かい為されます)。*「踏歌」とは、《中国から伝わった集団歌舞。足を踏み鳴らして

歌い舞うもので、平安時代には宮中の初春の行事として盛行、正月 14 日に「男踏歌」、16 日に「女踏歌」が行われた。その歌詞は、元来は唐詩、のちに催馬楽(さいばら)も用いられ、歌の終わりに「万年(よろずよ)あられ」と唱えたので「あらればしり」ともいう。(Yahoo 辞書)》、とある。地を踏む農耕儀式で、豊作祈願祭とされる。*「七日の日の節会」は<白馬の節会(あをうまのせちゑ)>の事、とある。「白馬の節会」は、《宮中の年中行事の一。陰暦正月 7 日、左右馬寮(めりょう)から白馬を紫宸殿(ししんでん)の庭に引き出し、天覧ののち、群臣に宴を賜った。この日に青馬を見ると年中の邪気が除かれるという中国の故事による。もと青馬を用い、のちには白馬または葦毛の馬を用いたことから、文字は「白馬」と書くようになった。(Yahoo 辞書)》、との事。

例のありさまよりは(以前の有様よりは)、けはひうちそよめき(印象が活気付いて)、世づいたり(普通の家らしくなっていた)。君も(姫君も)、すこし(幾分)たをやぎたまへるけしきもてつけたまへり(床の仕種で和らいだ物腰を身に付けなされて居らした)。「いかにぞ(どの位変わったものか)、改めてひき変へたらむ時(じっくり確かめてみようか以前と引き比べて、この際)」とぞ(というわけで)、思しつづけらる(源氏は姫の様子を窺いなさる)。

日さし出づるほどに(日が出てきてから、朝帰りを急ぎなさらずに)、やすらひなして(ゆっくり休んで)、出でたまふ(寝屋を御出になる)。東の妻戸、おし開けたれば、向ひたる廊の、上もなく(屋根も無く)あばれたれば(壊れていた)、日の脚(ひのあし、日差しが)、ほどなくさし入りて(直接入って)、雪すこし降りたる光に(雪の照り返しも明るく)、いとけざやかに(とてもはっきりと)見入れらる(部屋の奥まで見える)。

御直衣などたてまつるを(源氏が御直衣など身繕いなさるのを)見出だして(寝屋で気付いて)、すこしさし出でて(少し身を出して)、傍ら臥し(かたはらふし、肘支えで)たまへる(半起きなさる姫の)頭つき(かしらつき、髪捌きが)、こぼれ出でたるほど(床に流れて)、いとめでたし(とても美しい)。「生ひなほりを(変わり映えを)見出でたらむ(見届けたい)時(今こそ)」と思されて(と源氏は御思いになって)、格子引き上げたまへり(格子を引き上げなさる)。

いとほしかりしもの懲りに(しかし源氏はかつて姫を尻目に見果てて落胆した後悔から)、上げも果てたまはで(格子を上げ切りなさらず)、脇息(けふそこ、肘掛)をおし寄せて(戸の端にずらして)、*うちかけて(かませでから)、御鬢ぐきの(おんびんぐきの、耳の上の髪筋の)しどけなきを(乱れを)つくろひたまふ(整えなさる)。*薨戸の支えの脇息は半薨の突っ掛え棒代わりにしては下品だし、一枚薨の端を掛けただけでは開口が狭すぎるような気がするが、半薨の記述が無いので一枚戸だろうか。

わりなう古めきたる(すると姫はやたら古めかしい)鏡台の(鏡台に在った)、唐櫛笥(からくしげ、唐風の化粧道具箱)、搔上の笥(かかげのはこ、髪結い道具箱)など、取り出でたり(取り出してきた)。さすがに(その中に)、男の御具(をとこのおんぐ、夫の化粧道具)さへほのぼのあるを(までも僅かながら在るのが)、されてをかしと見たまふ(以前とは少し違うと関心なさる)。

女の御装束(姫の寝乱れを整えた衣服が)、「今日は世づきたり(今日は世間並みだ)」と見ゆるは(と見えるのは)、ありし笥の(晦日に贈られた衣裳箱の)*心葉を(中身を)、さながらなりけり(其のまま着ていたからだった)。さも思しよらず(源氏は在り合わせのお流れを贈ったので何を贈ったかも忘れて、そうとは気付かず)、興ある紋つきて(面白い模様だと)しるき(見覚えがあっ

た)表着(うはぎ)ばかりぞ(だけを)、あやしと思しける(嫌に似ていると御思いになった)。*「心葉(こころば)」は、贈り物に添える飾り、が本義(古語辞典)らしい。此处では其の言葉を象徴的に使って、その贈り物の中身をそっくり其の儘、という事のようなのだ。

「今年だに(今年こそは)、声すこし聞かせたまへかし(声を少し聞かせて下さい)。*待たるるものはさし置かれて(鶯の声よりも)、御けしきの改まらむなむゆかしき(貴方の変わり映えした声が聞きたいものです)」とのたまへば(と源氏が仰ると)、*注釈は、《『奥入』は「あらたまの年立ちかへる朝(あした)より待たるるものは鶯の声」(拾遺集、春、五、素性法師)を指摘。》、とある。この「注」は実に有難い。「元旦に待つ鶯の声」とは如何にも新春の寿ぎの風情だが、「元旦」をく改まって年が元に戻った朝という言い方に、心も新たに新年に臨む潔さが顕れて、人事を尽くして天命を待つ、かのような含みが与えられている。そうであってこそ、わざわざ鶯を引き合いに出して「あらたまらむなむゆかしき」とオチが付いた事になる。

「*さへづる春は」と(と姫は)、からうしてわななかし出でたり(やっとの事で震える声で答えた)。*注釈は、《『源氏積』は「百千鳥(ももちどり、ウグイスの異名)轉る春はものごとく改まれども我ぞふりゆく」(古今集、春上、二八、読人しらず)を指摘。「我ぞ古り行く」というところに主旨がある。源氏の薄い愛情のままわたしは年をとってゆきますの意。》、とある。原文中には鶯と言う固有名詞は出ていない。宮廷人の常識の上での会話であり、其れが成立していること自体で一定の情緒を描写しているのだろう。「鶯が鳴く新春の寿ぎの中でも私は老いて行くばかりです」という恨み節も、情交後では打ち解けた甘えの響き。だから源氏も気を良くして、暗意の「古り行く」を心得た上で、次の言葉を返した。

「さりや(そうだと)。年経ぬるしるしよ(年を重ねた賜物だ)」と(と源氏が)、うち笑ひたまひて(上機嫌で相槌を打ちなされて)、*「夢かぞ見る(夢のようだ)」と(という古い歌を)、うち誦じて出でたまふを(口ずさみながらお帰りになるのを)、見送りて添ひ臥したまへり(姫はお見送り為さりながら脇息に寄り掛かって横たわって居られた)。*注釈は、《『源氏積』は「忘れては夢かぞ思ふ 思ひきや 雪踏み分けて 君を見むとは」(古今集、雑下、九七〇、業平朝臣)を指摘。「夢かぞ思ふ」の一部を即興で「夢かぞ見る」と、より驚きを表すために改変したのであろう。》、とある。「ふと夢だったかと思ってしまう、そう思うほど意外な雪深い里で御目に掛かったもので」という歌だが、吹雪の止んだ朝に初めて姫の姿を明るいところで見つめた時の悪い意味での驚きを、源氏はこの歌に重ねているのだろう。そして其れが夢であって欲しい、という思いを、今やっとな声が聞けて「夢のようだ」という言葉に更に重ねる。此处の会話の遣り取りは実際に発した言葉の少なさの数倍も多弁で凝っている。和歌の嗜みを前提としてという事だから、初めから一部の階層の人たちにとってはその事だろうが、其の文化が一部の人たちとはいえ今日まで引き継がれていてこそ、この物語が生き永らえている背景なのだ、とは思う。

口おほひの側目より(口を覆っている姫君の横顔から)、なほ(やはり)、かの末摘花(かの紅花とは即ち赤鼻が)、いとにほひやかにさし出でたり(とても見事に突き出ていた)。見苦しのわざやと思さる(不細工な事と源氏は御思いになる)。